

平安京右京六条四坊二町跡・西京極遺跡



2007年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



豎穴住居出土弥生土器

平安京右京六条四坊二町跡・西京極遺跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび工場新築工事に伴う平安京跡・西京極遺跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

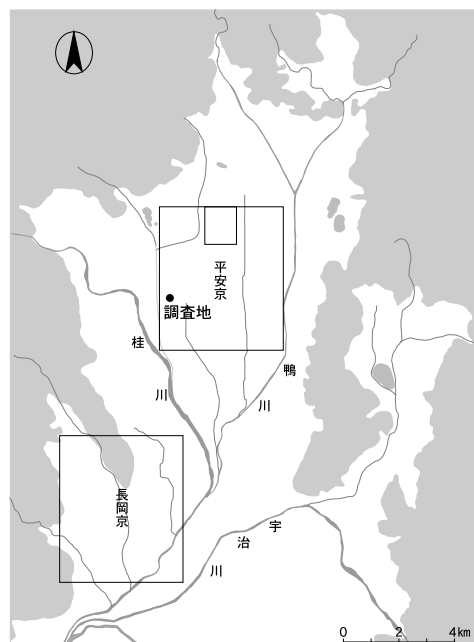
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 19 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京六条四坊二町跡・西京極遺跡
- 2 調査所在地 京都市右京区西院清水町
- 3 委 託 者 共同印刷工業株式会社 代表取締役 江戸宏介
- 4 調査期間 2006年12月11日～2007年2月9日
- 5 調査面積 450 m²
- 6 調査担当者 柏田有香・西森正晃
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「山ノ内」「西京極」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 15 遺物復元 村上 勉・出水みゆき
- 16 基準点測量 宮原健吾
- 17 本書作成 柏田有香
石器の実測・観察は内田好昭が担当した。遺物実測は高橋 潔・西森正晃・吉本健吾が協力した。
- 18 編集・調整 児玉光世
- 19 調査および報告作成にあたり下記の方々のご教示・御協力を得た。（五十音順 / 敬称略）
伊藤淳司、北野信彦、肥塚隆保、高正龍、櫻井拓馬、田中元浩、塚原秀之、西山良平、橋本清一、安永周平、和田晴吾



（調査地点図）

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	2
(1) 周辺の調査	2
(2) 周辺環境	3
3. 遺 構	12
(1) 層序	12
(2) 遺構の概要	12
(3) 平安時代の遺構	12
(4) 奈良時代の遺構	13
(5) 古墳時代の遺構	16
(6) 弥生時代の遺構	18
(7) 時期不明の遺構	34
4. 遺 物	35
(1) 土器・土製品	35
(2) 瓦	57
(3) 木製品	57
(4) 石器	61
(5) 金属製品	76
(6) 玉類	76
(7) 動植物遺体・その他	77
5. ま と め	79
(1) 奈良時代の遺構について	79
(2) 弥生時代後期の遺構・遺物について	79
(3) 調査地の歴史の変遷	81

図版目次

巻頭図版	豎穴住居出土弥生土器
図版 1 遺構	1 第 1 面全景 (北から) 2 掘立柱建物 35 (北から)
図版 2 遺構	1 井戸 249 (北から) 2 井戸 249 枠内 (北から)
図版 3 遺構	1 第 2 面全景 (北から) 2 豎穴住居 246 (北西から)
図版 4 遺構	1 豎穴住居 324 (北から) 2 豎穴住居 324 投棄土器群 (北西から) 3 土壙 349 (北西から)
図版 5 遺構	1 豎穴住居 148・428・475・476 (北東から) 2 豎穴住居 148- D (北東から)
図版 6 遺構	1 豎穴住居 148- D 床面土器 (d) (西から) 2 豎穴住居 148- D 床面土器 (e・f) (北東から) 3 豎穴住居 148- D 床面土器 (g・h・i) (南西から) 4 豎穴住居 148- D 床面土器 (J) (北から)
図版 7 遺構	1 豎穴住居 214 (北から) 2 豎穴住居 214 炉状施設 (北から)
図版 8 遺構	1 豎穴住居 474 (東から) 2 豎穴住居 474 炉状施設 (北西から) 3 炉状施設完掘状況 (北から)
図版 9 遺構	1 豎穴住居 474 炉状施設掘り込み断面 (東から) 2 太型蛤刃石斧出土状況 (南西から) 3 豎穴住居 474 床面土器 (a・b・c) (北から) 4 豎穴住居 474 床面土器 (e) (北西から)
図版 10 遺構	1 柱穴 537 土器出土状況 (南西から) 2 柱穴 538 土器出土状況 (北から) 3 柱穴 503 土器出土状況 (南から) 4 土壙 199 土器出土状況 (東から)
図版 11 遺物	土器類
図版 12 遺物	土器類
図版 13 遺物	土器類

- 図版 14 遺物 土器類
- 図版 15 遺物 土器類
- 図版 16 遺物 土器類
- 図版 17 遺物 土器類
- 図版 18 遺物 井戸粹材
- 図版 19 遺物 井戸粹材
- 図版 20 遺物 石器
- 図版 21 遺物 石器
- 図版 22 遺物 石器
- 図版 23 遺物 1 石器
2 玉類

挿 図 目 次

図 1 調査地位置図 (1 : 2,500)	1
図 2 調査前全景 (北から)	2
図 3 調査風景	2
図 4 調査区配置図 (1 : 400)	3
図 5 周辺調査位置図 (1 : 5,000)	4
図 6 第 1 面平面図 (1 : 150)	8
図 7 第 2 面平面図 (1 : 150)	9
図 8 調査区断面図 1 (1 : 80)	10
図 9 調査区断面図 2 (土層名)	11
図 10 土壌 301 実測図 (1 : 10)	13
図 11 土壌 301 土器出土状況 (南東から)	13
図 12 掘立柱建物 35 実測図 (1 : 50)	14
図 13 井戸 249 断割断面 (北から)	14
図 14 井戸 249 実測図 (1 : 80、1 : 20)	15
図 15 竪穴住居 246・374・339 実測図 (1 : 80)	16
図 16 古墳時代土壌実測図 (1 : 20)	17
図 17 土壌 16 土器出土状況 (西から)	18
図 18 土壌 19 土器出土状況 (南から)	18
図 19 土壌 244 土器出土状況 (東から)	18
図 20 竪穴住居 324 実測図 (1 : 50)	19

図 21	竪穴住居 148・428・475・476 平面図 (1 : 50)	21
図 22	竪穴住居 148・428・475・476 断面図 1 (1 : 50)	22
図 23	竪穴住居 148・428・475・476 断面図 2 (1 : 50)	23
図 24	竪穴住居 148・428・475・476 変遷図 (1 : 200)	25
図 25	竪穴住居 148- D 遺物出土状況図 (1 : 50)	26
図 26	竪穴住居 148- D 銅鏃出土状況 (東から)	27
図 27	竪穴住居 214 炉状施設ガラス小玉出土状況 (北西から)	27
図 28	竪穴住居 214 実測図 (1 : 50)	28
図 29	竪穴住居 474 実測図 (1 : 50)	29
図 30	土壙 479 ガラス小玉出土状況 (西から)	30
図 31	土器埋納柱穴実測図 (1 : 10)	31
図 32	弥生時代土壙実測図 (1 : 20)	32
図 33	土壙 309 (北東から)	33
図 34	集石 285 実測図 (1 : 10)	34
図 35	集石 285 (南から)	34
図 36	土壙 301 出土土器実測図 (1 : 4)	36
図 37	井戸 249 枠内出土土師器実測図 (1 : 4)	37
図 38	井戸 249 枠内出土須恵器実測図 (1 : 4)	38
図 39	円面硯 47	38
図 40	井戸 249 掘形出土土器実測図 (1 : 4)	39
図 41	柱穴 267 出土土器実測図 (1 : 4)	39
図 42	古墳時代土器実測図 (1 : 4)	40
図 43	竪穴住居 324 出土土器実測図 (1 : 4)	42
図 44	竪穴住居 148 出土土器実測図 (1 : 4)	44
図 45	竪穴住居 214・土壙 215 出土土器実測図 (1 : 4)	45
図 46	竪穴住居 474・土壙 479 出土土器実測図 (1 : 4)	46
図 47	土器埋納柱穴、土壙 309・321 出土土器実測図 (1 : 4)	47
図 48	土壙 13 出土土器実測図 (1 : 4)	48
図 49	土壙 143 出土土器実測図 (1 : 4)	49
図 50	土壙 199 出土土器実測図 (1 : 4)	50
図 51	土錘実測図 (1 : 2)	57
図 52	土錘 154	57
図 53	瓦拓影・実測図 (1 : 4)	58
図 54	井戸 249 枠材実測図 1 (1 : 10)	59
図 55	井戸 249 枠材実測図 2 (1 : 10)	60

図 56	石器実測図 1 (1 : 1)	62
図 57	石器実測図 2 (1 : 1)	63
図 58	石器実測図 3 (1 : 1)	64
図 59	石器実測図 4 (1 : 1)	65
図 60	石器実測図 5 (1 : 2)	66
図 61	石器実測図 6 (1 : 2)	67
図 62	石器実測図 7 (1 : 2)	68
図 63	石器実測図 8 (1 : 2)	69
図 64	石器実測図 9 (1 : 2)	70
図 65	石器実測図 10 (1 : 2)	71
図 66	石器実測図 11 (1 : 2)	72
図 67	石器実測図 12 (1 : 2)	73
図 68	銅鏃実測図 (1 : 1)	76
図 69	銅鏃 234	76
図 70	玉類実測図 (1 : 1)	76
図 71	ガラス玉 253	77
図 72	食痕のある種子	78
図 73	赤色顔料	78
図 74	弥生時代後期の竪穴住居配置図 (1 : 400)	80

表 目 次

表 1	周辺調査一覧表	5
表 2	遺構概要表	12
表 3	竪穴住居 148・428・475・476 一覧表	24
表 4	遺物概要表	35
表 5	井戸 249 枠内出土土器比率表	36
表 6	井戸 249 掘形出土土器比率表	39
表 7	土器一覧表	51
表 8	土錘一覧表	58
表 9	井戸材一覧表	61
表 10	石器一覧表	74
表 11	玉類一覧表	77

平安京右京六条四坊二町跡・西京極遺跡

1. 調査経過

この調査は、工場の新築工事に伴うものである。事前の京都市文化市民局文化財保護課による試掘調査の結果を受けて、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が本調査を実施した。

調査地は、現在の葛野大路通と西大路通のほぼ中間地点に位置し、北は万寿寺通に面している。平安京の条坊では、右京六条四坊二町跡にあたる。北は樋口小路、南は六条坊門小路、東は木辻大路、西は菖蒲小路で区切られる町である。条坊復元図によると、調査地付近の万寿寺通は平安京の樋口小路をほぼ踏襲している。また、調査地は、弥生時代から奈良時代の集落跡である西京極遺跡にも該当する。

調査区は、旧建物の基礎が及ぶ範囲を除き、敷地の南側に南北 21 m、東西 20 m に設定した。重機で遺構面まで掘削し、0.9 ~ 1.2 m 掘り下げたところで弥生時代から近世の遺構を検出したため、人力掘削に切り替えて調査を行った。第 1 面として奈良・平安時代と近世の遺構の調査を行い、奈良時代の掘立柱建物・井戸、平安時代の土壌・柱列、近世の土壌を検出した。続いて第 2 面として弥生・古墳時代の遺構の調査を行い、弥生時代の竪穴住居・土壌・溝、古墳時代の竪穴住居・土壌を検出した。弥生時代の竪穴住居は遺存状態が良好で、多種多様の遺物が出土したことから、広報発表を行い成果の公表に努めた。図面作成と写真撮影などの記録終了後、断割を入れて下層を確認し、断面図を作成した。その後、調査区を埋め戻し、全ての調査を終了した。

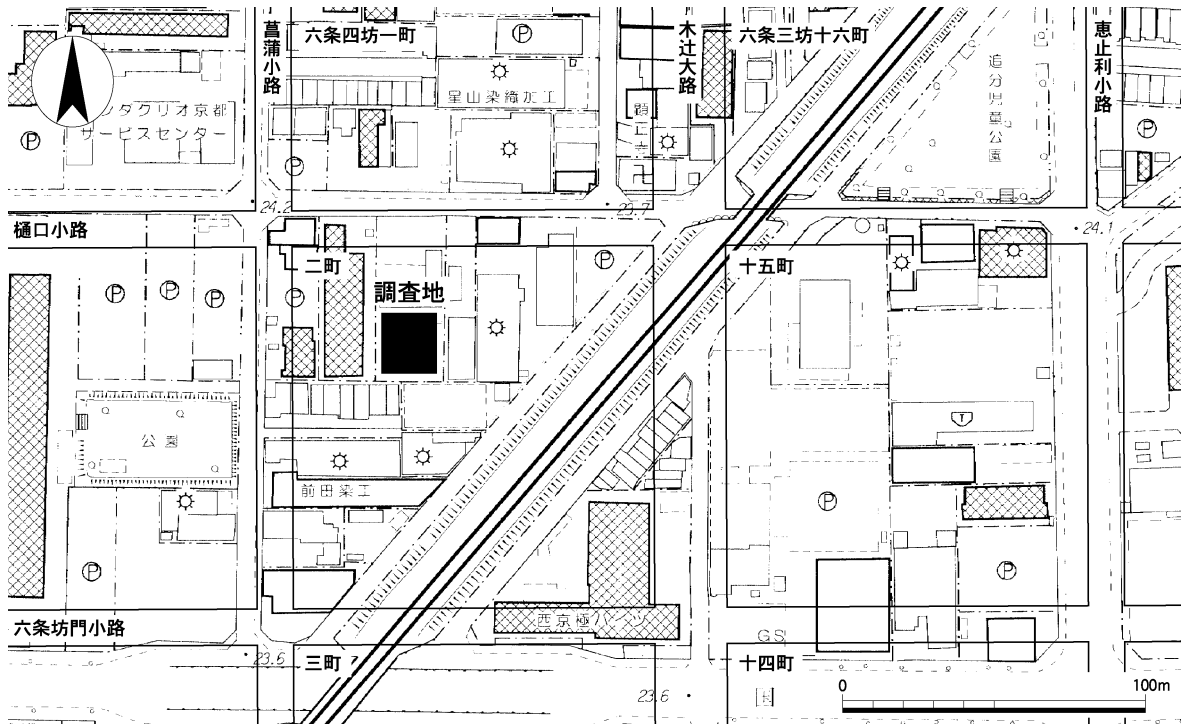


図1 調査地位置図 (1 : 2,500)

2. 位置と環境

(1) 周辺の調査 (図5・表1)

調査地近辺での調査は、古くは1978年の西部幹線公共下水道工事に伴って実施された発掘・立会調査に始まる。この調査は、幅の狭いトレンチでの限られた調査ではあったが、総延長が約25.6 kmにもなり、広範囲にわたる土層堆積状況や遺物包含層の有無についての基礎的データを蓄積した意義は大きい。また近年では、中世以降耕作地として利用されることの多かった当地周辺において宅地開発の進展が目立つようになった。その結果、比較的大規模な発掘調査が行われ、成果の集積が進んでいる。それに伴い、西京極遺跡の範囲の改定が行われ、北は現在の四条通南から南は五条通南まで最大約700 m、東は西小路通から西は葛野大路通の1筋西の通りまで最大約650 mの範囲におよぶ。

西京極遺跡に関連する調査成果としては、調査(67)で縄文時代後期から晩期の遺物が出土した土壌が検出されている。その南東で2006年に行った調査(64)でも縄文時代後晩期の遺物が出土しており、この頃から当地周辺での生活痕跡が認められる。続く弥生時代前期の遺構・遺物の出土例は報告されていないが、弥生時代中期に入ると出土例が増加する。五条通南側の立会調査(52～54)では落ち込みや溝から土器が多量に出土し、五条通北側でも、調査(60)で円形竪穴住居や溝が、立会調査(59)では落ち込みが見つかった。また、2006年の調査(2)では中期から後期の方形周溝墓6基が発見され、西京極遺跡の範囲が北東に広がる契機となった。弥生時代後期のものとしては、今回の調査地に隣接する敷地で1989年に実施された調査(49)で、竪穴住居5棟が出土している他、1994年の調査(28)では、2基の方形周溝墓とそれを削平する6基の竪穴住居が見つかった。古墳時代の遺構は五条通と高辻通の間に集中する。前期の明確な遺構は認められず、中後期、特に後期の遺構・遺物が主体となる。1994年の調査(28)では後期の溝から三輪玉の出土が、1978年の立会調査(32)では子持ち勾玉の出土が報告されている。1990年の調査(67)では後期の竪穴住居が、2006年の調査(64)でも中期から後期の竪穴住居が検出されている。飛鳥・奈良時代の遺構には、調査(28)で検出された飛鳥時代の



図2 調査前全景 (北から)



図3 調査風景

総柱の掘立柱建物と奈良時代の掘立柱建物、調査（64）で見つかった奈良時代の総柱の掘立柱建物と竪穴住居がある。

平安京域に組み込まれてからの遺構としては、調査（67）で平安時代前期の五条大路の路面と南側溝が見つかり、路面では轍の痕跡と足跡が検出された。平安京の西端においても早い段階から条坊が施工され、人の往来が確認できる遺構として注目される。調査（2・28・64）では、平安時代前期の掘立柱建物が見ついている。平安時代中期以降については、中近世の耕作溝や土取り穴が散見されるのみで、明確な遺構は出土していない。宅地としての利用がなくなり、耕作地化していった様子が窺える。

（2）周辺環境

調査地は京都盆地の中央西寄りに位置する。調査地の西約 0.5 km に天神川、約 1.2 km に桂川が南流する。現在の桂川は、嵐山から西京極付近にかけて大きく湾曲し蛇行を繰り返す。湾曲部の外側の侵食

作用によって、このような河道を辿るようになったのは 14 世紀以降とされ、9 世紀段階では、嵐山の南から平安京の南西、旧御室川との合流地点まで、大きく蛇行することなく南東方向に流れていたと推定されている²⁾。つまり、調査地から桂川までの直線距離は、9 世紀以前には今よりさらに西に 1 km 程度離れていたと考えられる。一方、現在の天神川は調査地付近では旧御室川の流れとほぼ一致している。さらに調査地の東約 0.5 km でも縄文時代中期から奈良時代まで存続したと考えられる旧河川がみつかり³⁾、厚い所では 2 m を越える調査地付近の基盤を形成する均質なシルト層の堆積は、これらの河川の氾濫によってゆるやかに堆積し、形成されたものである。調査地はその自然堤防の上に立地している。西京極遺跡における集落域の时期的変動や遺構密度の差は、これら河川やその支流の河道変動や氾濫による微地形の変化に起因するものであろう。また、調査地北西約 0.2 km で 2006 年に実施した調査（64）では、後背湿地と考えられる大規模な落ち込みが見つかった。周辺の調査成果を見ても、同様の湿地状堆積が確認される箇所があり、そうした後背湿地は生産域として利用されていた可能性が高い。

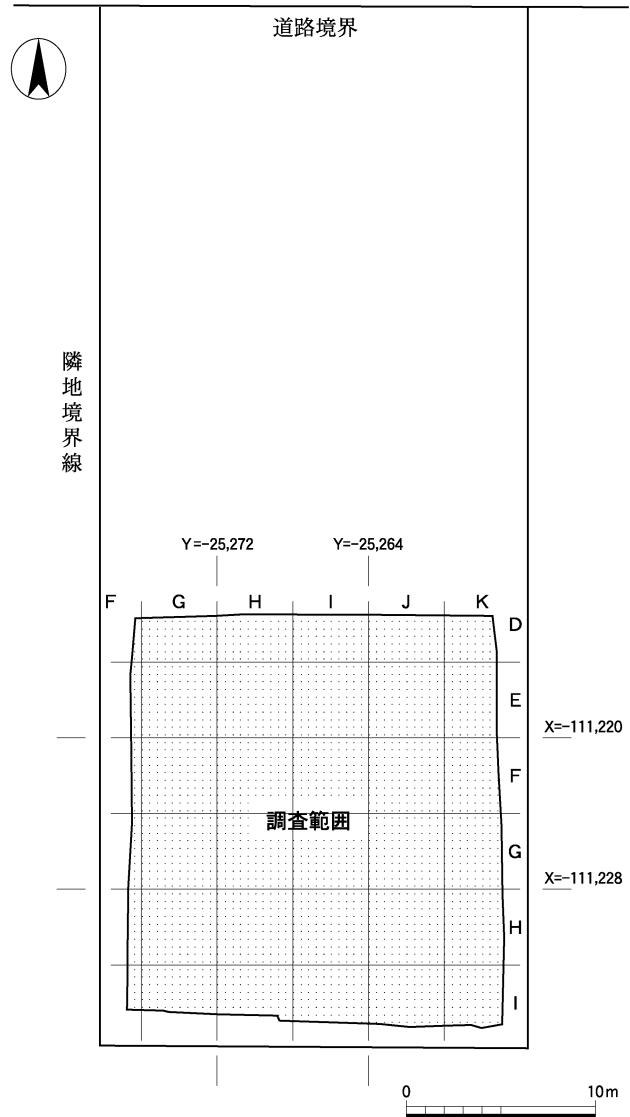


図4 調査区配置図（1：400）

註

- 1) 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課編『京都市遺跡地図台帳 第8版』京都市文化市民局 2007年
- 2) 金田章裕『微地形と中世村落』吉川弘文館 1993年、金田章裕「第1章 郡・条里・交通」『平安京提要』角川書店 1994年、青山宏夫「平安京西効桂川の河道変化と耕地開発」『平安京—京都 都市図と都市構造』京都大学学術出版会 2007年
- 3) 財団法人古代学協会編『平安京跡研究調査報告第20輯 平安京右京六条三坊』2004年

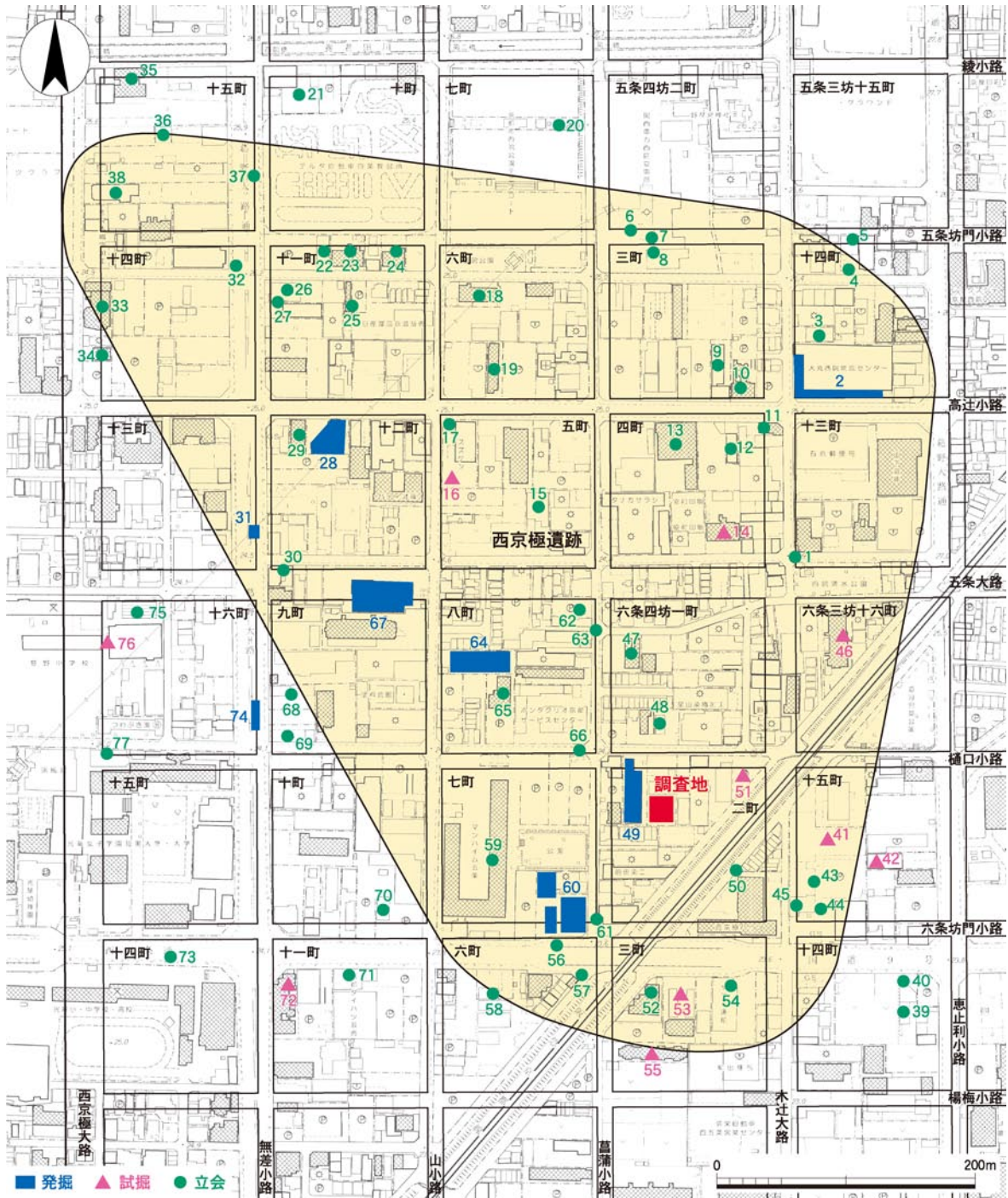


図5 周辺調査位置図 (1 : 5,000)

表1 周辺調査一覧表

No.	遺跡名	調査方法	調査年	調査機関	概要	文献
1	五条三坊十三町	立会	2004	京都市研	G.L - 0.5m以下、褐色砂泥	『京都市内遺跡立会調査概報』 平成16年度 2005年
2	五条三坊十四町	発掘	2006	京都市研	弥生中期から後期の方形周溝墓6基 平安時代の掘立柱建物	『平安京右京五条三坊十四町跡』 2006年
3		立会	1993	京都市研	G.L-0.46mで平安の包含層	『京都市内遺跡立会調査概報』 平成5年度 1994年
4		立会	1999	京都市研	G.L.-0.6mで室町の包含層 G.L.-1.07m以下、明褐色粘土	『京都市内遺跡立会調査概報』 平成11年度 2000年
5		立会	1986	京都市研	G.L.-0.48mで平安前期の包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 昭和61年度 1987年
6	五条四坊二町	立会	1994	京都市研	G.L.-1.55～1.8平安の包含層 G.L.-1.8以下、黄褐色泥土	『京都市内遺跡立会調査概報』 平成6年度 1995年
7	五条四坊三町	立会	1993	京都市研	G.L.-1.5mで湿地状堆積	『京都市内遺跡立会調査概報』 平成5年度 1994年
8		立会	1993	京都市研	G.L.-1.5mで湿地状堆積。 G.L.-1.9～2.2mで土師器片出土	『京都市内遺跡立会調査概報』 平成5年度 1994年
9		立会	2005	京都市研	G.L.-1.7mで時期不明の落込み	『京都市内遺跡立会調査概報』 平成17年度 2006年
10		立会	1989	京都市研	G.L.-1.32mで住居址状の落込み	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 平成元年度 1990年
11	五条四坊四町	立会	1985	京都市研	G.L.-1.31mで鎌倉の包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 昭和59年度 1986年
12		立会	1996	京都市研	G.L.-1.1mで湿地状堆積	『京都市内遺跡立会調査概報』 平成7年度 1997年
13		立会	2001	京都市研	G.L.-0.9mで湿地状堆積	『京都市内遺跡立会調査概報』 平成14年度 2002年
14		試掘	1994	京都市 センター	G.L.-1.8mで湿地状堆積	『京都市内遺跡試掘調査概報』 平成6年度 1995年
15	五条四坊五町	立会	1989	京都市研	G.L.-0.73mで弥生後期の住居址状落込み	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 平成元年度 1990年
16		試掘	1993	京都市 センター	G.L.-1.4mで弥生～古墳の包含層	『京都市内遺跡試掘調査報告』 平成5年度 1994年
17		立会	1987	京都市研	G.L.-1.21mで平安前期の包含層 G.L.-1.28以下、黄灰色砂泥	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 昭和62年度 1988年
18	五条四坊六町	立会	1987	京都市研	G.L.-1.12mで時期不明遺物含む流れ堆積	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 昭和62年度 1988年
19		立会	1986	京都市研	G.L.-1.44mで時期不明の包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 昭和61年度 1987年
20	五条四坊七町	立会	1981	京都市研	G.L.-1.09～1.7m土師器・瓦含む包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 昭和56年度 1982年
21	五条四坊十町	立会	1989	京都市研	G.L.-1.2mで中世遺物包含層 G.L.-1.4m湿地状堆積	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 平成元年度 1990年
22	五条四坊十一町	立会	1985	京都市研	G.L.-1.06mで中世の包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 昭和61年度 1986年
23		立会	1990	京都市研	G.L.-0.64mで室町の包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 平成2年度 1991年
24		立会	1994	京都市研	G.L.-1.0mで時期不明包含層	『京都市内遺跡立会調査概報』 平成6年度 1995年
25		立会	1989	京都市研	G.L.-1.27mで古墳の包含層 G.L.-1.64m以下、黄褐色砂泥	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 平成元年度 1990年
26		立会	1983	京都市研	G.L.-1.0mで古墳時代の包含層 G.L.-1.75m以下黄褐色砂泥	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 昭和58年度 1984年

No.	遺跡名	調査方法	調査年	調査機関	概要	文献
27	五条四坊十一町	立会	1986	京都市研	G.L.-0.67mで古墳時代包含層 G.L.-0.9m以下、灰色粗砂礫	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 昭和61年度 1987年
28	五条四坊十二町	発掘	1994	京都市研	弥生後期の方形周溝墓2基、竪穴住居6棟。古墳後期の溝から三輪玉出土。飛鳥の総柱建物1棟。奈良の掘立柱建物など	『平安京右京五条四坊』『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』1995年
29		立会	1996	京都市研	G.L.-0.75mで弥生の土壌	『京都市内遺跡立会調査概報』 平成8年度 1997年
30		立会	2000	京都市研	G.L.-0.98mで平安後期の包含層 G.L.-1.13mで平安中期の包含層 G.L.-1.46m以下、褐色砂泥	『京都市内遺跡立会調査概報』 平成12年度 2001年
31	五条四坊十三町	発掘	1977	京都市研	中世の溝状遺構、土壌、平安の包含層	『西部幹線公共下水道工事に伴う遺跡調査概報』1977年度 1978年
32	五条四坊十四町	立会	1978	京都市研	G.L.-1.7mで暗灰色泥土。子持勾玉出土。	『西部幹線公共下水道工事に伴う遺跡調査概報』1978年度 1979年
33		立会	1987	京都市研	G.L.-1.2~2.5m弥生~室町の包含層 G.L.-2.5m以下、黄褐色砂泥	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 昭和62年度 1988年
34		立会	1990	京都市研	G.L.-0.8~0.97時期不明包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 平成2年度 1991年
35	五条四坊十五町	立会	1996	京都市研	G.L.-1.07m平安包含層。G.L.-1.31mで弥生包含層。G.L.-1.5で灰黄褐色粘土。	『京都市内遺跡立会調査概報』 平成8年度 1997年
36		立会	1986	京都市研	G.L.-0.75m以下、時期不明包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 昭和61年度 1987年
37		立会	1978	京都市研	幅30m以上の河川状遺構から古墳前期の土器多量出土	『西部幹線公共下水道工事に伴う遺跡調査概報』1978年度 1979年
38		立会	1988	京都市研	G.L.-0.62mで弥生~古墳の竪穴住居2棟、土壌1基、溝1条	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 昭和63年度 1989年
39	六条三坊十四町	立会	1990	京都市研	G.L.-0.78mで地山を掘り込んで弥生の落込み	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 平成2年度 1991年
40		立会	1990	京都市研	G.L.-0.7mで地山を掘り込んで弥生の落込み	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 平成2年度 1991年
41	六条三坊十五町	試掘	2000	京都市センター	G.L.-1.3mで古墳後期の南北溝	『京都市内遺跡試掘調査概報』 平成11年度 2001年
42		試掘	1990	京都市センター	G.L.-1.1mで時期不明の湿地状堆積	『京都市内遺跡試掘調査概報』 平成2年度 1991年
43		立会	2000	京都市研	G.L.-0.9mで湿地状堆積の落込み東肩	『京都市内遺跡立会調査概報』 平成11年度 2000年
44		立会	1998	京都市研	G.L.-0.62mで弥生の包含層を掘り込んで弥生~古墳の土壌	『京都市内遺跡立会調査概報』 平成11年度 2000年
45		立会	1978	京都市研	G.L.-0.5mで茶褐色粘土を掘り込んで弥生の落込み	『西部幹線公共下水道工事に伴う遺跡調査概報』1978年度 1979年
46	六条三坊十六町	試掘	2001	京都市センター	G.L.-3.0mで平安前期の包含層	『京都市内遺跡試掘調査概報』 平成12年度 2002年
47	六条四坊一町	立会	1989	京都市研	G.L.-1.43mで古墳後期の土壌	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 平成元年度 1990年
48		立会	2000	京都市研	G.L.-0.5mで時期不明包含層	『京都市内遺跡立会調査概報』 平成12年度 2001年
49	六条四坊二町	発掘	1989	京都市研	弥生中期~後期の竪穴住居5棟	『京都市埋蔵文化財調査概要』 平成元年度 1990年
50		立会	1978	京都市研	弥生後期の土器を多量含む溝状遺構	『西部幹線公共下水道工事に伴う遺跡調査概報』1978年度 1979年
51		試掘	1997	京都市センター	G.L.-1.1mで黄褐色砂泥の地山を掘り込んで古墳後期の落込み	『京都市内遺跡試掘調査概報』 平成9年度 1998年
52	六条四坊三町	立会	1979	京都市研	G.L.-1.6mで弥生の東西溝。中期の土器多量出土。南に下る落込み肩から弥生土器多量出土。	未報告

No.	遺跡名	調査方法	調査年	調査機関	概要	文献
53	六条四坊三町	試掘	1987	京都市研	弥生土器多量に含む東西溝。弥生～古墳の土器含む落込み	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和62年度 1988年
54		立会	2005	京都市研	G.L.-1.4mでにぶい黄褐色細砂を掘り込んで弥生中期の土壌、溝、後期の溝	『京都市内遺跡立会調査概報』平成17年度 2006年
55		試掘	1986	京都市センター	G.L.-1.48mで湿地状堆積	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 1987年
56	六条四坊六町	立会	2004	京都市研	G.L.-1.7mで時期不明落込み	『京都市内遺跡立会調査概報』平成16年度 2005年
57		立会	1978	京都市研	弥生包含層	『西部幹線公共下水道工事に伴う遺跡調査概報』1978年度 1979年
58		立会	2005	京都市研	G.L.-0.7mで湿地状堆積	『京都市内遺跡立会調査概報』平成17年度 2006年
59	六条四坊七町	立会	1979	京都市研	弥生中期の東西溝。弥生の落込み	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和55年度 1980年
60		発掘	2005	古代学協会	弥生中期の竪穴住居、溝、弥生後期の竪穴住居、古墳時代の竪穴住居	未報告
61		立会	2004	京都市研	G.L.-0.45mで弥生包含層 G.L.-0.66m以下、オリブ褐色砂泥	『京都市内遺跡立会調査概報』平成16年度 2005年
62	六条四坊八町	立会	2005	京都市研	G.L.-0.71mで時期不明包含層	『京都市内遺跡立会調査概報』平成17年度 2006年
63		立会	2004	京都市研	G.L.-0.95mで湿地状堆積	『京都市内遺跡立会調査概報』平成16年度 2005年
64		発掘	2006	京都市研	縄文～奈良の落込み。古墳時代中期・後期の竪穴住居。奈良時代の総柱建物、竪穴住居。平安の掘立柱建物。	『平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡』2006年
65		立会	2001	京都市研	平安中期包含層。奈良の柱穴。古墳中期の包含層。古墳中期の柱穴。	『京都市内遺跡立会調査概報』平成13年度 2002年
66		立会	1978	京都市研	土師器・須恵器含む包含層	『西部幹線公共下水道工事に伴う遺跡調査概報』1978年度 1979年
67	六条四坊九町	発掘	1990	京都文化財団	縄文の土壌。弥生～古墳の溝。古墳後期の竪穴住居3棟。五条大路関連遺構。鎌倉の土壌。	『京都文化博物館調査研究報告第8集 平安京右京六条四坊九町・五条大路』1991年
68		立会	1993	京都市研	G.L.-0.8mで湿地状堆積	『京都市内遺跡立会調査概報』平成5年度 1994年
69		立会	1990	京都市研	G.L.-1.2mで湿地状堆積	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成2年度 1991年
70	六条四坊十町	立会	1990	京都市研	G.L.-0.88mで時期不明包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成2年度 1991年
71	六条四坊十一町	立会	1983	京都市研	G.L.-1.3mで近世以降の包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和58年度 1984年
72		試掘	1983	京都市センター	G.L.-1.24mで湿地状堆積	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和58年度 1984年
73	六条四坊十四町	立会	1978	京都市研	7世紀の土師器・須恵器含む包含層	『西部幹線公共下水道工事に伴う遺跡調査概報』1978年度 1979年
74	六条四坊十六町	発掘	1977	京都市研	時期不明の小規模自然流路。平安前～中期の包含層。	『西部幹線公共下水道工事に伴う遺跡調査概報』1977年度 1978年
75		立会	1996	京都市研	G.L.-2.2mで湿地状堆積	『京都市内遺跡立会調査概報』平成8年度 1997年
76		試掘	1995	京都市研	鎌倉～室町の包含層（湿地状堆積）	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成7年度 1996年
77		立会	1986	京都市研	G.L.-1.78mで平安包含層 G.L.-1.9m以下、砂礫	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 1987年

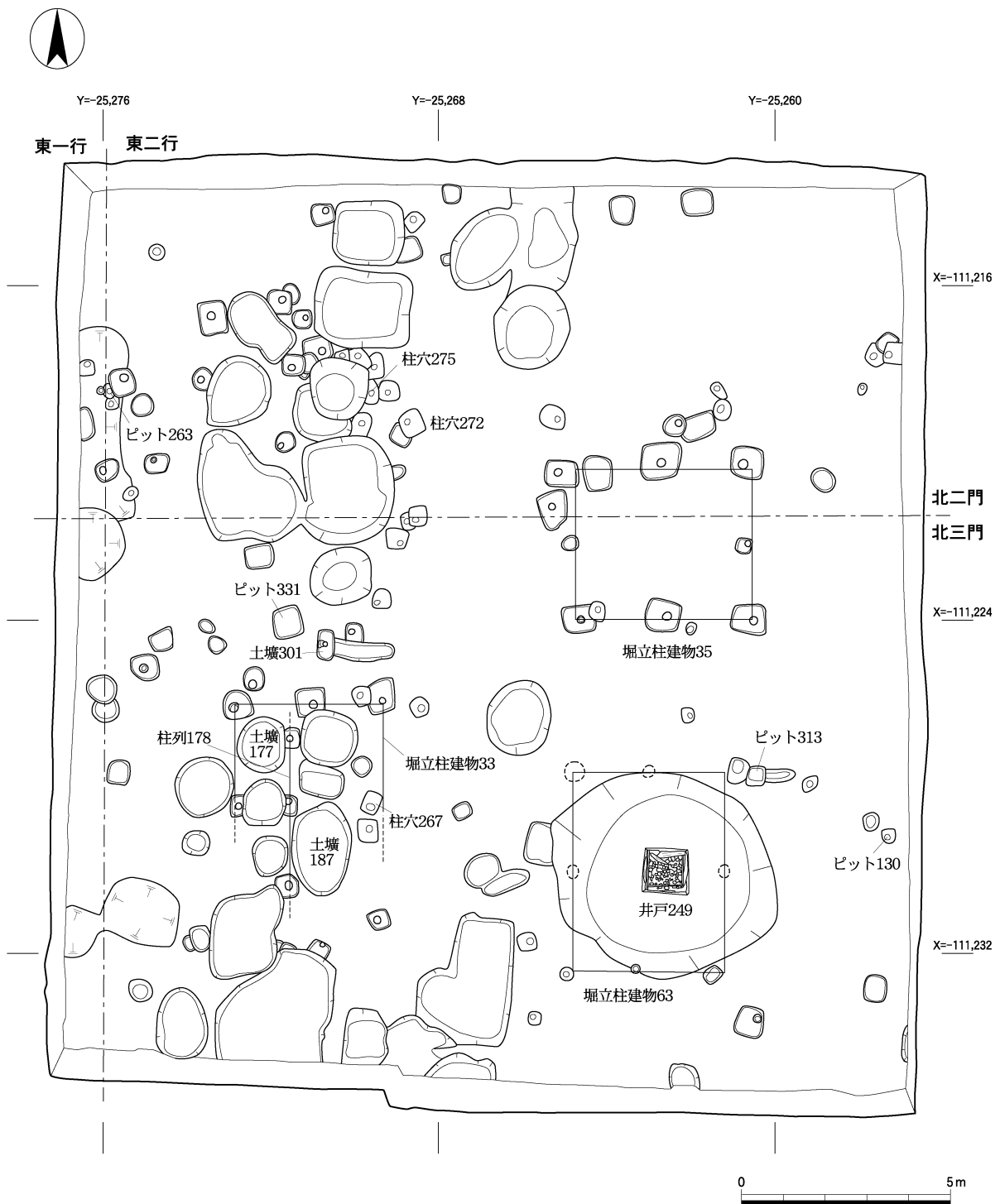


図6 第1面平面図 (1 : 150)



Y=-25,276

Y=-25,268

Y=-25,260

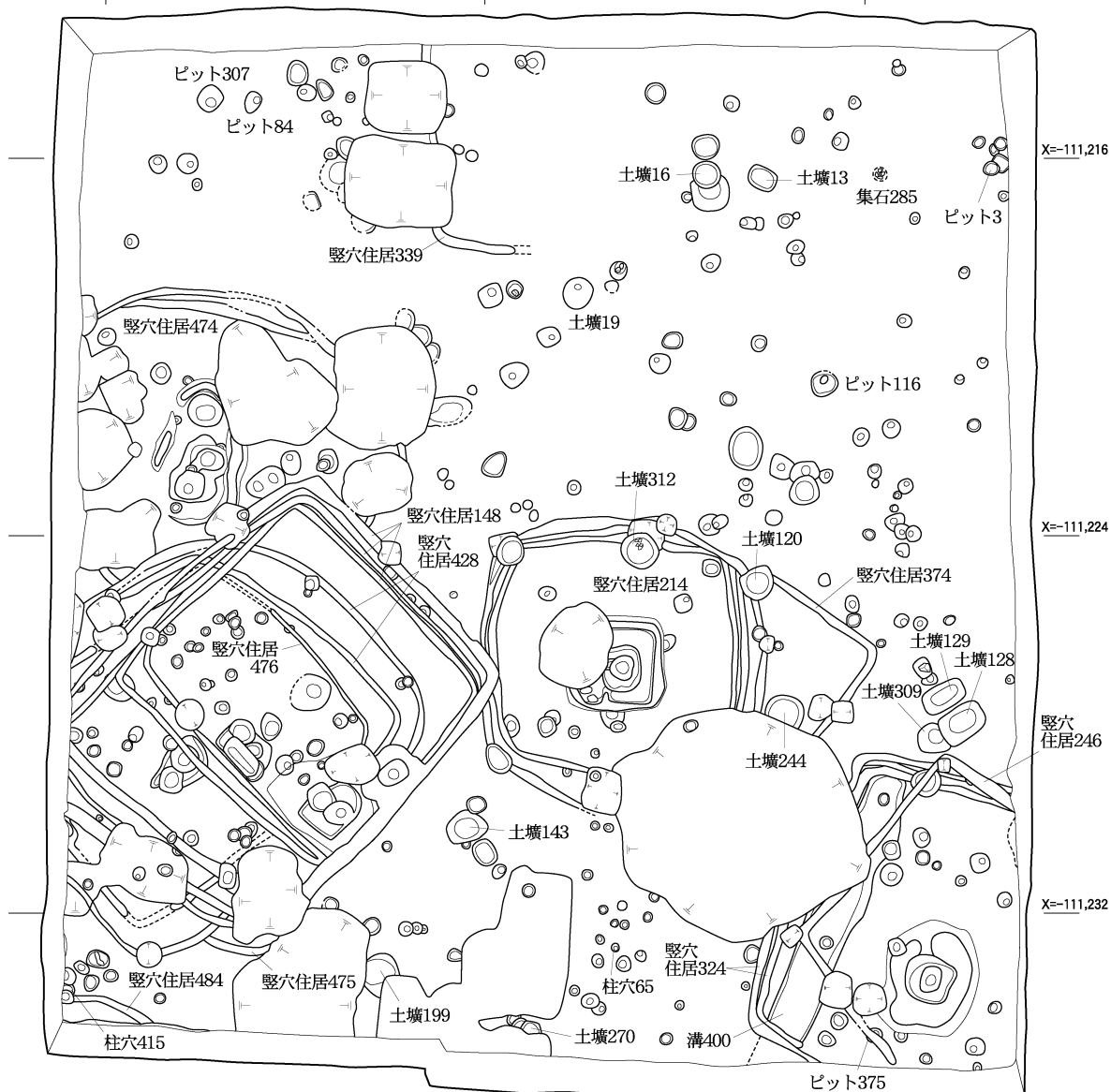
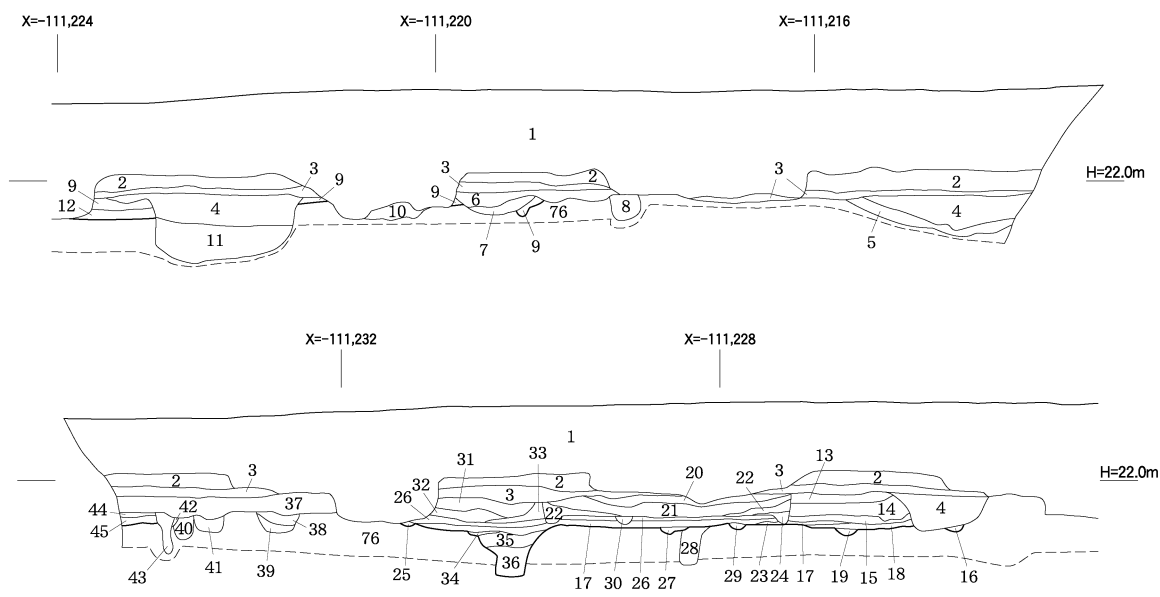
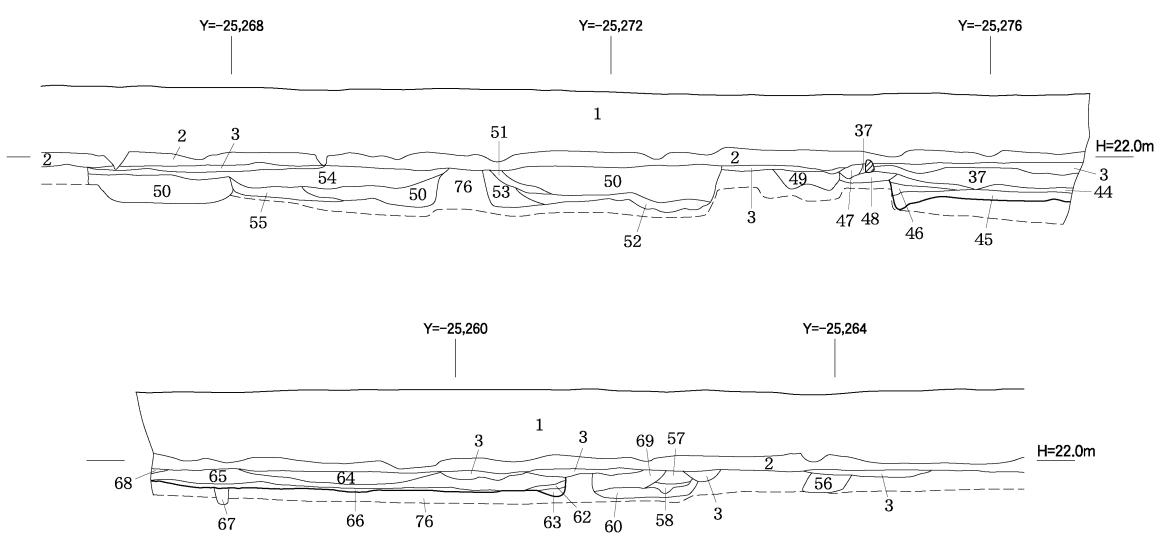


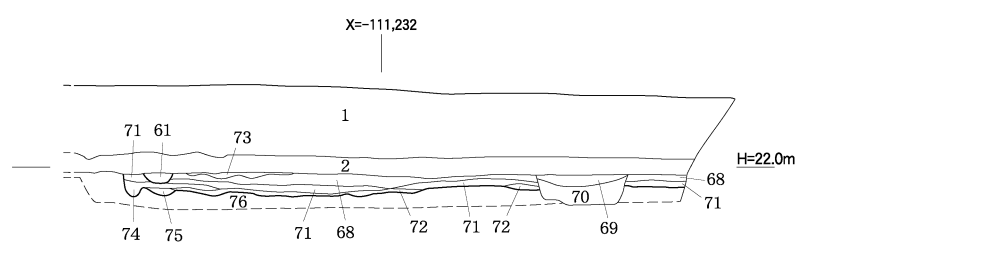
図7 第2面平面図 (1 : 150)



調査区西壁



調査区南壁



調査区東壁

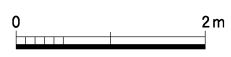


図8 調査区断面図1 (1:80)

- 1 現代盛土
- 2 10YR4/1褐灰色 小礫混シルト～極細砂 土壌化（耕作土）
- 3 10YR5/2灰黄褐色 小礫混シルト～極細砂 マンガン多量含（耕作床土）
- 4 10YR5/2灰黄褐色 シルト 0.5～3cmの礫詰る（攪乱）
- 5 10YR4/4褐色 シルト 0.5cm以下の礫少量混（攪乱）
- 6 10YR5/2灰黄褐色 シルト 0.5～3cmの礫多量混 マンガン多量含（遺物包含層）
- 7 10YR4/2灰黄褐色 シルト～極細砂 焼土やや多く混（土壙277）
- 8 10YR4/2灰黄褐色 シルト～極細砂に10YR4/4褐色シルト多量混（柱穴261）
- 9 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～極細砂に10YR5/4にぶい黄褐色シルト少量混 炭化物・焼土少量混（竪穴住居474埋土）
- 10 10YR4/2灰黄褐色 シルト～極細砂 5～10cmの礫混（攪乱）
- 11 10YR3/2黒褐色シルト 小礫多量混（攪乱）
- 12 10YR4/6褐色 粘質シルトに10YR3/2黒褐色シルト～極細砂 炭化物・焼土少量混がマーブル状に混じる（竪穴住居474貼床）
- 13 10YR2/2黒褐色 シルト～極細砂 炭化物・焼土斑点状に混（竪穴428埋土）
- 14 10YR3/2黒褐色 シルト～極細砂に5YR4/4にぶい赤褐色 焼土・炭化物のブロック多量混（竪穴428埋土）
- 15 2.5Y4/1黄褐色 シルト～極細砂に10YR6/6明黄褐色シルト少量混 炭化物・焼土少量混（竪穴428埋土）
- 16 2.5Y3/2黒褐色 シルト 小礫混 炭化物・焼土微量混（竪穴428壁溝）
- 17 2.5Y3/1黒褐色 シルト～極細砂 炭化物微量・焼土少量混に10YR4/4褐色粘質シルトブロック多量混（竪穴428貼床）
- 18 10YR5/6黄褐色 粘質シルトに10YR4/2灰黄褐色シルト～極細砂 炭化物・焼土微量混がマーブル状に混（竪穴428貼床）
- 19 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～極細砂に10YR6/6明黄褐色シルトブロック混 0.5cm以下の小礫多量混（竪穴476壁溝）
- 20 10YR3/1黒褐色 シルト～極細砂 炭化物・焼土微量混（竪穴148埋土）
- 21 10YR3/2黒褐色 シルト～極細砂 炭化物・焼土微量混 0.5cm以下の礫微量混（竪穴148埋土）
- 22 7.5YR3/2黒褐色 シルト～極細砂に5YR4/4にぶい赤褐色焼土ブロック多量混（竪穴148埋土）
- 23 10YR3/1黒褐色 シルト 炭化物・焼土微量混（竪穴428貼床）
- 24 10YR3/1黒褐色 シルト～極細砂 焼土少量混（竪穴148埋土）
- 25 10YR4/1褐灰色 シルト～極細砂に10YR6/6明黄褐色シルトブロック混 炭化物少量混（竪穴428壁溝）
- 26 2.5Y4/1黄灰色 粘質シルト 炭化物・焼土少量混（竪穴428貼床）
- 27 25層と同一
- 28 10YR3/2黒褐色 シルトに10YR4/4褐色シルト斑点状に混
- 29 10YR4/1褐灰色 シルトに10YR4/4褐色シルトブロック多量混 炭化物・焼土少量混（竪穴428壁溝）
- 30 10YR4/1褐灰色 シルト～極細砂に10YR6/6明黄褐色シルトブロック混 炭化物少量混（竪穴148壁溝）
- 31 7.5Y4/1灰色 小礫混シルト～極細砂（遺物包含層）
- 32 5Y3/1オリーブ黒色 小礫混シルト～極細砂に10YR6/6明黄褐色シルトブロック少量混（遺物包含層）
- 33 10YR4/2灰黄褐色 シルト～極細砂に10YR6/6明黄褐色シルトブロック少量混 炭化物・焼土少量混（竪穴428埋土）
- 34 10YR3/1黒褐色 粘質シルト 炭化物少量混（土壙432）
- 35 10YR4/1褐灰色 シルト～極細砂に10YR4/4褐色粘質シルトブロック多量混（土壙432）
- 36 10YR2/1黒色 シルト やや粘質 炭化物・焼土少量混（土壙432）
- 37 2.5Y4/1黄灰色 シルト～細砂に10YR4/4褐色粘質シルトブロック混（遺物包含層）
- 38 10YR3/2黒褐色 粘質シルト
- 39 10YR5/6黄褐色 粘質シルト 炭化物少量混
- 40 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂と10YR6/6明黄褐色粘質シルトがマーブル状に混
- 41 10YR4/4褐色 粘質シルト 炭化物少量混
- 42 10YR4/1褐灰色 シルト 炭化物・焼土少量混
- 43 10YR3/1黒褐色 粘質シルト 焼土少量混
- 44 10YR3/1黒褐色 シルト～極細砂 炭化物・焼土微量混（竪穴484埋土）
- 45 44層に10YR4/4褐色粘質シルトブロック多量混（竪穴484埋土）
- 46 10YR3/2黒褐色 シルトに10YR4/4褐色シルト少量混 焼土少量混（竪穴484埋土）
- 47 10YR4/2灰黄褐色 シルト～極細砂
- 48 10YR4/1褐灰色 シルト～極細砂に10YR4/4褐色シルト混
- 49 10YR5/1褐灰色 シルト～極細砂 0.5～1cmの礫多量混（近世土壙埋土）
- 50 10YR5/2灰黄褐色 シルト～極細砂 0.5～5cmの礫多量混
- 51 10YR5/2灰黄褐色 砂質シルト～中砂
- 52 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂 1～2cmの礫少量混
- 53 10YR5/2灰黄褐色 シルト～中砂 小礫多量混
- 54 10YR5/1褐灰色 シルト～細砂 1cm以下の礫多量混
- 55 10YR4/2灰黄褐色 シルト～極細砂に10YR4/4褐色シルトブロック混 0.5～1cmの礫少量混
- 56 10YR3/2黒褐色 シルト～極細砂に10YR6/4にぶい黄褐色粘質シルトブロック混
- 57 10YR4/2灰黄褐色 シルト～極細砂 炭化物少量混
- 58 10YR3/2黒褐色 粘質シルト～極細砂 炭化物・焼土少量混
- 59 10YR3/2黒褐色 シルト～極細砂 小礫・焼土少量混
- 60 10YR3/1黒褐色 シルト～極細砂 0.5～3cmの礫少量混 炭化物少量混（溝400）
- 61 10YR4/2灰黄褐色 シルト 炭化物・焼土少量混（竪穴246壁溝）
- 62 10YR3/2黒褐色 粘質シルト 炭化物少量混に10YR4/4褐色粘質シルト混（竪穴324埋土）
- 63 10YR3/1黒褐色 シルト～極細砂 炭化物・焼土少量混（竪穴324壁溝）
- 64 10YR5/2灰黄褐色 シルト～細砂 小礫少量混（竪穴324埋土）
- 65 10YR3/2黒褐色 シルト～極細砂 炭化物・焼土少量混 0.5～2cmの礫少量混（竪穴324埋土）
- 66 10YR4/2灰黄褐色 シルト～極細砂に10YR4/4褐色シルトブロック混 炭化物少量混（竪穴324埋土）
- 67 10YR3/3暗褐色 シルト～極細砂 炭化物少量混
- 68 10YR3/2黒褐色 シルト～極細砂（竪穴324埋土）
- 69 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂
- 70 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂に10YR4/4褐色シルトブロック混
- 71 65層と同一（竪穴324埋土）
- 72 10YR5/6黄褐色 粘質シルトと10YR3/2黒褐色シルトの互層（竪穴324貼床）
- 73 5YR5/6明赤褐色 シルト（焼土）
- 74 10YR4/2灰黄褐色 シルト～極細砂に5YR5/6明赤褐色焼土多量混 約1cmの礫微量混（竪穴324埋土）
- 75 10YR4/1褐灰色 シルト～極細砂 焼土少量混（竪穴324壁溝）
- 76 10YR4/4褐色 シルト 調査区北側では10YR5/4にぶい黄褐色シルト 部分的に0.5～5cmの礫多量混る箇所あり（無遺物層）

図9 調査区断面図2（土層名）

3. 遺 構

(1) 層序 (図8・9)

調査開始時は、既存建解体後の整地が行われた状態であった。この整地で敷地の中央部が盛り上がった状態であったため、調査区の北側では現地表下0.8～1.0m、南側では0.6～0.7mまでが断面図1層の現代盛土であった。その下に、ほぼ水平に0.2～0.3mの旧耕作土と床土が堆積する(2・3層)。これを除去した層が断面図76層の無遺物層で、この層は、調査区北側では10YR5/4にぶい黄褐色シルトに一部砂礫が多量に混じる箇所がある。南側では10YR4/4褐色シルトの均質な土層である。弥生時代から近世の遺構は、この無遺物層の上面で検出した。遺構検出レベルは標高21.8m前後である。部分的に断面図6層や31・32・37層にみられる近世の遺物包含層が堆積する。耕作に伴う整地層と考えられる。

(2) 遺構の概要

検出した遺構総数は554基で、時期は弥生時代から近世に及ぶ。出土遺物が乏しく時期を決定できない遺構を除いて、弥生時代のものが最も多く、次いで古墳時代と奈良時代の遺構が多い。平安時代の遺構は極めて少数である。中世の遺構は認められず、近世の遺構は、調査区西半に南北に並んで掘られた土取り穴と考えられる土壌群のみである。

(3) 平安時代の遺構 (図6)

土壌301(図10・11) 調査区の中央西寄りで検出した。平面形は0.7m×0.35mの隅丸長方形、深さは約0.05m。前期の灰釉陶器碗と土師器の碗・皿・杯が重なった状態で出土した。遺物の出土状況から、地鎮遺構の可能性が考えられる。

柱列178 土壌301の南に位置する南北方向に並ぶ柱列である。南北2間分を検出した。柱間

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
弥生時代	竪穴住居148・214・324・428・474・475・476・484、土壌13・143・199・309、ピット3、溝400	
古墳時代	竪穴住居246・339・374、土壌16・19・120・128・129・244・270・312、柱穴415	
奈良時代	掘立柱建物33・35・63、井戸249	柱穴267は掘立柱建物33を構成する柱穴
平安時代	柱列178、土壌301	
近 世	土壌群	
時期不明	集石285	

は 1.8 m（6 尺）の等間。柱穴掘形は一辺 0.4 ～ 0.5 m の方形で、残存深は 0.05 ～ 0.2 m。柱痕跡から推定される柱径は約 0.15 m。

（4）奈良時代の遺構（図 6）

掘立柱建物 33 調査区南西で検出した。正方位を向く。東西 2 間、南北 1 間分を検出した。南に伸び南北棟の建物になると考えられる。東西の柱間は 1.8 m（6 尺）、南北の柱間は 2.4 m（8 尺）である。柱掘形は一辺 0.5 ～ 0.7 m の方形で、深さは 0.05 ～ 0.2 m。この建物を構成する柱穴 267 掘形からは、8 世紀後半の所産と考えられる須恵器壺が出土した。

掘立柱建物 35（図 12、図版 1 - 2）調査区東側で検出した。2 間 × 2 間で、南北柱列と東西柱列の柱間が異なる東西棟の建物である。正方位を向く。柱間は桁行が 2.1 m（7 尺）、梁間が 1.8 m（6 尺）。主柱となる柱穴の掘形は一辺 0.65 ～ 0.8 m の方形、深さは 0.05 ～ 0.2 m で、柱痕跡から推測される柱径は 0.15 ～ 0.2 m。梁間中央にくる柱穴は一辺 0.3 m の方形と直径 0.3 m の不整形で、深さは 0.05 m と 0.15 m。

掘立柱建物 63 掘立柱建物 35 の南に位置する。東西と南北柱列の柱間が異なる 2 間 × 2 間の南北棟建物である。桁行が 2.4 m（8 尺）の等間、梁間が 1.8 m（6 尺）の等間。残存する柱穴は直径 0.1 ～ 0.5 m の不整形で、深さは 0.3 ～ 0.4 m。

井戸 249（図 13・14、図版 2）掘立柱建物 63 と重複する。掘形は南北 5 m、東西 5.2 m の不整形で、湧水層と考えられる断面図 27 層の砂礫層まで播鉢状に掘り抜かれている。深さは、検出面から約 3 m。井戸枠の最上部は抜き取られていたが、検出面から 0.8 m 掘り下げたところで、

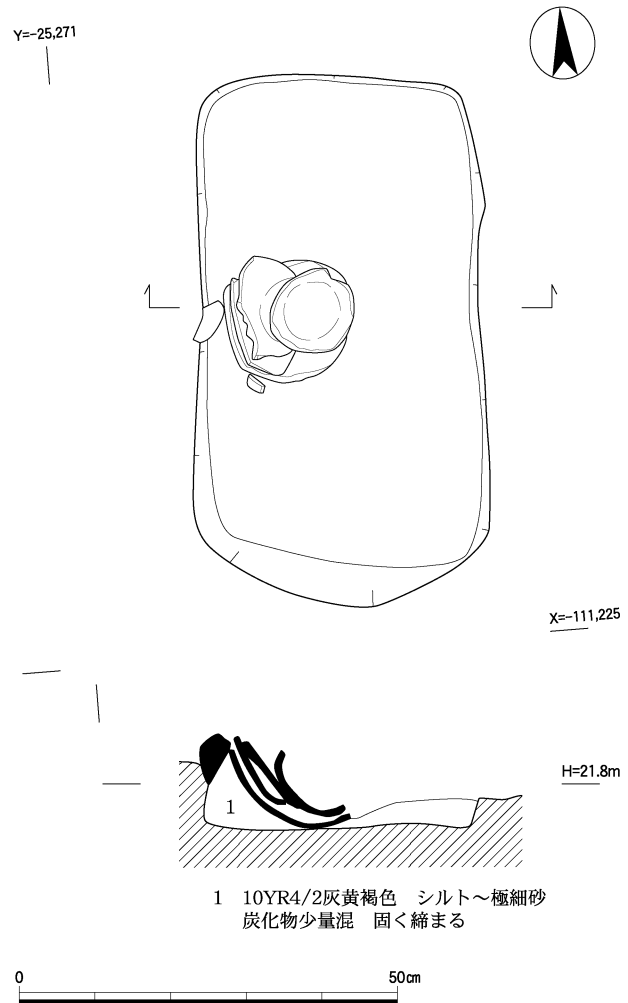


図 10 土壌 301 実測図（1：10）

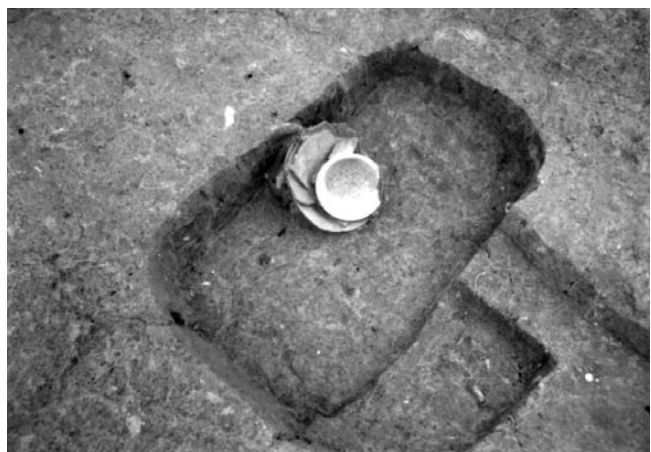
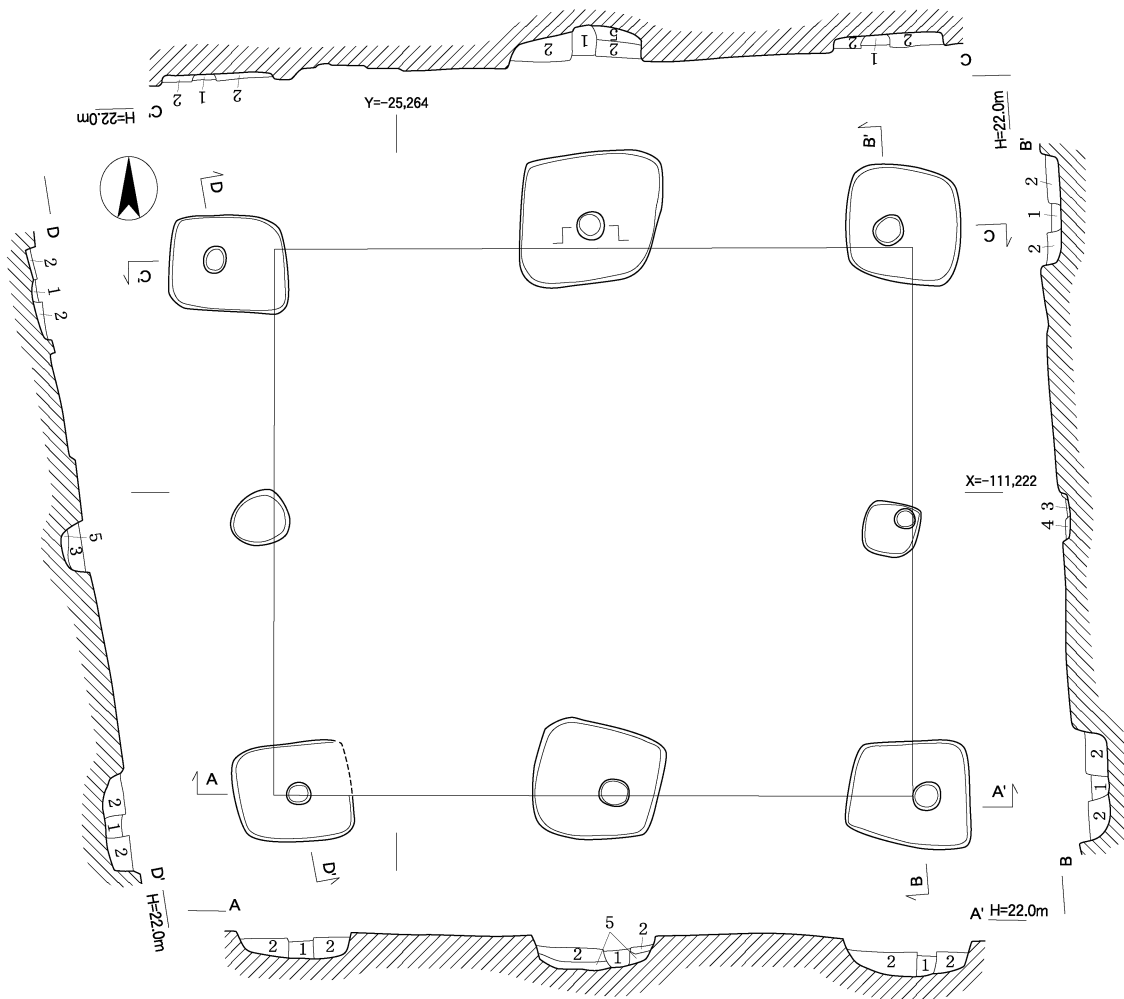


図 11 土壌 301 土器出土状況（南東から）



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～極細砂 炭化物少量混
- 2 10YR4/4褐色 シルト～極細砂 1cm以下の礫混
- 3 10YR6/6明黄褐色 粘質シルトブロック多量混 炭化物多量混
- 4 10YR4/2灰黄褐色 シルト 炭化物少量混
- 5 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト～極細砂
- 6 10YR5/4にぶい黄褐色 粘質シルトに2層少量混



図12 掘立柱建物35実測図(1:50)

掘形のほぼ中心に組まれた一辺約1mの正方形の枠を検出した。井戸枠の構築方法は、残存部の上から1.2mまでは、丸太の両端を相欠き組みにして積み上げている。その下は、方形の横板の両端を加工し、凸型にして交互に組み合わせている。この横板組みは2段分ある。最下部の一段



図13 井戸249断断面(北から)

は集水部分で、井戸枠より一回り小さい一辺約0.8mの正方形である。丁寧に加工した横板を用い、四隅を柄で組み合わせた井籠組である。横板の裏込めには礫混じりの粘土(20層)が使用され、底には浄水用に直径5~10cmの礫が敷き詰められていた。井戸枠の埋土からは遺物整理箱にして4箱分の遺物が出土した。8世紀後葉から末葉のもので、最下層から上層まで時期や遺物量の差はなく、一度に埋め戻された

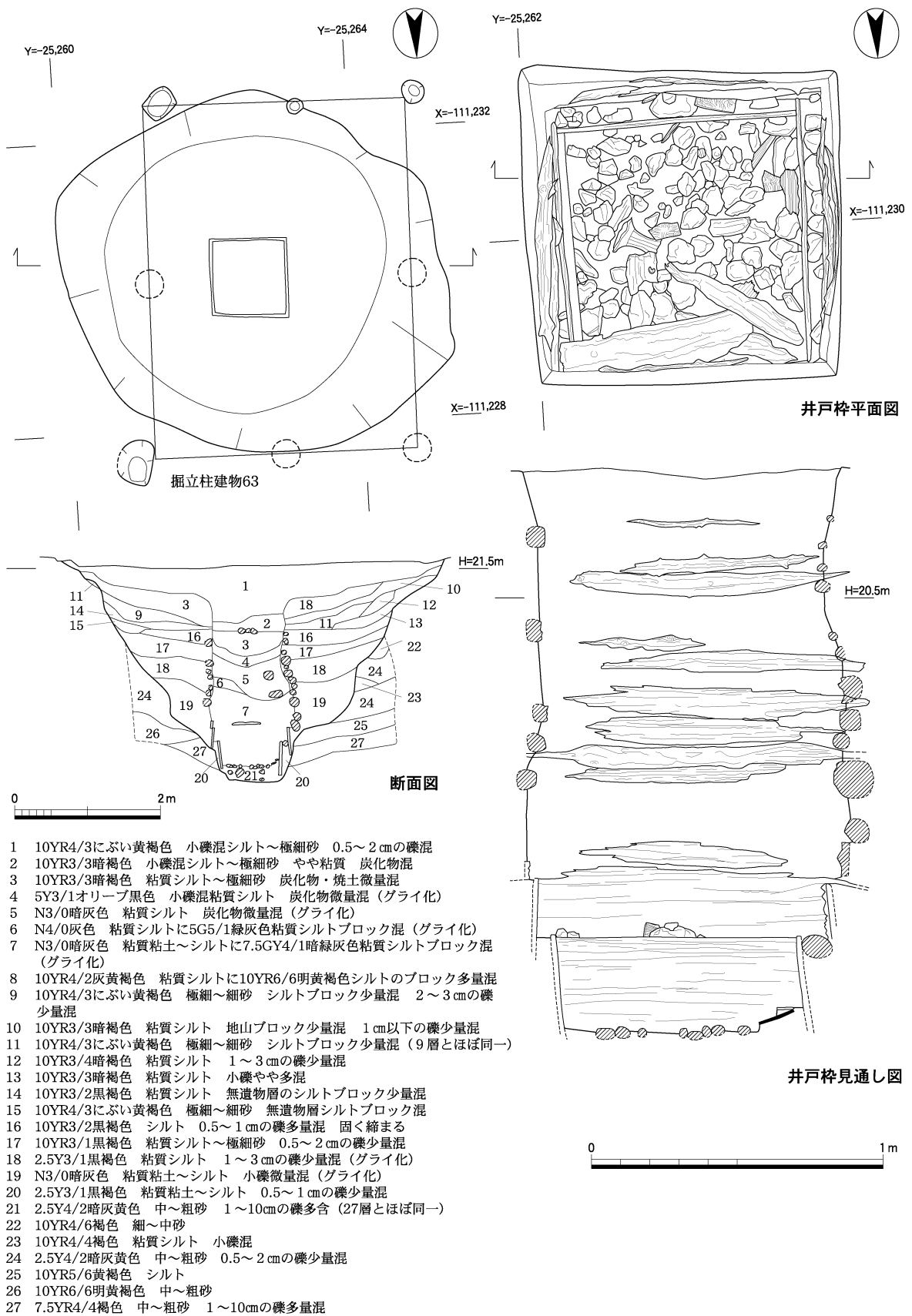


図14 井戸249実測図 (1:80、1:20)

考えられる。掘形出土の遺物は8世紀後半頃のものと考えられ、井戸の開削から廃棄まで短期間であったことがわかる。

(5) 古墳時代の遺構 (図7)

竪穴住居 246 (図15、図版3-2) 調査区南東隅で検出した。一辺約5mの方形で、方位は北に対して約40度東に振れる。壁溝の幅は0.15～0.25m、深さは0.05～0.1m。北側に、床面と考えられる焼け締まった部分が残存する。支柱穴は4基と考えられ、調査区ではうち3基を検出した。直径0.3～0.35mの円形で深さは0.05～0.1m。

竪穴住居 374 (図15) 調査区中央東寄りで検出した。一辺3m以上の方形で、方位は北に対して約40度東に振れる。壁溝は幅0.15～0.2m、深さは0.05m未満。支柱穴は確認できなかった。

竪穴住居 339 (図15) 調査区北端中央で検出した。一辺4m以上の方形で、方位はほぼ正方位を向く。壁溝は幅約0.15m、深さは0.05m未満。支柱穴は確認できなかった。

土壌群 (図16) 調査区東半で竪穴住居に伴わない単独の土壌を多数検出した。中期から後期の遺物が出土している。土壌16は、直径0.6mの円形で、深さは0.25m。断面形は播鉢状を呈する。底から小型丸底壺一点が、倒置した状態で出土した (図17)。土壌19は直径0.6mの円形、深さ0.4m。壁は垂直に落ち、底は平らで断面は逆台形状を呈する。底から土器がまとまって出土した (図18)。土壌120は竪穴住居374を削平する。直径0.7mの円形で、深さは0.45m。断面は逆台形状を呈する。土器破片が多数出土した。土壌128は、調査区東端で土壌129と並列する。平

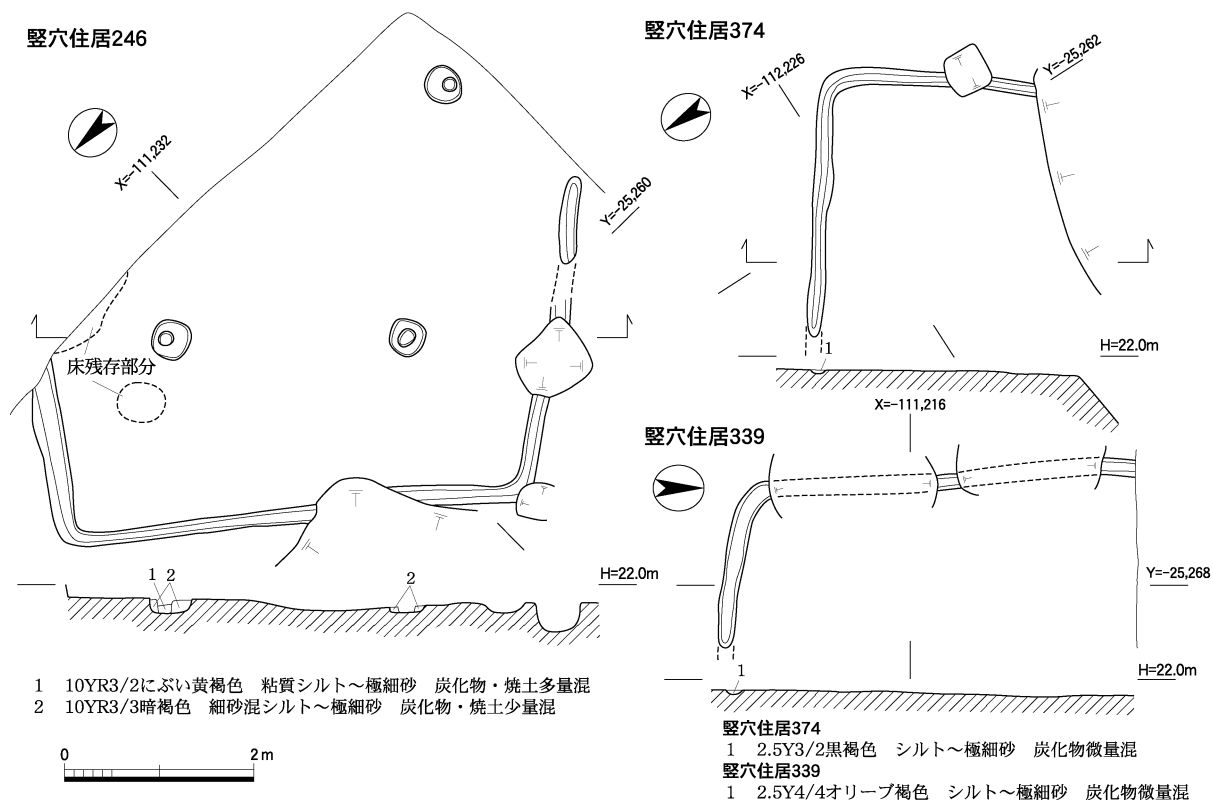


図15 竪穴住居 246・374・339 実測図 (1:80)

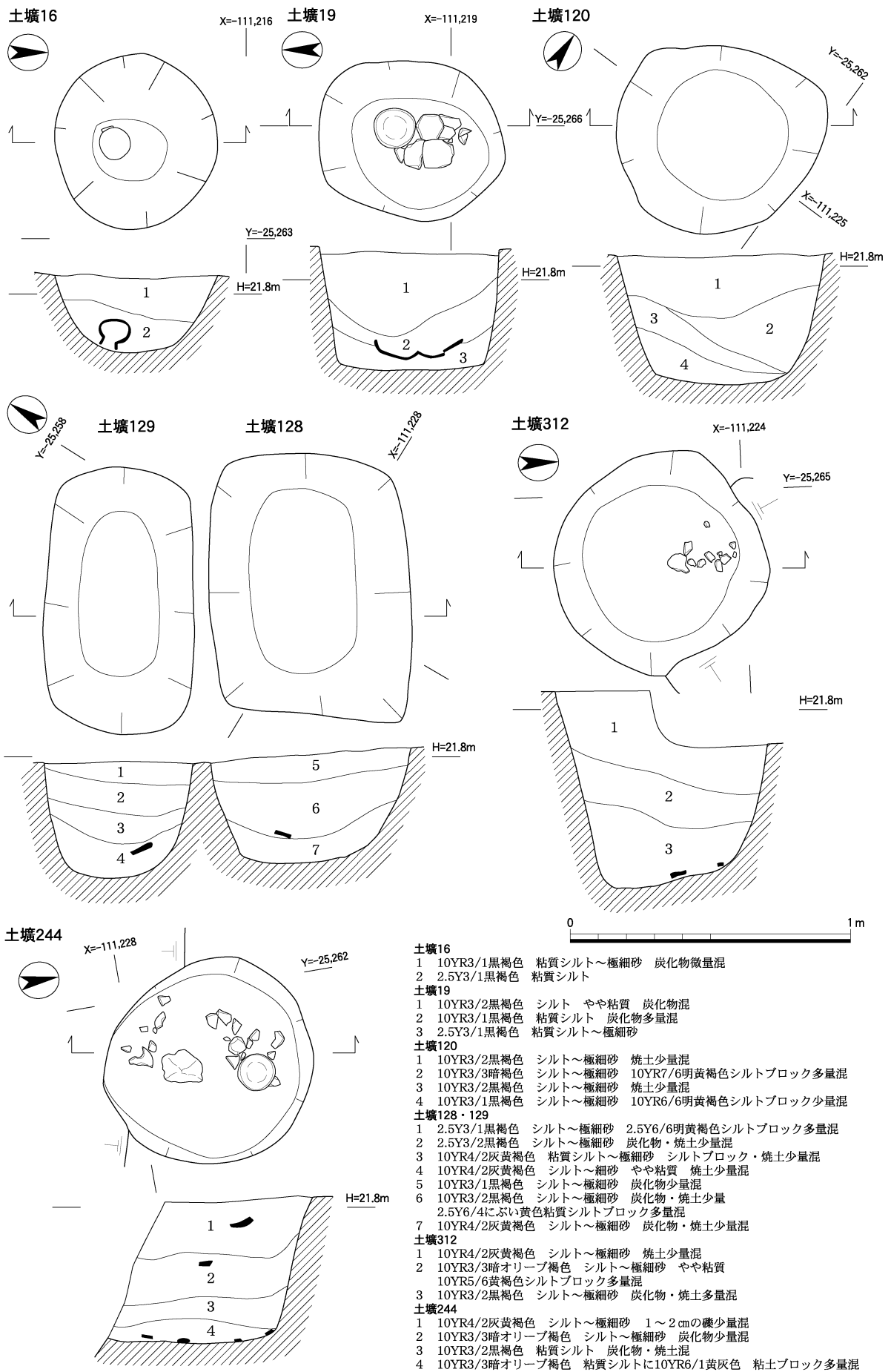


図 16 古墳時代土壌実測図 (1 : 20)



図 17 土壙 16 土器出土状況（西から）



図 18 土壙 19 土器出土状況（南から）



図 19 土壙 244 土器出土状況（東から）

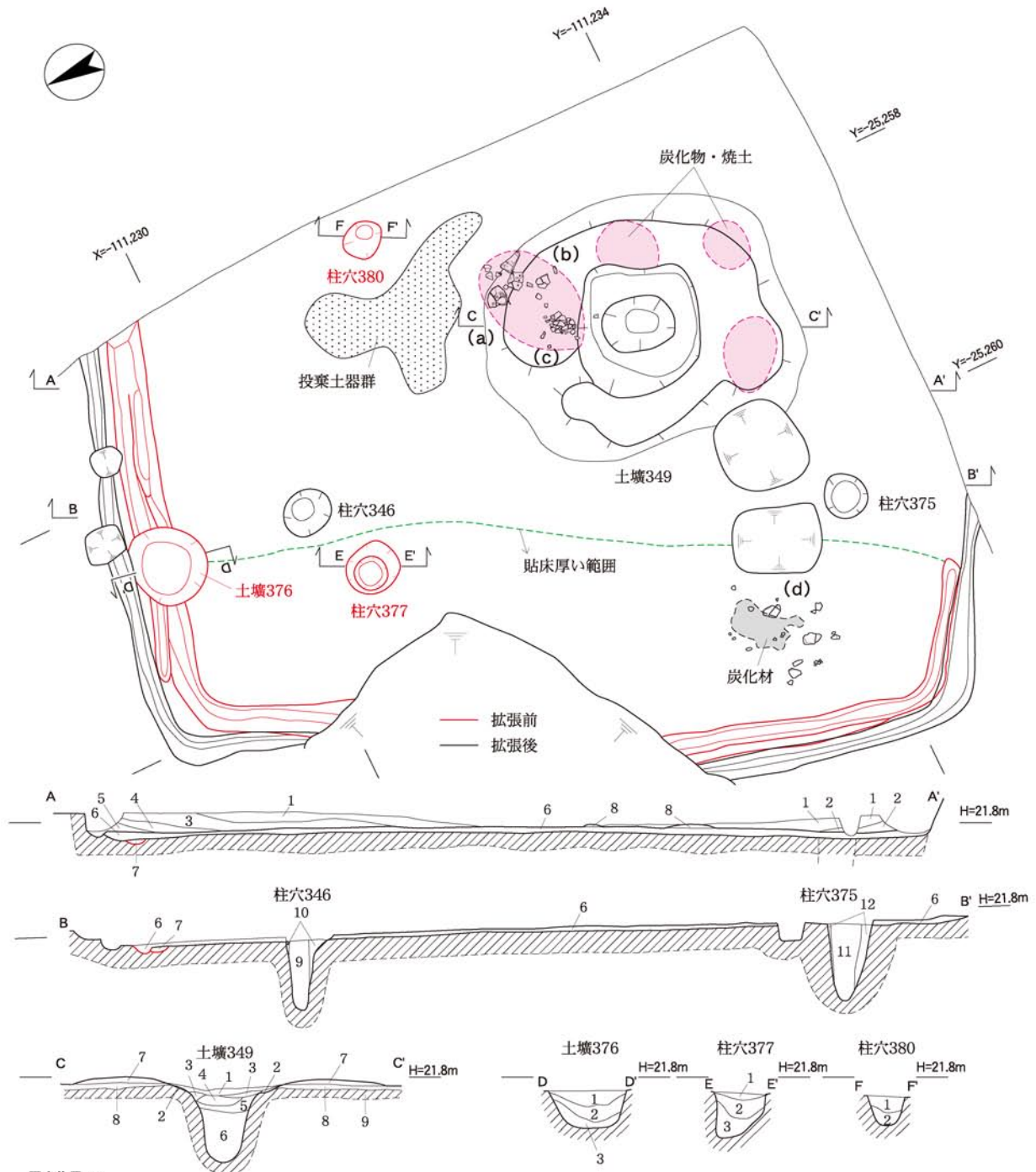
面形は、0.7 m × 0.9 m の隅丸長方形で、深さは 0.35 m ある。断面は逆台形状を呈する。土壙 129 は、平面 0.5 m × 0.9 m の隅丸長方形。深さは 0.4 m ある。断面は逆台形状を呈する。土壙 244 は、井戸 249 に南側を削平される。平面は円形で直径 0.7 m、深さは 0.5 m。断面は逆台形状を呈する。底から土器と粘土塊が出土した（図 19）。土壙 312 は調査区中央に位置する断面逆台形状の土壙である。竪穴住居 214 を切って成立する。直径 0.75 m の円形、深さ 0.7 m。底から土器片が出土した。調査区の南端で検出した土壙 270 は、近世の土取り穴に削平される。直径 0.3 m の円形で深さは 0.25 m。断面は播鉢状を呈する。須恵器杯身が 3 個体出土した。

柱穴 415 調査区南西隅で検出した。直径 0.2 m の円形、深さは 0.2 m。後期の須恵器杯身が出土した。

（6）弥生時代の遺構（図 7）

竪穴住居 324（図 20、図版 4）調査区南東隅で検出した平面隅丸方形の竪穴住居である。方位は北に対して約 20 度東に振る。西と南は一回、北は 2 回の拡張¹⁾を行う。拡張に伴い西壁の長さは 5.8 m から 6.0 m に伸び、最終的には 6.5 m になる。壁溝の幅は 0.15 ～ 0.2 m、深さは 0.05 m。竪穴住居の深さは、拡張前は検出面から 0.15 ～ 0.2 m あるが、最終拡張時に断面図 6 層の粘質シルト層を 3 ～ 5 cm 入れて床を貼るため、0.1 ～ 0.15 m となる。竪穴住居西側下層には、住居成立以前の溝 400 があるため、西側の貼床は層厚 5 ～ 10 cm と厚く、小礫混じりのシルト層の上に粘質シルト層を重ねている。

主柱穴は 4 基で、拡張に伴い一度掘り直しを行っている。拡張前の主柱穴 377 と 380 は貼床を



竪穴住居324

- 1 10YR4/2灰黄褐色 シルト～極細砂 焼土少量混
- 2 10YR3/2黒褐色 シルト～極細砂 炭化物少量混
- 3 10YR3/2黒褐色 シルト～極細砂 10YR6/6明黄褐色シルトブロック混
- 4 10YR3/1黒褐色 シルト～極細砂 焼土・炭化物やや多量混
- 5 10YR3/1黒褐色 シルト～極細砂 焼土・炭化物多量混
- 6 10YR4/6褐色 粘質シルト 10YR3/1黒褐色シルト～極細砂混 固く締まる(貼床)
- 7 10YR4/4褐色 シルト～細砂 炭化物少量混 10YR5/6黄褐色シルトブロックまでに混
- 8 10YR4/4褐色 シルト
- 9 10YR3/2黒褐色 シルト～極細砂 炭化物・焼土少量混
- 10 10YR2/2黒褐色 シルト～極細砂 炭化物・焼土多量混
- 11 10YR3/3暗褐色 シルト～極細砂に10YR5/4粘質シルトブロック多量混
- 12 10YR2/2黒褐色 シルト～極細砂 炭化物・焼土多量混

土塊349

- 1 10YR4/2灰黄褐色 シルト やや粘質
- 2 2.5Y4/1黄灰色 小礫混中～極粗砂
- 3 10YR3/3暗褐色 粘質シルト～極細砂 炭化物少量混
- 4 10YR2/1黒 粘質シルト 炭化物80%以上 焼土10%
- 5 10YR3/3暗褐色 粘質シルト 10YR6/6明黄褐色シルトブロック混 炭化物少量混
- 6 2.5Y5/2暗灰黄色 シルト～極細砂 1～2cmの礫・炭化物少量混
- 7 10YR4/4褐色 シルト 炭化物微量混
- 8 10YR4/6褐色 粘質シルト 10YR3/1黒褐色シルト～極細砂混 固く締まる(貼床)
- 9 10YR4/4褐色 シルト (無遺物層)

土塊376

- 1 10YR3/2黒褐色 シルト～極細砂 炭化物多量混
- 2 10YR4/2灰黄褐色 シルト～極細砂 10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック多量混
- 3 10YR4/3黒褐色 極細砂

柱穴377

- 1 10YR4/2灰黄褐色 シルト～極細砂
- 2 10YR4/1褐灰色 シルト～極細砂 炭化物・焼土多量混
- 3 10YR4/2灰黄褐色 極細～細砂 焼土多量混

柱穴380

- 1 10YR4/2灰黄褐色 シルト～極細砂 炭化物少量混
- 2 10YR3/2黒褐色 シルト～極細砂 炭化物・焼土少量混

図20 竪穴住居324 実測図 (1:50)

除去して検出した。直径0.3～0.4 mの円形で深さは0.45 mと0.2 m。拡張後の柱穴は346と375の2基検出し、直径約0.4 mの円形で深さは0.6 mある。

住居の中央南寄りでは、炉と考えられる土壙349を検出した(図版4-3)。直径0.4 m×0.55 mの平面楕円形の土壙の周囲に、褐色シルトを幅0.4～0.6 m、高さ3～4 cm盛り上げて堤をつくる。土壙の深さは0.6 mあり、埋土は下から0.4 mまではシルト～極細砂層(5・6層)で、その上に炭化物と焼土を多量に含む粘質シルト層が堆積する(4層)。土壙の肩口には砂礫が敷かれていた(2層)。堤の上には焼けて炭化物が貼りつく箇所がある。

最終拡張後の竪穴住居床面から、住居廃絶時に遺棄された土器群(a～d)が出土した。時期は後期前半。土器群(d)の周囲には炭化材が認められた。樹種はブナ科コナラ属コナラ亜属である。また、北側には床面土器とは出土状況の異なる土器の一群が認められた(図版4-2)。後期前半から半ばのもので、個体としてのまとまりを欠き、多器種の破片が混じることから住居が埋められる過程で一括投棄されたものと考えられる。

住居北端の土壙376は、直径0.6 mの円形で、深さは0.3 m。断面は逆台形状を呈する。貯蔵穴の可能性はある。

竪穴住居148・428・475・476(図21～23、図版5・6) この4棟は調査区南西隅で重複して検出した。切り合い関係から、竪穴住居475、476、428、148の順となる。各住居に伴う遺構からはいずれも後期前半の遺物が出土し、方位の振れが共通することからも連続して建て替えられたものと考えられる。竪穴住居428は2回、竪穴住居148は3回拡張を行っており、3度の建て替えを含めると9時期の変遷が考えられる(図24)。各住居の規模とそれに伴う遺構は表3にまとめた。中央土壙は炉、壁際の土壙はいわゆる貯蔵穴と考えられる。

最も古い竪穴住居475は、削平されて住居の南東隅部分と支柱穴、中央土壙のみ残存する。残存する南東隅部分は、多量の焼土と炭化物で埋まり(図23 断面H-H')、焼失住居の可能性はある。焼土の中には、細かく粉碎した骨片や炭化物が多量に混じっていた。

竪穴住居476は、連結する深い中央土壙487・488(図23 断面G-G')をもつ。壁際土壙432の底は平坦である(図8 34～36層)。

竪穴住居428は2回拡張を行う。支柱穴は434・466・537は拡張後も踏襲するが、445は426に掘り直しを行う。中央土壙は連結する土壙471・472(図23 E-E')を踏襲する。壁際土壙は掘り直しを行う。続く竪穴住居148-Aへの建て替え時には、小礫を多量に含むシルト層で1～5 cmの貼床を行っている(図22 断面A-A'・B-B' 19層)。北側で特に厚い。

竪穴住居148は3回拡張を行うが、2回目の拡張時にもさらに1～7 cmの貼床を行う(図22 A-A'・B-B' 12層)。中央土壙は拡張後も掘り直しを行わず、土壙360を踏襲するが、貼床を行った際、土壙360の周囲にさらに別の土を盛っており(13層)、土壙の深さを確保するためと考えられる。壁際土壙は、掘り直しを行う。支柱穴は148-A・B段階では4基であるが、148-C・Dでは6基となる。最終段階の竪穴住居148-Dの床面上には多量の土器が遺棄されていた(図25 a～k)。時期は後期前半。この148-Dの埋土はレンズ状に堆積し、肩口には炭化

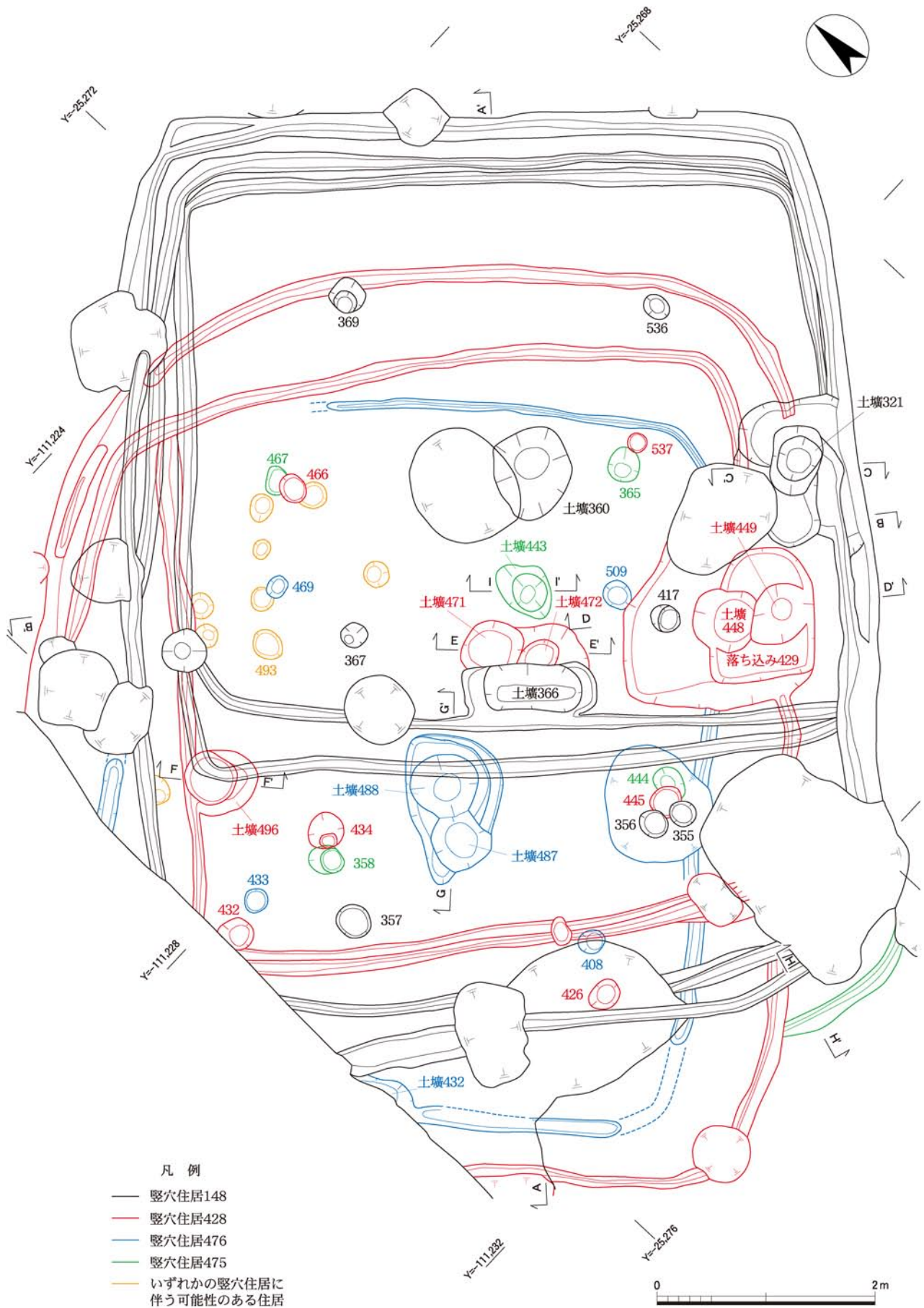


図 21 竪穴住居 148・428・475・476 平面図 (1 : 50)

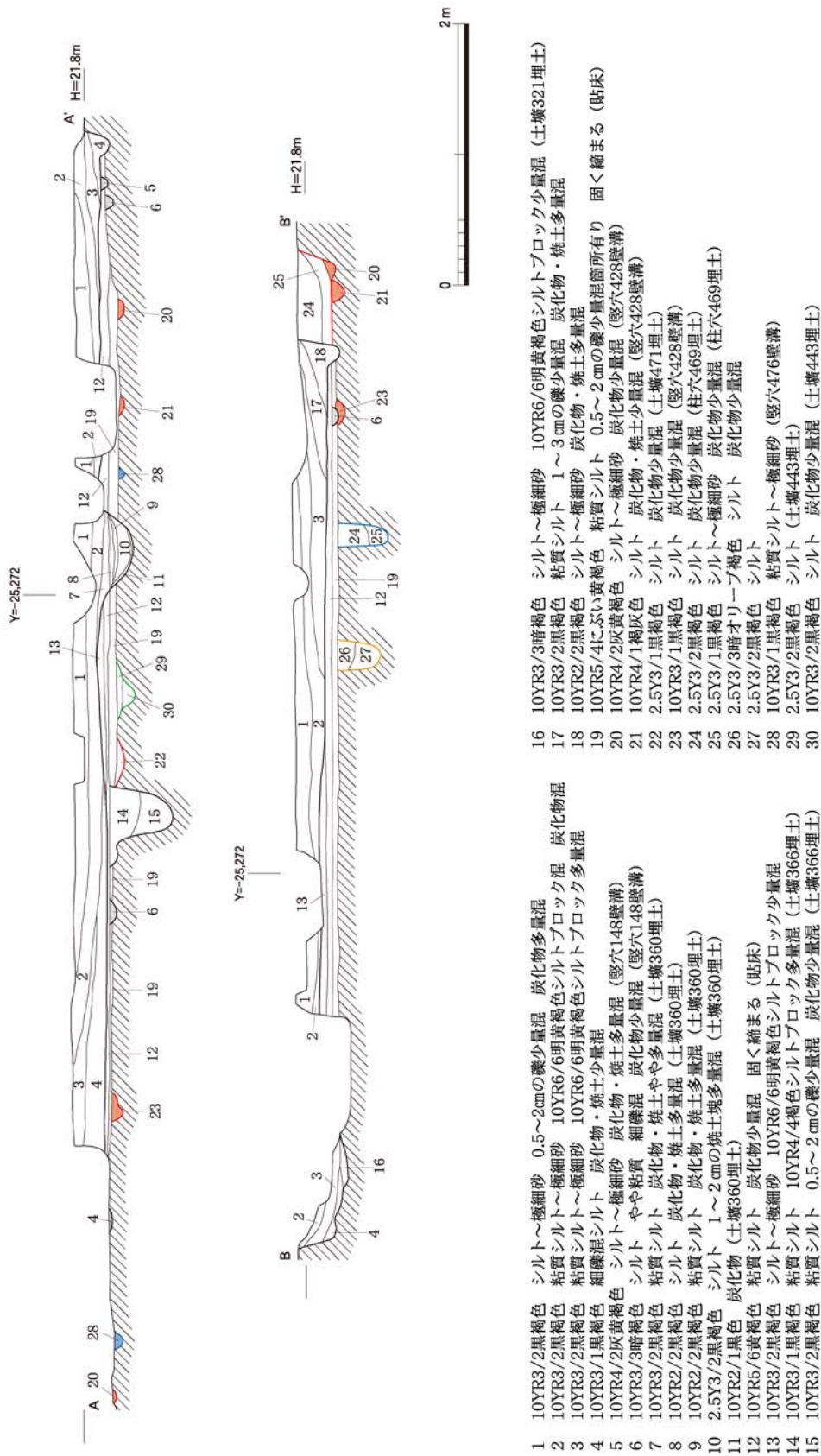
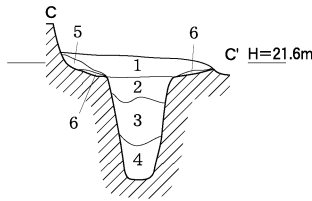


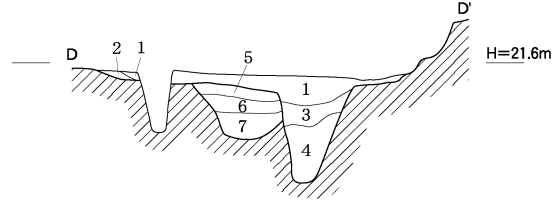
図22 竪穴住居 148・428・475・476 断面図1 (1 : 50)

土壌321



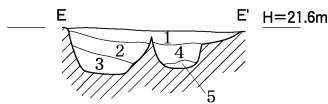
- 1 10YR4/2灰黄褐色 シルト～極細砂
炭化物・焼土少量混
- 2 10YR3/2黒褐色 シルト～極細砂
10YR6/6明黄褐色シルトブロック混
- 3 10YR3/2黒褐色 シルト～極細砂
炭化物・焼土やや多量混
- 4 10YR3/2黒褐色 粘質シルト
10YR6/6明黄褐色シルトブロック混
- 5 10YR4/2灰黄褐色 シルト～極細砂
炭化物・焼土混 固く締まる
- 6 10YR5/4にぶい黄褐色 極粗砂～細礫

土壌448 土壌449



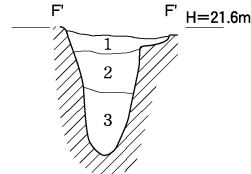
- 1 10YR4/2灰黄褐色 シルト～極細砂
10YR6/6明黄褐色シルトブロック混
- 2 10YR6/4にぶい黄褐色 シルト
2～3cmの礫多量混
- 3 10YR3/1黒褐色 粘質シルト 炭化物・焼土少量混
- 4 10YR3/1黒褐色 シルト 10YR6/6明黄褐色
シルトブロック少量混
- 5 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 小礫多量混
- 6 10YR5/6黄褐色 粘質シルト
- 7 10YR5/4にぶい黄褐色 細礫混シルト～極細砂
炭化物・焼土少量混

土壌471 土壌472



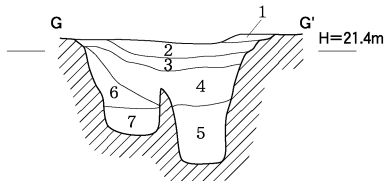
- 1 2.5Y3/1黒褐色 シルト～極細砂 炭化物少量混
- 2 2.5Y3/2黒褐色 シルト 炭化物少量混
- 3 10YR4/2灰黄褐色 シルト～極細砂
10YR6/6明黄褐色シルトブロック少量混
- 4 10YR3/2黒褐色 シルト 炭化物少量混
- 5 10YR4/2灰黄褐色 シルト～極細砂 炭化物少量混

土壌496



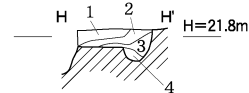
- 1 10YR3/1黒褐色 シルト 炭化物少量混
- 2 2.5Y3/1黒褐色 シルト 炭化物少量混
- 3 10YR3/1黒褐色 シルト～極細砂
10YR6/6明黄褐色シルトブロック少量混

土壌487 土壌488



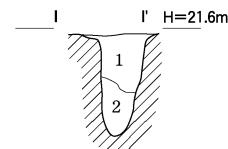
- 1 10YR4/3にぶい黄褐色 細礫混じりシルト
黒褐色シルト帯状に混
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 黒褐色シルト帯状に混
- 3 10YR4/4褐色 シルト 10YR4/4褐色シルトブロック混
炭化物・焼土少量混
- 4 10YR3/2黒褐色 シルト 10YR6/6明黄褐色シルトブロック混
炭化物少量混
- 5 10YR4/2灰黄褐色 10YR6/6明黄褐色シルトブロック混
炭化物・焼土塊混
- 6 10YR4/2灰黄褐色 シルト 炭化物・焼土少量混
- 7 10YR3/2黒褐色 シルト 10YR6/6明黄褐色シルトブロック混
炭化物・焼土混

竪穴住居475



- 1 2.5Y6/4にぶい黄色 シルト 10YR3/1黒褐色
シルトブロック混 炭化物・焼土少量混
- 2 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト
10YR6/6明黄褐色シルトブロック混 焼土多量混
- 3 10YR3/1黒褐色 シルト 炭化物・焼土多量混
- 4 10YR5/6黄褐色 シルト

土壌443



- 1 2.5Y3/2黒褐色 シルト
- 2 10YR3/2黒褐色 シルト 炭化物少量混

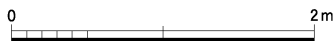
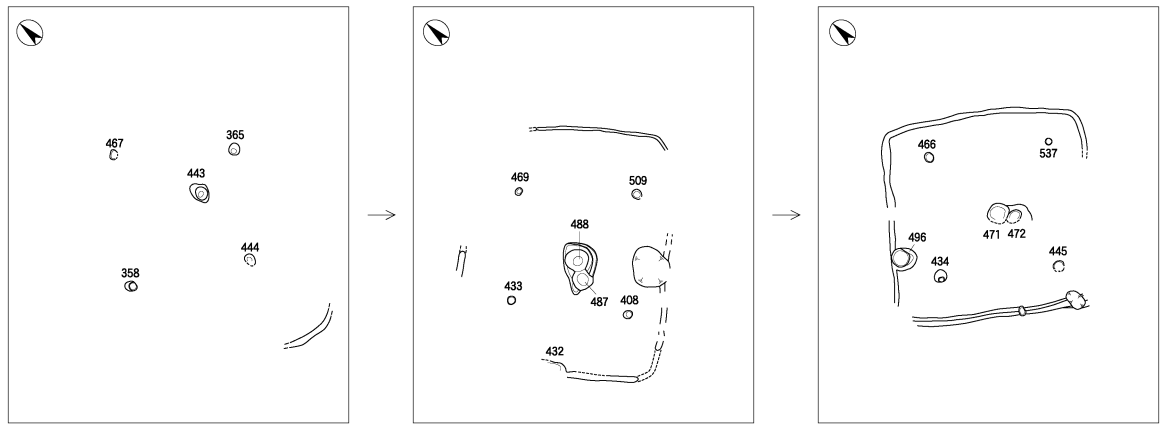


図23 竪穴住居 148・428・475・476 断面図2 (1:50)

表3 竪穴住居 148・428・475・476 一覽表

住居番号	平面形	大きさ		主柱穴			壁溝			中央土壇				壁際土壇				備考		
		規模 (m) (短辺×長辺)	高さ	番号	直径	高さ	幅	高さ	番号	平面形	直径	高さ	番号	平面形	直径	高さ				
475	不明	不明	13	358・365・ 444・467	20~30	36~62	13~15	5~7	443	円形	35	65								
476	隅丸長方形	5.2×6.3	30~35	408・433・ 509・469	20~25	18~57	7~15	2~5	487・ 488	円形連結	50・60	65・80	432	不明	不明	42			北に対して約50度 東に振る	
428-A	隅丸長方形	5.1×5.1	30	434・445・ 466・537	18~30	20~42	10~25	4~8	471・ 472	円形連結	50・35	25・30	496	円形	45	75				
428-B	隅丸長方形 (南北に振る)	6.0×7.3	30	466・537・ 426・432	18~30	21~54	10~18	4~6	"	"	"	"	448	円形	60	35			北に対して約45度 東に振る	
428-C	隅丸長方形	6.5×8.0	27	"	"	"	10~15	3~5	"	"	"	"	449	円形	50	60				
148-A	隅丸長方形	4.8×5.8	25	367・369・ 417・536	20~25	42~64	10~20	5	360	円形	70	25	366	長方形	40×90	45				
148-B	隅丸長方形	5.2×5.8	25	"	"	"	15~20	5	"	"	"	"								
148-C	隅丸長方形	6.1×7.5	20	367・369・ 417・536・ 357・355 または356	20~25	42~64	10~15	6	"	"	"	10	321	楕円形	45×60	70				
148-D	隅丸長方形	6.3×8.0	20	"	"	"	10~20	5~7	"	"	"	"	"	"	"	"				

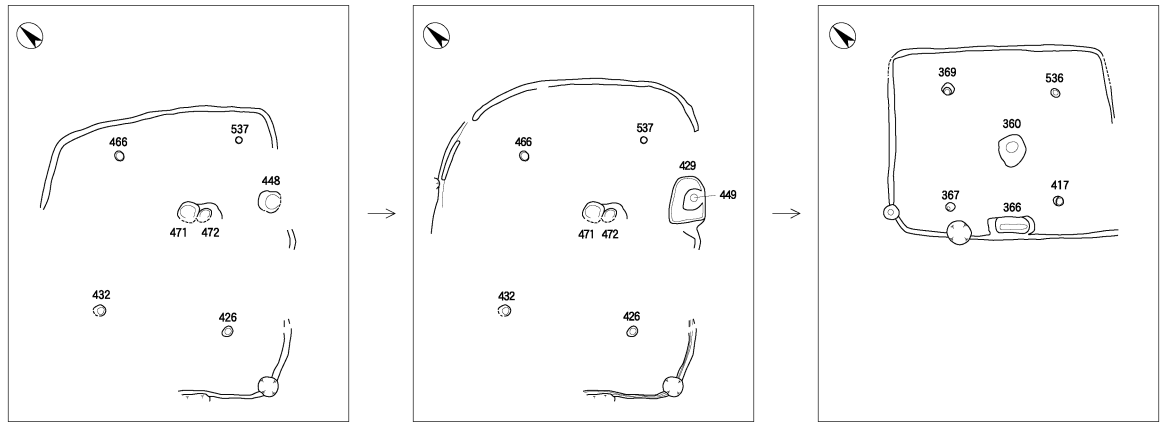
※特に記述のない単位はcm。



豎穴475

豎穴476

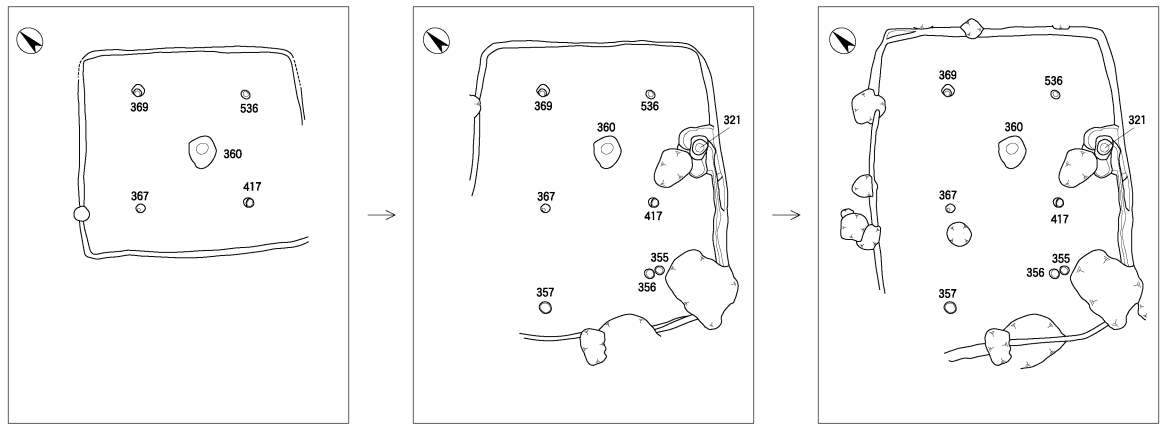
豎穴428-A



豎穴428-B

豎穴428-C

豎穴148-A



豎穴148-B

豎穴148-C

豎穴148-D



図24 豎穴住居 148・428・475・476 変遷図 (1:200)

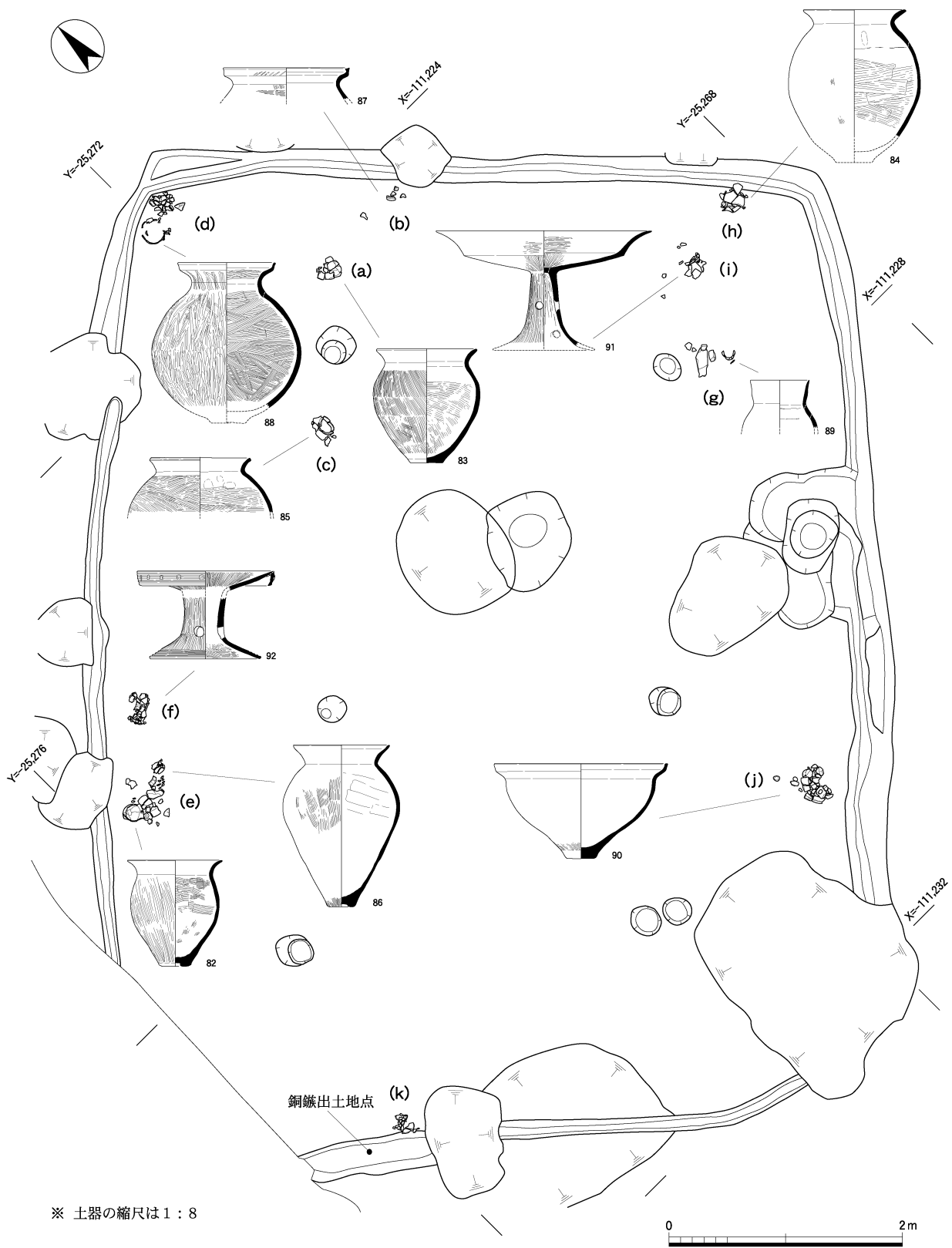


図25 竪穴住居 148-D 遺物出土状況図 (1:50)

物と焼土のブロックの混じる箇所がある。南端壁溝付近の埋土からは、銅鏃が出土した(図25・26)。

竪穴住居 214 (図 28、図版 7) 調査区中央南寄りに位置する。方位は正方位を向く。東側に 2 回、他は 1 回の拡張を行う。当初は一辺 4.5 m 四方の隅丸方形で、次に東側を 0.3 m 拡張する。最終的には約 5.0 m 四方の隅丸方形になるが、胴の張りが強く、南北対辺間の長さは最大約 6 m になる。壁溝の幅は 0.1



図 26 竪穴 148-D 銅鏃出土状況 (東から)

～0.2 m、深さ 0.05～0.08 m。壁溝の底にはさらに幅 0.03～0.05 m の断面 V 字状の溝の痕跡が認められる箇所がある。竪穴住居の深さは、中央部で検出面から 0.05 m、壁溝に近い部分は検出時にすでに床面が露出していた。建物の中央部分(緑破線の範囲)は、貼床を行っている(断面 15・16 層)。層厚は北半では約 1～2 cm、南半では 5～7 cm ある。また、南西部分では、にぶい黄褐色シルト層と明黄褐色シルト層を交互に入れ、版築状に床を構築していた(16 層)。南半下層には、住居成立以前の遺構が多数あり、厚い貼床を必要とした可能性がある。床面からは壺が 2 点(a・b)出土した。時期は後期前半。

中央には、炉状施設がある。その中央の土壇 215 は、2 段に落ちる形状を示し、上段は南北 0.9 m、東西 0.8 m の方形、深さは 0.15 m。下段は直径 0.5 m の円形で深さは 0.5 m。下段の円形土壇の埋土(3～7 層)はシルトを主体とし、炭化物・焼土を含む。最下層の 6・7 層では、炭化物層が薄く何層にも重なって堆積していた。4・5 層からは多量の土器が出土している。土壇の壁には焼けた痕跡は認められなかった。この土壇西側には幅 0.25 m の浅い溝状のものが取り付く。攪乱で削平されるが、西側にこれに繋がる遺構が存在した可能性がある。土壇の周囲には、盛土による堤をめぐらす(13 層)。堤は 2 m 四方の正方形で、幅 0.15～0.2 m、高さは 0.05 m。堤の南辺で内側に突出する箇所があり、堤と突出堤に囲まれた部分は浅く窪んで皿状になる。炭化物と焼土が堆積し、焼け締まる。堤外の南でも直径 0.5 m の浅い土壇状の遺構を検出した。深さは 0.05 m で、埋土には土器片と炭化物、焼土が多量に混じる。壁は焼け締まり、一連の遺構と考えられる。

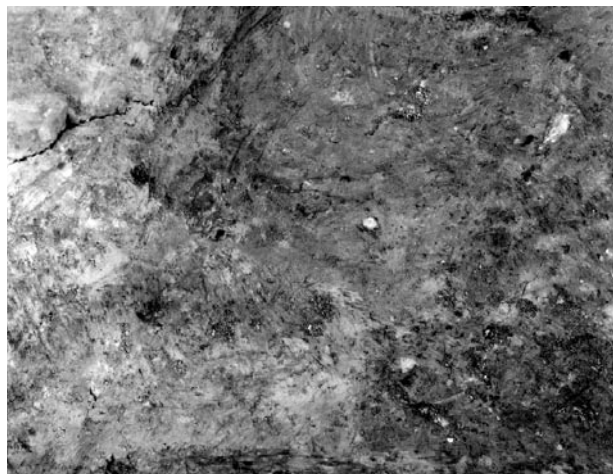


図 27 竪穴住居 214 炉状施設
ガラス小玉出土状況 (北西から)

また、堤内側と周囲にも、炭化物と焼土が薄く堆積していた。特に堤と土壇の間の幅約 0.3 m の平坦部分には、特に厚く炭化物と焼土が堆積し(12 層)、その中からガラス小玉

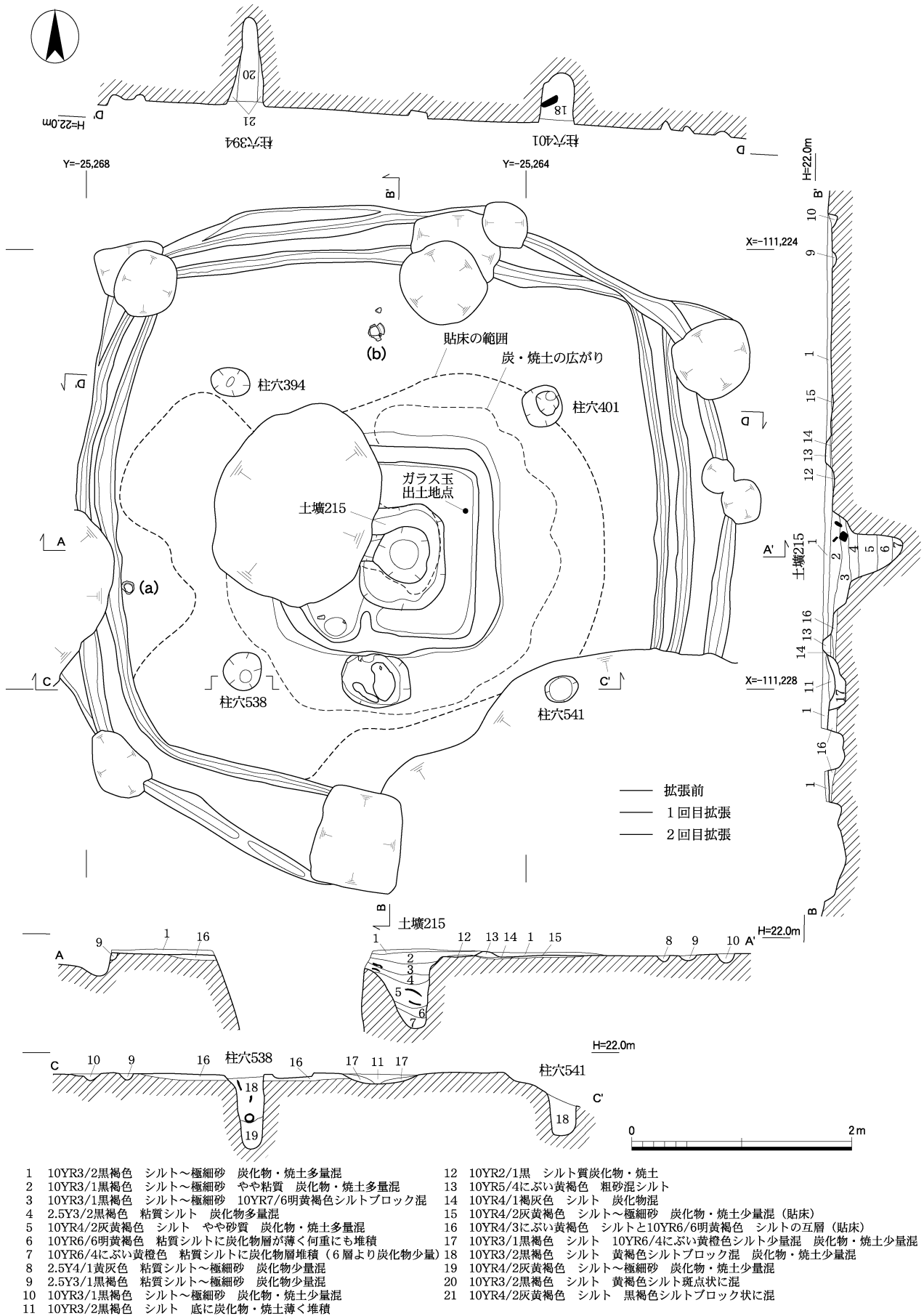


図 28 竪穴住居 214 実測図 (1 : 50)

が一点出土した（図 27・28）。土壙 215 埋土 5 層からも滑石製白玉が出土したことから、堤内側と土壙埋土の水洗篩別を行ったが、他に玉類はみつかっていない。

竪穴住居 474（図 29、図版 8・9）調査区の西端にあり、東は近世の土壙に、南は竪穴住居 148 に削平される。平面形は、残存する壁溝から復元すると歪な隅丸方形になると考えられる。北側は 0.3 m 拡張を行う。対辺間の最大長は南北約 6 m、東西約 7 m と推定される。壁溝の幅は 0.1 ～ 0.2 m、深さは 0.05 ～ 0.1 m ある。北側の拡張後の壁溝底にはさらに幅 3 ～ 5 cm、深さ 5 cm の溝が認められた。板材を立てた痕跡と考えられる。竪穴住居の深さは、検出面から 0.05 ～ 0.1 m。住居の床面上からは土器が 5 個体（a ～ e）出土した。時期は後期前半。北西壁溝際には、大きさ約 0.1 × 0.3 m の焼土塊が認められた。また、床面出土土器（c）の西には石皿状の石が据えられていた。

主柱穴は柱穴 502 と 503 の 2 基を検出した。いずれも柱の抜き取りが行われている。柱穴 502 は直径 0.45 m、深さは 0.4 m ある。柱穴 503 は掘形の直径 0.2 m、深さは 0.6 m で、抜き取り穴の直径は 0.4 m ある。

中央では炉状施設と考えられる遺構を検出した。南北約 3 m、東西約 2 m にわたって幅 0.1 ～ 0.2 m、高さ 0.03 ～ 0.05 m の盛土による堤をめぐらす。その内側に、3 つの土壙が配置される。北側の土壙 501 は、直径 0.65 m、深さ 0.08 m で、断面形は浅い皿状。壁は焼け締まり、底には炭化物と焼土が堆積していた（25 層）。土壙 501 の南には、南北に連なる土壙 479 と 500 がある。両土壙には切り合いがなく、幅 0.15 m の溝状のもので繋がり、並存したと考えられる。土壙 479 は直径 0.6 m、深さ 0.7 m で、断面は 2 段に落ちる形状を示す。土壙 500 は、直径 0.6 m、深さ 0.65 m で断面は逆台形状である。いずれも壁は焼けておらず、埋土は、均質なシルト層と粘質シルトブロックを多量含むシルト層（18 ～ 23 層）で固く締まる。土壙 479 の肩口ではガラス小玉が出土した（図 29・30）。この土壙 479・500 の埋土は持ち帰り、現在水洗篩別を行っている。堤に囲まれた炉状施設北半は、炭化物が薄く堆積していた（ピンク破線）。また、断割調査の結果、この炉状施設の下層で、深さ 5 ～ 10 cm の浅い掘り込みを確認した（青ライン）。この掘り込み底は焼け締まり、薄く炭化物が堆積していた（8 層、図版 9-1）。その上に粘質シルトを貼り（7 層）、その上面から土壙 479・500 などを掘り込んでおり、脱湿を意図した炉状施設構築のための一連の作業の可能性が考えられる。掘り込み底からは大型蛤刃石斧の未成品が出土した（図版 9-2）。

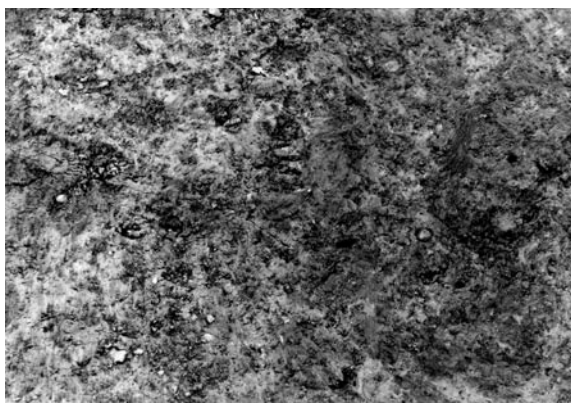


図 30 土壙 479 ガラス小玉出土状況（西から）

炉状施設東で検出した土壙 506 は、土壙 479・500 と類似した埋土で固く締まり、断面は逆台形状を呈する。

竪穴住居 484 調査区の南西隅で壁溝の一部を検出した。壁溝の幅は 0.1 ～ 0.15 m、深さは 0.05 ～ 0.1 m。竪穴住居の深さは検出面から約

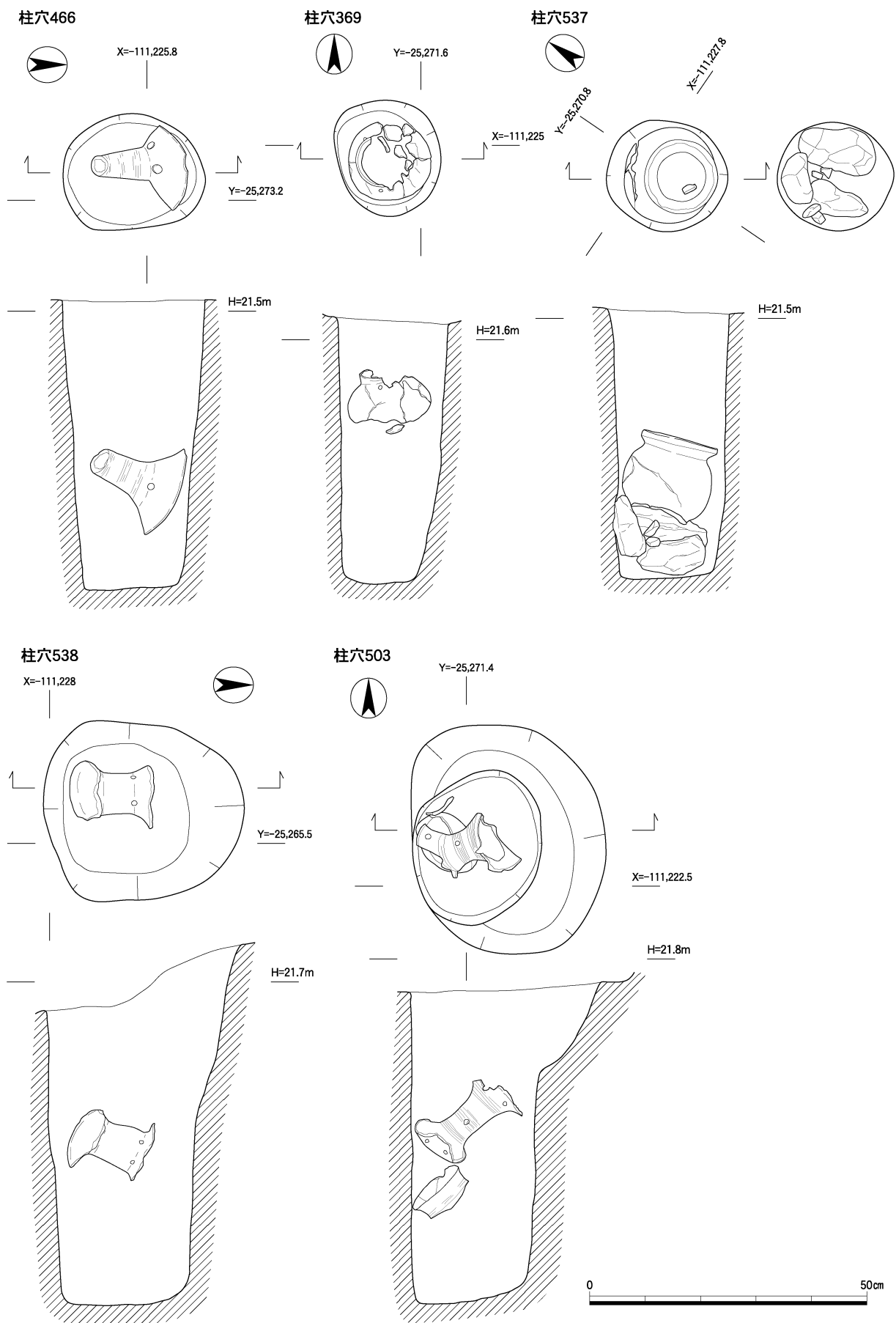
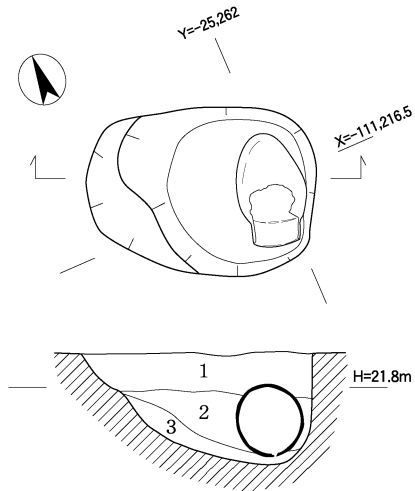


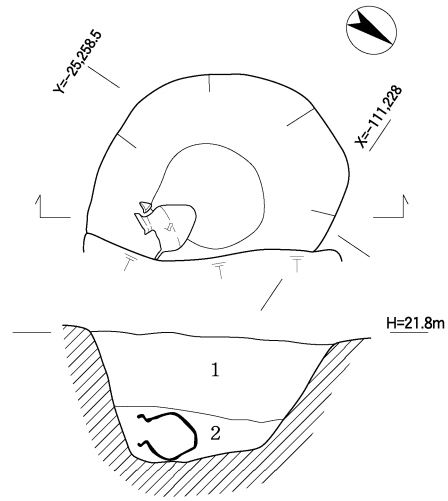
图 31 土器埋納柱穴実測図 (1 : 10)

土壌13



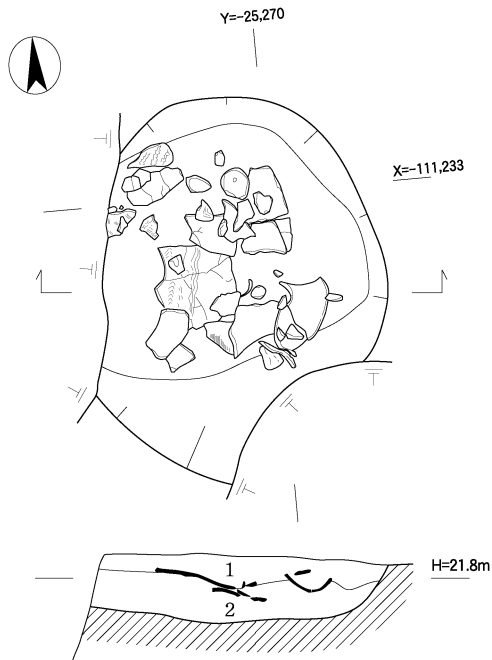
- 1 7.5YR3/1黒褐色 粘質シルト 炭化物・焼土多量混
- 2 10YR3/2黒褐色 粘質シルト～極細砂
- 3 7.5YR3/1黒褐色 粘質シルト～極細砂

土壌309



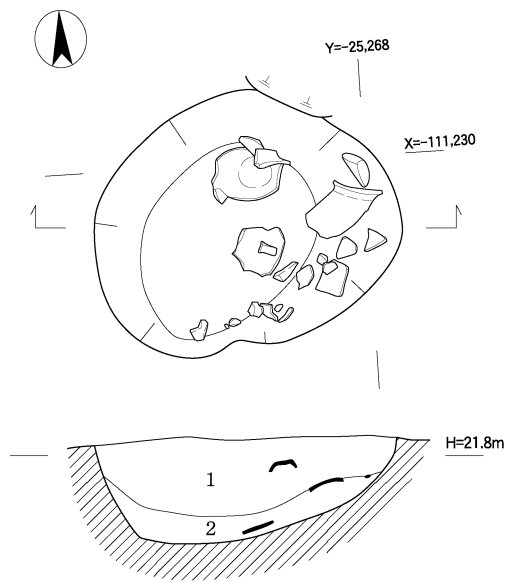
- 1 10YR4/2灰黄褐色 シルト 炭化物少量混
- 2 10YR3/2黒褐色 シルト～極細砂 やや粘質 炭化物・焼土混

土壌199



- 1 10YR4/2灰黄褐色 シルト～極細砂 炭化物少量混
- 2 10YR4/1褐灰色 シルト～極細砂 炭化物多量混

土壌143



- 1 10YR3/2黒褐色 シルト～極細砂 炭化物多量混
- 2 7.5YR3/1黒褐色 粘質シルト 炭化物多量混



図 32 弥生時代土壌実測図 (1 : 20)

0.2 mある。

土器埋納柱穴（図 31、図版 10） 4 棟の竪穴住居の 5 基の支柱穴から、柱抜き取り後に埋納されたと考えられる土器が出土した。

柱穴 369 は竪穴住居 148 の北支柱穴で、直径 0.2 m、深さ 0.48 m。底から 0.3 m 上で、精製の無頸壺が正置された状態で出土した。埋土は、2.5Y3/2 黒褐色炭化物混シルト。柱穴 466 は、竪穴住居 428 の北支柱穴である。直径 0.25 m、深さは 0.5 ～ 0.52 m がある。底から 0.1 m 上に、杯部を打ち欠かれた高杯脚部が横置されていた。埋土は 2.5Y3/2 黒褐色の炭化物混粘質シルト。柱穴 537 は竪穴住居 428 の東支柱穴で、直径 0.2 m、深さ 0.47 m。底に長さ 10 ～ 15 cm、幅 5 ～ 7 cm のチャートの河原石が 3 石並べられ、1 石は立てて置かれていた。その上に、底部を打ち欠いた甕が据えられていた。埋土は 10YR3/4 暗褐色の炭化物混シルトである。柱穴 538 は、竪穴住居 214 の南西支柱穴である。直径 0.3 m、深さ 0.65 m。底から 0.25 m 上に完形に近い器台が横置されていた。埋土は、7.5YR3/2 黒褐色のシルト層。柱穴 503 は竪穴住居 474 の支柱穴である。直径 0.25 m、深さ 0.55 m。底から 0.25 m 上で器台が、さらにその下から脚部が打ち欠かれた高杯杯部が出土した。埋土は 2.5Y3/1 黒褐色の炭化物混シルト。

また、建物に伴うものかは不明であるが、調査区北東隅で検出したピット 3 の底から 0.25 m 上で器台が横置されて出土した。掘形の直径は 0.25 m、深さ 0.5 m。

土壙（図 32） 土壙 309 は調査区南東で検出した。古墳時代の土壙 128 に削平される。平面は直径 0.65 m の円形。底は平坦で、断面は逆台形状を呈する。深さは 0.3 m。完形の甕 1 点が横置された状態で出土した（図 33）。時期は中期末か。埋土には炭化物と焼土が少量混じる。土壙 13 は調査区北東で検出した。0.45 × 0.6 m の隅丸長方形の土壙で、深さは 0.3 m、底は平坦である。体部に穿孔のある壺が横置された状態で出土した。時期は中期後葉。埋土には炭化物と焼土が少量に混じる。土壙 199 は調査区南端中央で検出した。近世の土壙に削平される。直径 0.9 × 1.0 m の楕円形で、深さは 0.2 m。埋土は、下層が炭化物の筋状に混じるシルト～極細砂層（2 層）で、その上面で中期中葉の土器片がまとまって出土した（図版 10- 4）。上層（1 層）は炭化物が疎らに混じるシルト～極細砂層である。土壙 143 は土壙 199 の北東で検出した。直径 0.7 m × 0.8 m の不整円形で、深さは 0.25 m。埋土には炭化物と中期中葉～後葉の土器片を多量に含む。

溝 400 竪穴住居 324 の下層で検出した。北北東から南南西方向の溝で、深さは北で 0.15 m、南で 0.2 m がある。中期後葉の遺物が出土している。

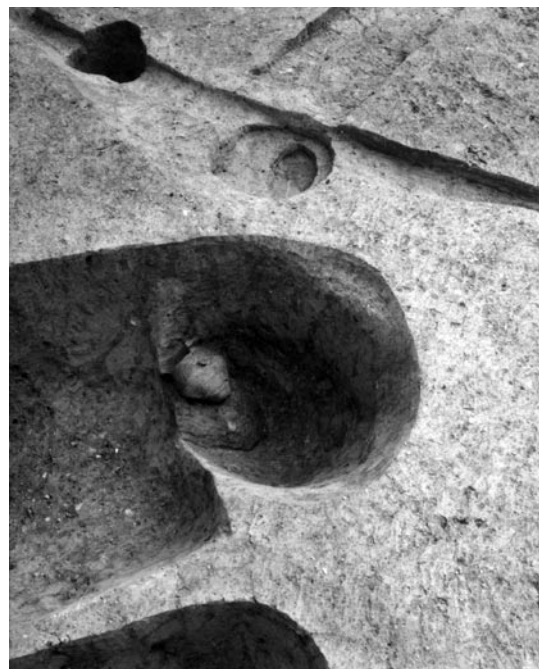


図 33 土壙 309（北東から）

(7) 時期不明の遺構 (図7)

集石 285 (図 34・35) 調査区北東で検出した。直径 10 cm 前後のチャートの河原石 1 石を立て、その周囲に 4 石の河原石が並べて据えられていた。無遺物層と同じにぶい黄褐色シルト層で埋められ、掘形は明瞭でない。

註

- 1) 本報告では、竪穴住居の壁面を削って床面積を広げることを「拡張」、一度全て埋め戻し、新たにその上から掘り直しを行うことを「建て替え」とする。「拡張」の場合は同一の遺構番号を用い、必要に応じて後ろにアルファベットの枝番号を付けた。「建て替え」の場合は別の遺構番号を付けている。

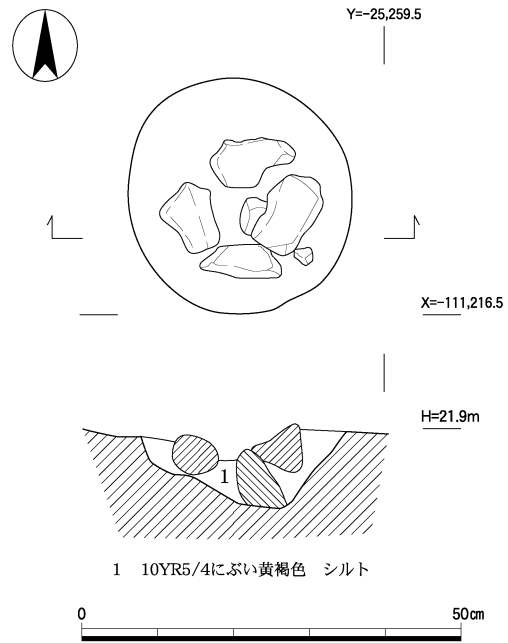


図 34 集石 285 実測図 (1 : 10)



図 35 集石 285 (南から)

4. 遺 物

遺物は整理箱にして75箱出土した。種類は、土器、土製品、瓦、井戸枠に使用された木材、石器、金属製品、玉類、動植物遺存体がある。時代は縄文時代から近世までのものが出土している。出土状況や遺物の性格が異なるため、種類別に、土器・土製品、瓦、木製品、石製品、金属製品、玉類、動植物遺存体の順に概要をのべる。

なお、竪穴住居474の埋土と、この住居の炉状施設と考えられる土壙479・500の埋土については水洗篩別作業を行っている。総量は土嚢約200袋分ある。現在、住居埋土分の約9割が終了し、多種の遺物が出土している。今後さらにその種量の増加が予想されることから、本報告では、現段階までに出土したものの概要を掲載し、全ての水洗篩別終了後に成果をまとめて年報にて報告を行う予定である。

(1) 土器・土製品

出土した土器には弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、奈良時代の土師器・須恵器、平安時代の灰釉陶器と土師器、中近世の陶磁器類がある。量的には弥生土器が大半を占め、奈良時代の土器がそれに次ぐ。平安時代から近世のものは微量である。遺構一括出土の資料を中心に図示し、掲載土器の概要は表7にまとめた。土製品としては弥生時代の土錘がある。概要は表8にまとめた。

1) 平安時代前期 (図36、図版11)

平安時代の土器には、土壙301から出土した灰釉陶器と土師器がある。時期は平安時代前期中

表4 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	石器	58箱	石鏃1点	39箱	0箱
弥生時代	弥生土器		弥生土器80点		
	土製品、石器、金属製品、ガラス玉、石製玉、動植物遺存体		土錘10点、石器64点、銅鏃1点、ガラス玉14点、石製玉5点		
古墳時代	土師器、須恵器	3箱	土師器7点、須恵器4点	2箱	0箱
奈良時代	土師器、須恵器	23箱	土師器17点、須恵器32点	13箱	0箱
	平瓦、丸瓦		平瓦2点、丸瓦1点		
	木製品		井戸材10点		
	土製品、その他		土馬1点、赤色顔料1点、種子5点		
平安時代	土師器、緑釉陶器		土師器3点、灰釉陶器1点		
近世	染付、焼締陶器、輸入磁器	1箱		0箱	1箱
合 計		85箱	259点 (30箱)	54箱	1箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後Aランクの遺物を抽出したため、出土時より10箱多くなっている。

葉頃に位置付けられる。1の灰釉陶器碗Aは、断面方形の付高台で内面全体に灰釉をハケ塗りする。器壁は薄手で口縁端部は強く外反する。2・3の土師器碗A・皿Aはともに胎土は精良で薄手、口縁端部は上方へつまみ上げて丸くおさめ、内側には沈線がめぐる。外面はヘラケズリで、口縁部を横ナデする。4の杯Aは、胎土は精良で、器壁は2・3に比べて厚く、口縁端部の上方へのつまみ上げは弱い。外面はヘラケズリ、底部は不定方向ナデ、口縁部は横ナデする。

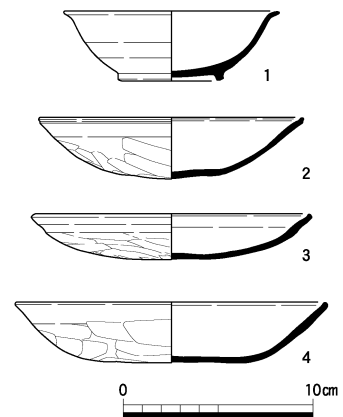


図 36 土壙 301 出土土器
実測図 (1 : 4)

2) 奈良時代

奈良時代の土器は、井戸 249、柱穴 267 などから出土している。特に井戸 249 枠内からは、整理箱にして 4 箱の遺物がまとまって出土した。

井戸 249 枠内 (図 37・38、図版 11・12) 井戸枠内から出土した一群である。破片数では 3,021 片ある (表 5)。比率は土師器が 54.7%、須恵器 19.4%、混入の弥生・古墳時代土器が 25.6% である。土師器には製塩土器 26 片を含む。層位別に取り上げを行ったが、遺物の量や時期の違いは認められなかった。時期は 8 世紀後葉から末葉、奈良時代末から長岡京期に該当すると考えられる。

5～21 は、土師器である。5 は杯 C¹⁾。底部外面は未調整、底部と口縁部の境は短い単位のヘラケズリを行い、口縁部と内面は横ナデする。口縁端部は内傾し、浅い沈線がめぐる。内面には放射状の暗文を施す。6～8 は杯 A である。6 は、横ナデののち、底部と口縁部の境をヘラケズリする。内面には放射状の暗文を施す。口縁端部は上方に突出し、内面に沈線がめぐる。7 は口縁外面は横ナデ、内面は横ナデのちナデ上げにより仕上げる。口縁端部は外反し、内面に沈線をめ

表 5 井戸 249 枠内出土土器比率表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	杯・碗・皿	1233	74.5	54.7
	高杯・盤・鉢	73	4.4	
	甕・釜・鍋	256	15.5	
	製塩土器	26	1.6	
	その他	7	0.4	
	不明	59	3.6	
	小計	1654	100.0	
須恵器	杯・碗・皿	267	45.6	19.4
	壺・瓶	64	10.9	
	甕・大型壺	174	29.8	
	その他	1	0.2	
	不明	79	13.5	
	小計	585	100.0	
弥生・古墳時代土器	774	100.0	25.6	
その他	8	100.0	0.3	
総数	3021	100.0	100.0	

ぐらす。8 は大型で深さのある杯 A で、横ナデののち、底部と口縁部の境に粗いヘラケズリを施す。口縁端部内面には沈線をめぐらす。9 は、碗 A で、横ナデののち底部外面から口縁部にかけて短い単位のヘラミガキを密に施す。口縁端部は丸くおさめる。10 は皿 C。底部は未調整、他は横ナデで仕上げる。口縁部は外反し、端部に煤が付着する。灯明皿か。11・12 は、皿 A である。11 は横ナデ成形で、口縁端部は丸くおさめる。12 は、底部外面のほぼ中央に「南」²⁾の墨書がある。口縁は内弯して立ち上がり、端部は強い横ナデにより外反して上方につまみあげ、内面には沈線がめぐる。13～15 は甕。13 の器壁外面には煤が付着する。口縁部は短く外半して立ち上がる。端部は上方に

つまみあげる。14の口縁部は強く屈曲し、端部を内側に肥厚させる。口縁外面に煤が付着する。15は、外面全体に煤が付着する。口縁部は外半して、端部を上下に拡張する。16～21は高杯Aである。いずれも胎土は緻密で、焼成は堅緻。脚部はすべて粘土紐巻き上げ成形で、脚部内面に横方向の粘土紐接合痕ないしは縦方向のシボリメが見られる。脚部の面取りは8・9・11・12面のものがある。杯部の残存率は低いが、17・21の杯部は、内外面ともに暗文状ヘラミガキを施す。22は土製品の土馬である。ハケのちナデ調整で仕上げ、焼成は良好。左右前脚、左後脚、頭部、尾先を欠損する。胴部断面は半球状である。

23～47は須恵器である。23～28は欠損するがつまみの付く杯蓋と考えられる。23は、内外面と割れ口に銅状の銹滓が少量付着する。24の頂部は平らで、口縁部は強く屈曲する。25～27は、頂部がやや丸みを帯びる。26は口縁部が屈曲するが、25・27の口縁部は直線的で、端部が下方に突出する。28は大型の蓋で、内面に黒色物質が付着する。蓋以外の用途に転用されたものか。29は器壁が厚く大型で、皿Bの蓋と考えられる。頂部は丸みを帯びる。30～33は、杯Aである。30の外面には銹滓が微量付着する。31の口縁端部は外反し、シャープに尖る。他は丸

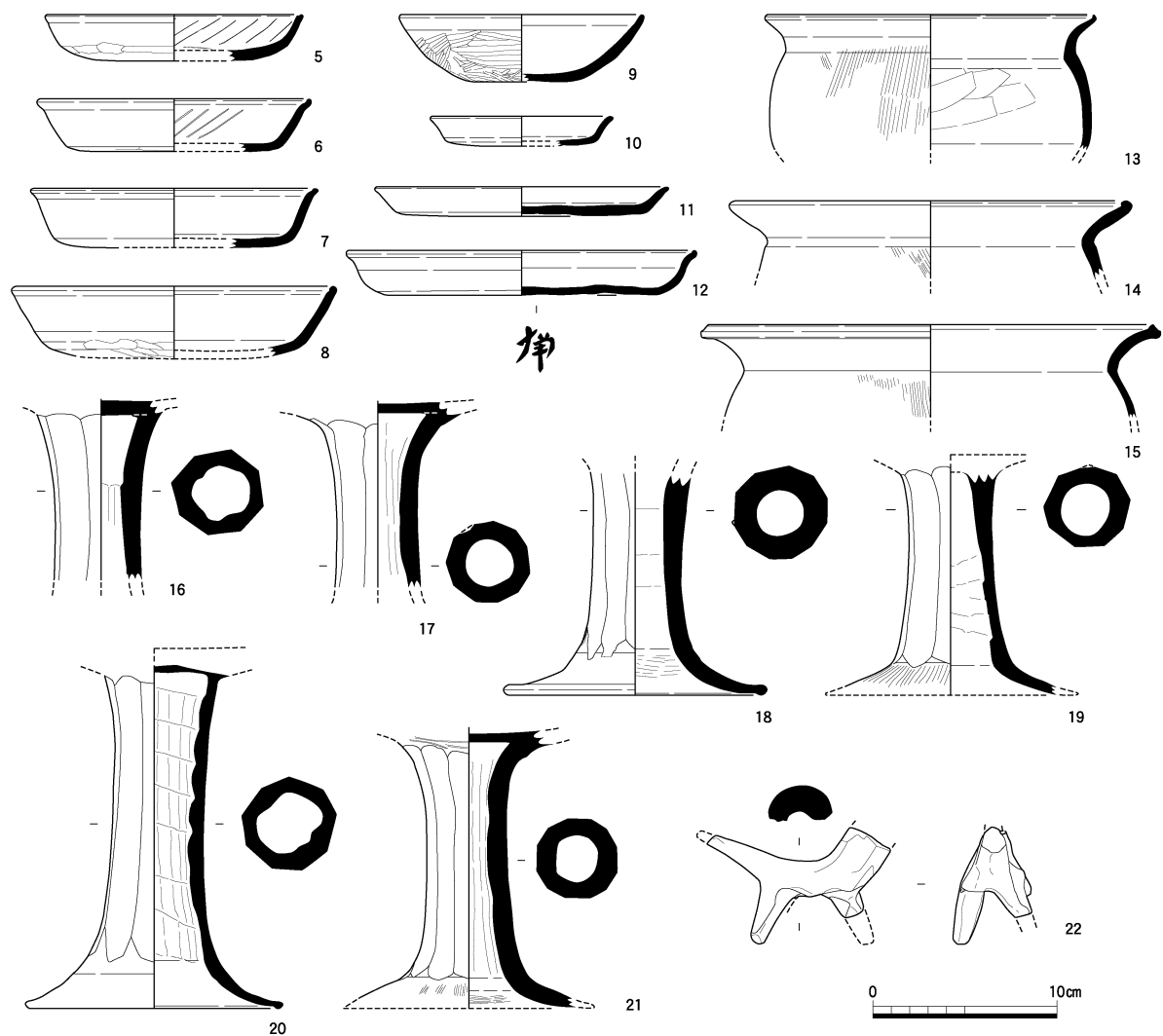


図37 井戸249 枠内出土土師器実測図(1:4)

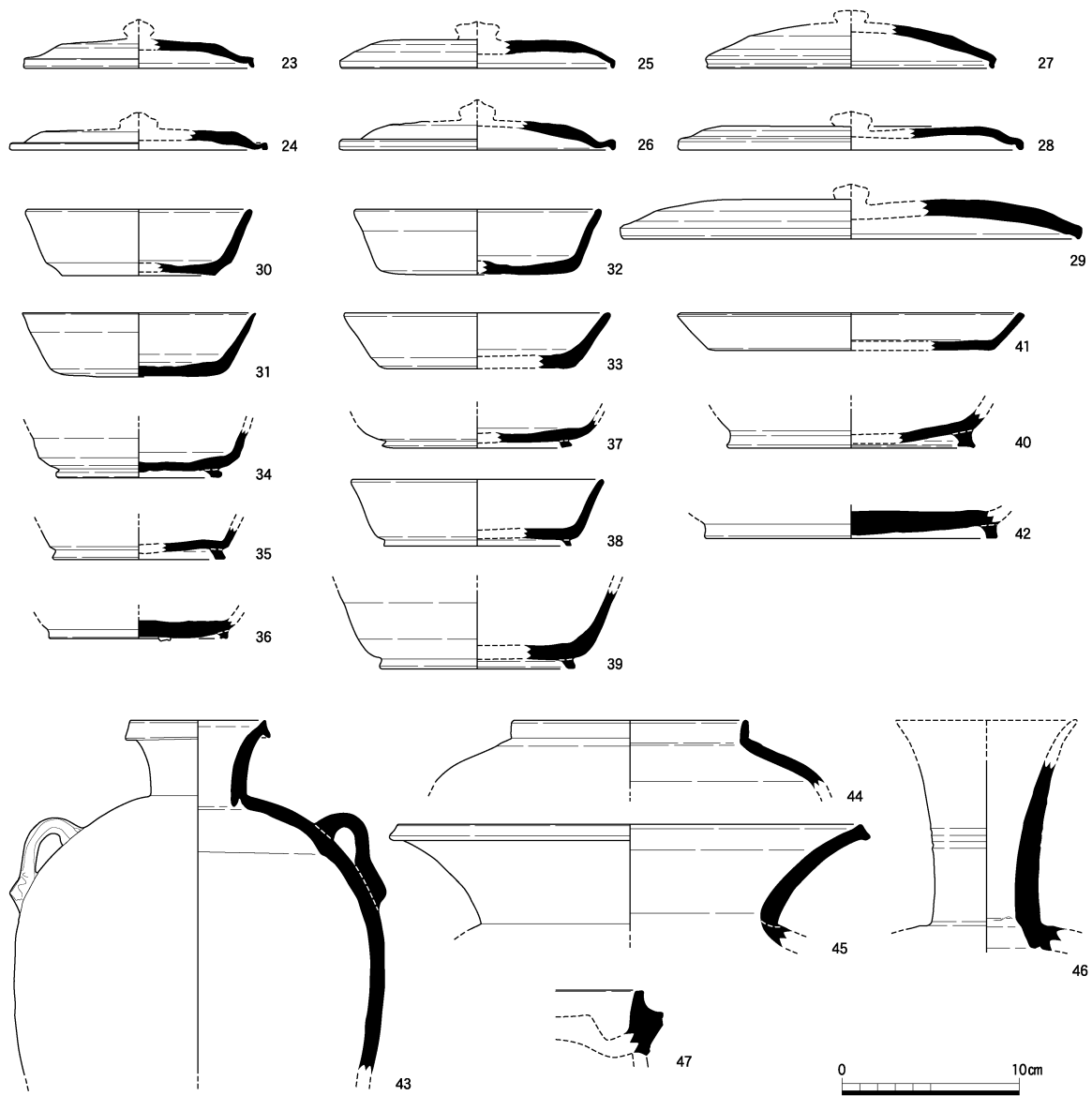


図38 井戸 249 枠内出土須恵器実測図（1：4）

くおさめる端部をもつ。34～40は、杯B。34は全体的に粗雑なつくりで、底部と口縁部の屈曲部は丸みをもつ。外面に自然釉がかかる。36は、内面が平滑で炭が付着することから硯に転用された可能性がある。37・39は底部と口縁部の屈曲部が丸みを帯びる。40の貼付高台は接地部が両側に開く欠かれる。底部外面には爪痕跡が同心円状に付く。41は皿Cで、平坦な底部から口縁部が直線的に斜上方に立ち上がる。42は皿B。粗雑なつくりで、底部外面には指オサエ痕が残り、内面は不定方向の粗い指ナデ。色調は灰白色を呈し、焼成はあまい。43は壺N。頸部は外反して立ち上がり、口縁端部



図39 円面硯47

部が直線的に斜上方に立ち上がる。42は皿B。粗雑なつくりで、底部外面には指オサエ痕が残り、内面は不定方向の粗い指ナデ。色調は灰白色を呈し、焼成はあまい。43は壺N。頸部は外反して立ち上がり、口縁端部

を上下に拡張する。頸部外面には自然釉がかかる。肩部は丸みを帯び、耳状の把手が付く。色調は暗オリーブ灰色を呈する。44は壺A。壺A蓋の破片も出土している。45は甕Aの口縁部。内外面ともに薄緑色の自然釉がかかる。口縁端部は下方に小さく拡張する。46は壺K頸部で、内外面に黒色の自然釉がかかる。中程よりやや下に2条の凹線をめぐらす。47は、透脚円面硯の縁の一部である(図39)。大型のものと考えられる。透かしはヘラ切りにより開ける。縁外面にはヘラケズリを行う。

井戸249掘形(図40、図版11)掘形埋土からは507片の土器が出土した。内訳は、土師器14.9%、須恵器10.3%で、混入の弥生・古墳時代土器が74.8%と大半を占める(表6)。土師器には製塩土器6片を含む。図化できたものはすべて須恵器である。48は、口縁部の屈曲度が強い杯蓋である。49の杯蓋は、頂部がやや丸みを帯び、口縁内面には形骸化した短い返りが付く。50は皿Aで、回転ナデののち内面のみ不定方向のナデを施す。底部はヘラ切り。口縁端部は丸くおさめる。51は杯Bで、口縁が斜上方へ長く直線的に伸びる。焼成はややあまい。52・53は杯Bの高台。53は、器壁が薄く、外面には自然釉がかかる。高台内部には重ね焼きの痕跡と考えられる円形に釉葉のかからない箇所がある。

49の返りの付く杯蓋などに若干古い要素が認められるが、全体としては井戸249枠内出土土器群との時期差は小さく、8世紀後葉の一群と捉えられる。

柱穴267(図41、図版12)掘形から出土した須恵器壺Lである。口縁から肩部までほぼ完存する。口頸部は斜上方に立ち上がり、口縁端部は強く外反して上下に拡張する。肩部外面と口縁部内面の一部に暗オリーブ灰色の釉葉がかかる。井戸249枠内出土土器と同じく8世紀後葉から末葉頃の所産と考えられる。

3) 古墳時代(図42、図版12)

古墳時代の土器には、柱穴と土壇から出土した土師器・須恵器がある。55～57は土壇312出土の土師器である。55

表6 井戸249掘形出土土器比率表

器種	器形	破片数	比率(%)	
土師器	杯・碗・皿	39	51.3	14.9
	高杯・盤・鉢	0	0	
	甕・釜・鍋	15	19.7	
	製塩土器	6	7.9	
	その他	0	0	
	不明	16	21.1	
	小計	76	100.0	
須恵器	杯・碗・皿	24	46.1	10.3
	壺・瓶	7	13.5	
	甕・大型壺	14	26.9	
	その他	0	0	
	不明	7	13.5	
	小計	52	100.0	
弥生・古墳時代土器		379	100.0	74.8
総数		507	100.0	100.0

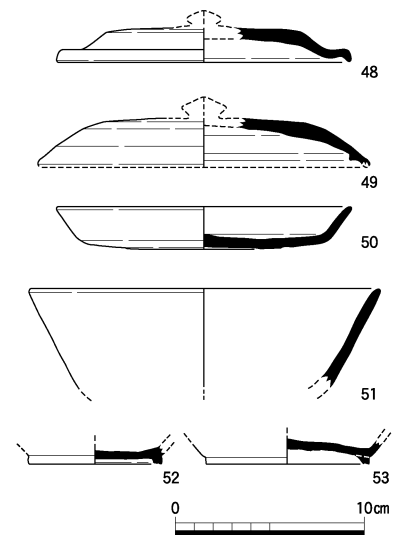


図40 井戸249掘形出土土器実測図(1:4)

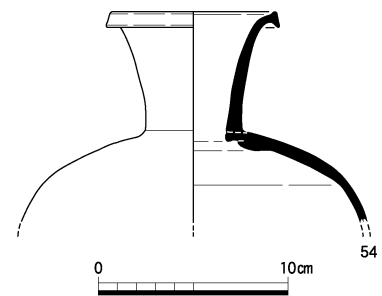


図41 柱穴267出土土器実測図(1:4)

は小型壺で、口縁部は短く、体部の張りは弱い。口縁部と体部外面は横ナデ調整、内面は指ナデ調整である。56は、椀形高杯の杯部である。底部と口縁部の境に段が付く。57は、甕の口縁部で、内湾ぎみに立ち上がり、端部は内側に肥厚させる。土壌312では、他に土師器高杯と椀が一点ずつ出土している。小片のため図化できなかつた。58・59は土壌244出土の土師器である。58は椀形高杯で、底部と口縁部の境に段が付く。口縁部外面は回転ナデ、内面は回転ナデののち横方向のヘラミガキを施す。脚部は明瞭な屈曲点をもたずに大きく開く。59は甕の口縁部で、内湾して立ち上がり、端部は内側に小さく突出し面をもつ。土壌16出土の小型丸底壺60は、体部中位に最大径を持ち、外面は縦ハケ目ののち横方向のヘラミガキ調整を加える。口縁部は直線的に斜上方に延び、端部は丸くおさめる。61は土壌19出土の椀形高杯の杯部である。外面は回転ナデ、内面は指ナデ調整。口縁端部は内湾する。土壌19からは、これ以外に細かいハケ目をもつ甕体部破片が出土している。

62～64は、土壌270出土の須恵器杯身である。62の底部は丸みをおび、受け部はシャープで、口縁の立ち上がりは直線的で長い。端部は丸くおさめる。63は、器高が低く平底。受け部はシャープで、口縁の立ち上がりは外半し、端部は丸くおさめる。64は、口縁の立ち上がりは直線的で、端部が内傾し、沈線がめぐる。以上は、TK 47³⁾～MT 15型式に属する。柱穴415出土の65は、受け部は短く水平にのび、口縁の立ち上がりは直線的で、端部は内傾し浅い沈線がめぐる。TK 47型式に属する。

以上の土器の帰属時期については、土師器は形態的特徴から5世紀中葉～6世紀初頭の古墳時代中後期に属するものと考えられる。須恵器はTK 47～MT 15型式で5世紀末から6世紀初頭の古墳時代後期に位置付けられる。また、後世の遺構に混入してTK 216～TK 208型式の須恵器の破片も少量出土している。

4) 弥生時代

弥生時代の土器は遺物整理箱で53箱出土した。時期は中期中葉から後期半ばまでのものが認め

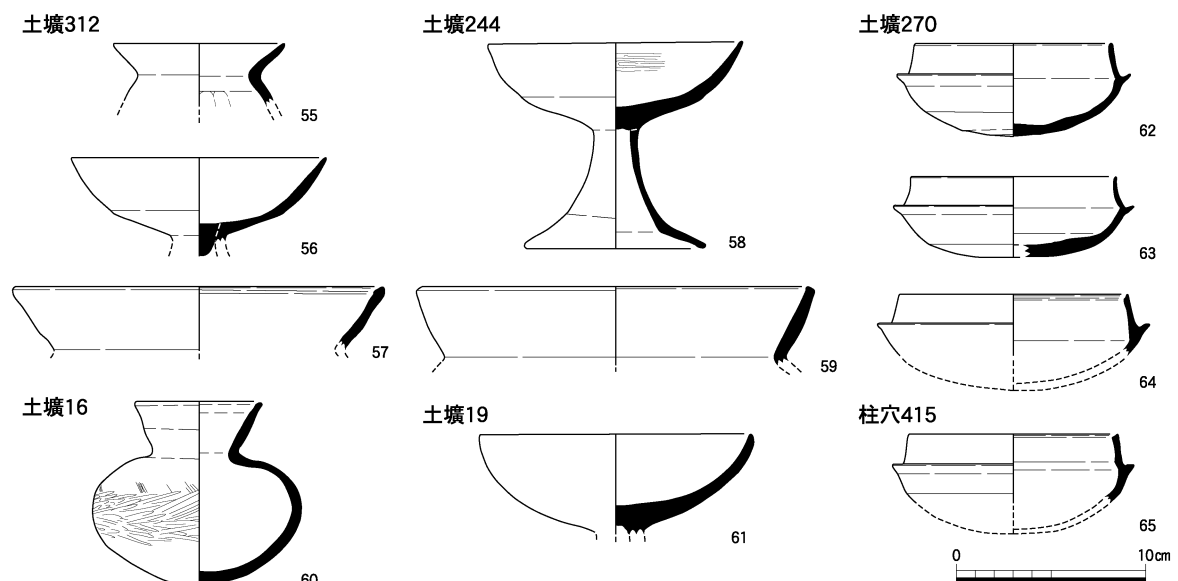


図42 古墳時代土器実測図(1:4)

られ、うち約 1 / 4 が中期に、約 3 / 4 が後期に属する。弥生土器の形式分類は、本報告では以下に拠る。

甕

口縁部の形態により 3 つに分類する。

<甕 A> 強く外反する口縁部から上方に立ち上がり、端部に水平な面をもつもの。近江系。

<甕 B> 外半する口縁部から上方に立ち上がり、端部を丸くおさめるもの。

<甕 C> 口縁が「く」の字状に外反するもの。

壺

口頸部の形態により 5 つに分類する。

<直口壺> 口縁部が直線的に斜上方へ伸びるもの。

<広口壺> 直立する頸部から口縁部が大きく開くもの。

<長頸壺> 頸部が直線的に立ち上がり、頸部の長さが体部の高さの 1 / 2 以上のもの。

<短頸壺> 頸部が直線的に立ち上がり、頸部の長さが体部の高さの 1 / 2 以下のもの。

<無頸壺> ごく短く直立する口縁をもつもの。

高杯

杯部と脚部に分けて分類する。なお今回図化した資料については、杯部と脚部の成形はすべて、円盤充填法による連続成形技法を用いている。

杯部

<皿形高杯 A> 皿形の杯部で、口縁部が外反するもの。

<皿形高杯 B> 皿形の杯部で、口縁部が直立するもの。

<皿形高杯 C> 皿形の杯部で、口縁部が直立し、口径が小さく深いもの。

<椀形高杯> 椀形の杯部をもつ小型のもの。

<有段口縁高杯> 杯部に段をもち、口縁部が大きく開くもの。装飾的。

脚部

<脚部 a> 脚柱から脚裾にかけてゆるやかに短く開くもの。

<脚部 b> 脚柱から脚裾にかけてゆるやかに大きく開くもの。

<脚部 c> 脚裾が明瞭な屈曲点をもって大きく開くもの。

器台

全体の形状から 4 つに分類する。

<器台 A> 脚裾部、口縁部ともにゆるやかに短く開き、直線的で長い筒部に凹線文をめぐらすもの。

<器台 B> ゆるやかに開く脚裾から筒部が直線的に立ち上がり、口縁部がゆるやかに大きく開くもの。

<器台 C> 脚裾部、口縁部ともに明瞭な屈曲点をもって大きく開くもの。口縁端部は装飾的。

<器台 D> 口縁部と裾部が明瞭な屈曲点をもたず対称形をなすもの。

鉢

<受口状口縁鉢> 直線的に斜上方に開く体部から口縁部がゆるく開き、端部が上方に立ち上がるもの。

<ハの字状鉢> 体部から口縁端部まで逆「ハ」の字状に開くもの。

竪穴住居 324 (図 43、図版 13) 66～76 は、住居廃絶後に一括投棄されたと考えられる一群である。66・68 は甕 B で、66 の外面は縦ハケ調整を行う。68 は外面タタキ、内面はナデで、指オサエと粘土紐接合痕が残る。67・69 は甕 A である。67 は口縁端部に列点文を、肩部には櫛描直線文をめぐらす。69 は体部のみ残存する。縦ハケののち肩部から体部最大径部分にかけて櫛描で直線文、列点文、直線文、下向き連弧状文、直線文を施す。70 は、ハの字状鉢で、底部は焼成前に内側から穿孔する。外面ハケののち不定方向のナデ調整、内面は不定方向ナデで仕上げる。

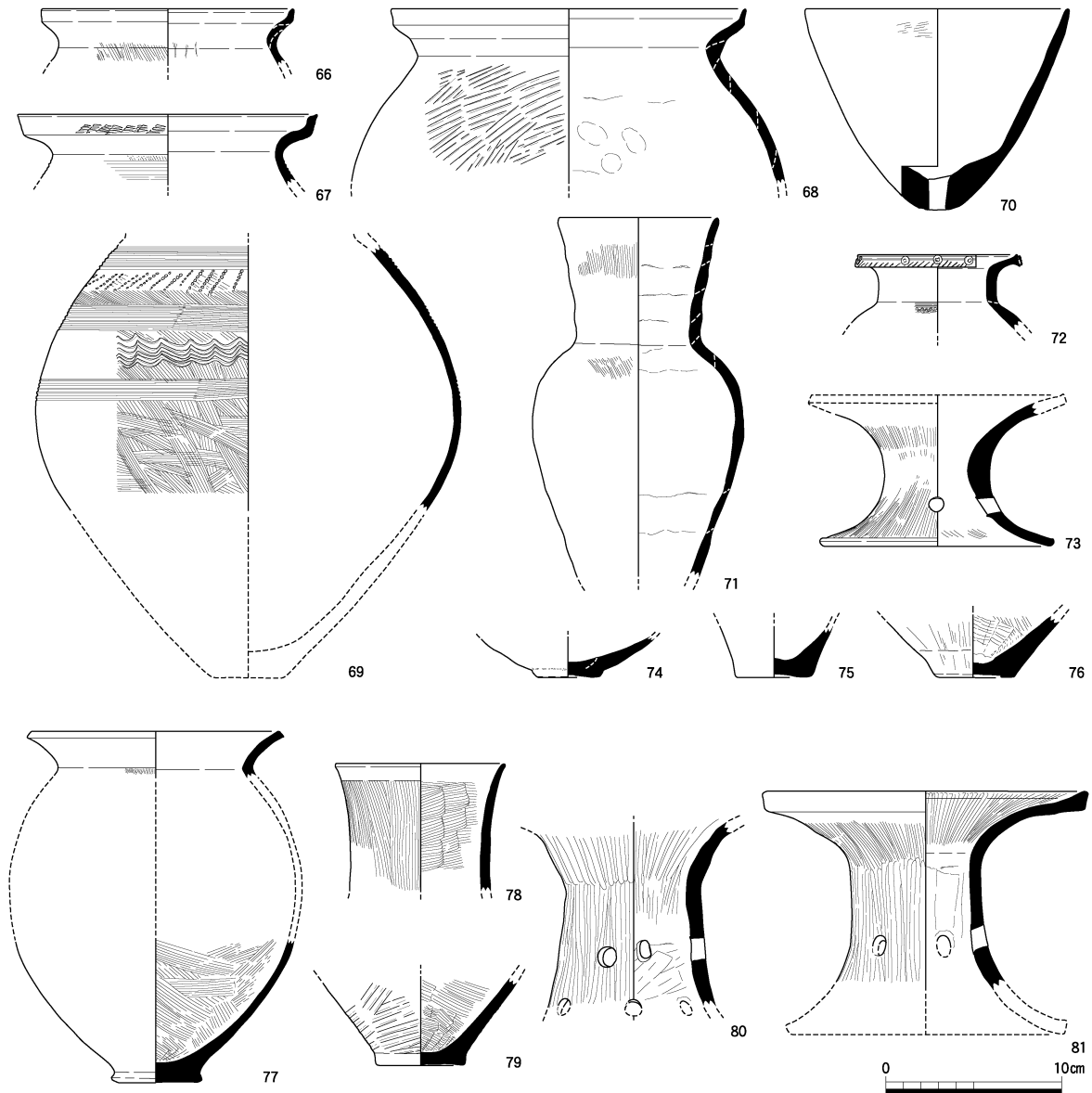


図 43 竪穴住居 324 出土土器実測図 (1 : 4)

色調は灰白色を呈し、器表の約半分に黒班が付く。71は短頸壺で、外面はハケをナデ消す。内面はナデで、粘土紐接合痕が明瞭に残る。外面上半には黒班がつき、焼成・色調・胎土は70の鉢と類似する。72は広口壺。口縁端部を上下に拡張し、上端に1条の擬凹線、下端に刻み目を入れ、3個1単位の円形浮文を4単位貼り付ける。頸部直下にも櫛描直線文と波状文を入れ装飾する。73は器台Dである。裾部外面は縦ハケ、上半は縦ハケのちナデ、内面はナデで仕上げる。裾部に円形透かしを4方に入れる。74は壺の底部。小さく突出する底部から体部が大きく開く。75・76は甕底部で、75は外面ハケ目のちナデ調整、76は外面縦ハケ、内面横ハケ調整である。

77・78・80・81は拡張後の住居床面直上、79は拡張時の貼床から出土した土器である。77は甕Cで、体部外面は縦ハケを丁寧にナデ消すが、頸部直下はハケ調整が明瞭に残り、口縁部は横ナデする。内面はハケ調整。78は長頸壺である。頸部は直立し口縁部は外反する。外面縦ハケ、内面横ハケののち口縁端部を横ナデする。79は甕の底部。外面はタタキ成形、内面横ハケ調整。80・81は器台Bである。80の外面全体と口縁部内面は縦方向のヘラミガキ、筒部内面はヘラケズリを行う。筒部には6方向の円形透かしを2段入れる。81は外面縦ヘラミガキのち口縁部は横ナデし端面を形成する。内面は、口縁部が縦ヘラミガキ、筒部は板ナデ、脚部は横ナデで仕上げる。円形透かしを6方向に入れる。

竪穴住居148(図44、図版13・14) 図44は、竪穴住居148-Dの床面から出土した土器である。82～85は甕C。小型の82は、外面板ナデ状縦ハケ調整、内面上半は横ハケのちナデ、下半は縦ハケのちナデ調整。口縁部は横ナデする。83は、底部は平底、口縁部は外反し、端部に小さい面をもつ。口縁部は横ナデ、体部外面縦ハケ調整、内面は粗い横ハケ調整である。84の体部外面はハケ目を丁寧にナデ消す。内面上半は横ナデで、頸部直下には指頭圧痕と粘土紐接合痕が残る。下半は粗い横ハケ調整を行う。85の口縁は短く外反し、端部は面をもつ。肩部は丸みを帯びる。体部外面はハケ調整、頸部から口縁部は横ナデ、内面頸部直下には指オサエが見られ、体部は板ナデ状のハケ調整を行う。86は甕Cであるが、口縁端部がやや内弯する。受口状を指向したもののか。体部最大径が上位にあり体高が高い。口縁部は横ナデ、体部外面は縦ハケ調整を行う。内面下半はナデ、上半は板ナデする。87は、甕A。口縁は横ナデののち端部下端に刻目を入れる。体部は縦ハケ調整で、肩部のみ横ハケを施す。88は、受口状口縁の広口壺。口縁部の形状は、甕Bと同系統である。体部外面は、縦ハケ調整ののち短い単位の縦ヘラミガキを下半は密に、上半はやや粗く加える。口縁部は横ナデのち縦ヘラミガキを粗く加える。端部は横ナデで、口縁内面は横ナデののち、横方向のヘラミガキを行う。体部内面下半は原体幅の狭いハケ、上半は原体幅の広いハケ調整を行う。体部外面の半分に黒班が付く。89は短頸壺である。口縁は直立し、端部は尖り気味におさめる。体部は不定方向のナデで仕上げ、粘土紐接合痕が残る。90は受口状口縁鉢。底部は平底、体部は大きく開く。口縁部の形状は甕Bと同系統である。外面縦ハケ調整、内面はナデで仕上げる。91は脚部b形態の皿形高杯Aである。口縁は外反して大きく開く。底部は内外面とも縦ヘラミガキ、口縁部は横ヘラミガキを行う。脚部は丁寧な縦ヘラミガキを行い、三方向の円形透かしを2段入れる。内面は絞り目が認められる。92は器台C。外面全体を縦ヘラミ

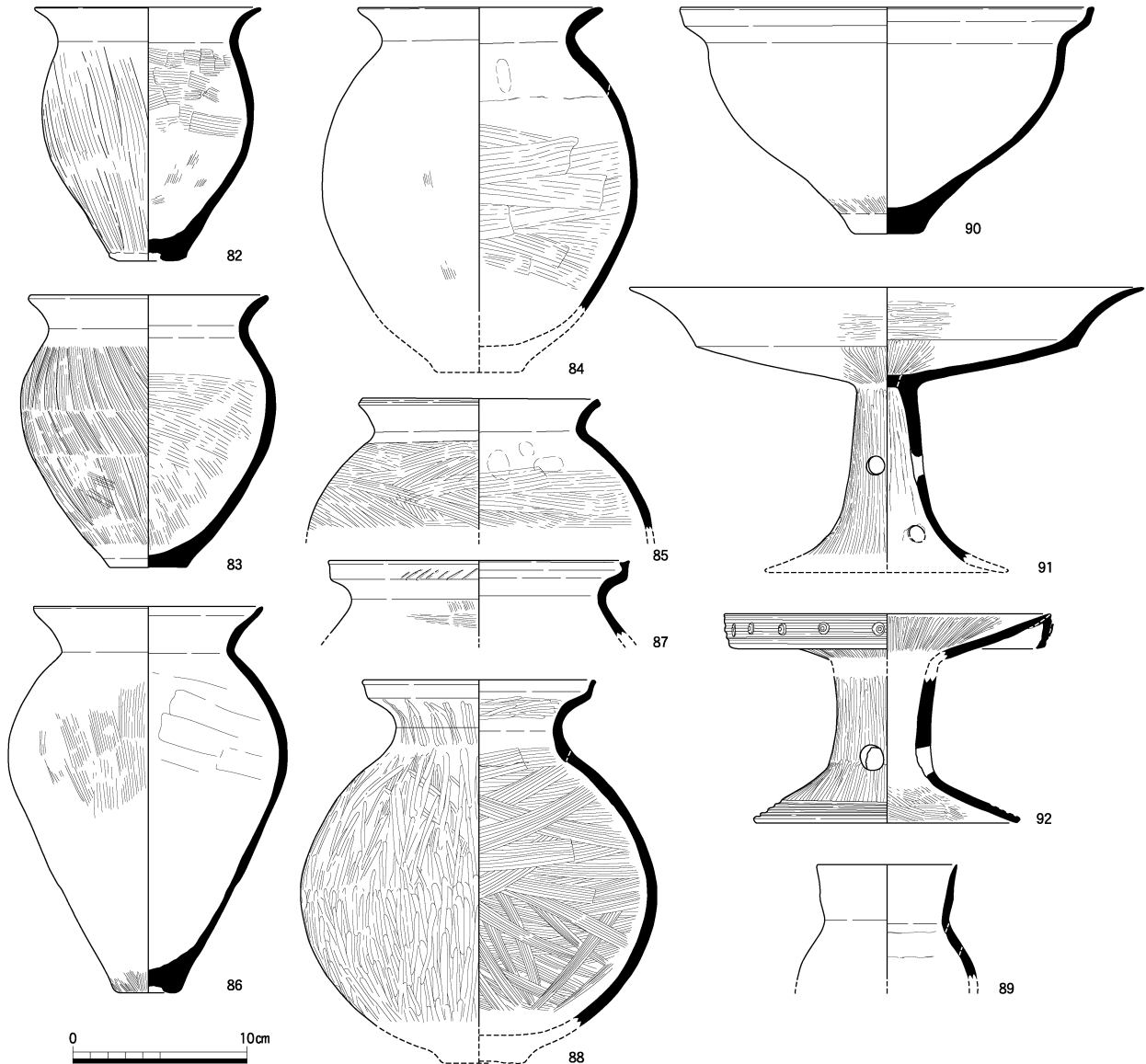


図 44 竪穴住居 148 出土土器実測図（1：4）

ガキし、裾部に4条の凹線文をめぐらす。円形の3方透かしを筒部下位に入れる。垂下する口縁端部には4条の凹線文をめぐらせたのち、円形浮文を貼り付ける。口縁内面は丁寧な縦ヘラミガキ、筒部はナデ、裾部はハケ調整を行う。

竪穴住居 214・土壙 215（図 45、図版 14・15） 93～111 は、竪穴住居 214 の中央土壙 215 から出土した一群である。93・94 は甕 C。93 は、口縁端部に面をもち、体部上位に刺突文をめぐらす。調整は横ナデ。94 は口縁端部が斜下方に突出して面を形成し、端面は強い横ナデにより擬凹線状に凹む。95 は甕 A で、肩部に刻目を入れる。96 は直口壺の口縁である。口縁端部は丸くおさめる。粘土紐接合痕が明瞭に残る。97 は、短頸壺。体部最大径が下位にあって肩部は直線的。口縁は垂直に立ち上がる。外面全体に縦ヘラミガキを施す。内面はナデのみで仕上げ、粘土紐接合痕が残る。98～101 は広口壺である。98 の口縁部は外反する。端部は下方に肥厚して面をもち、指頭圧痕状文様で飾る。99 は口縁端部を下方に拡張し、面を形成する。調整は横ナデ。100 は、

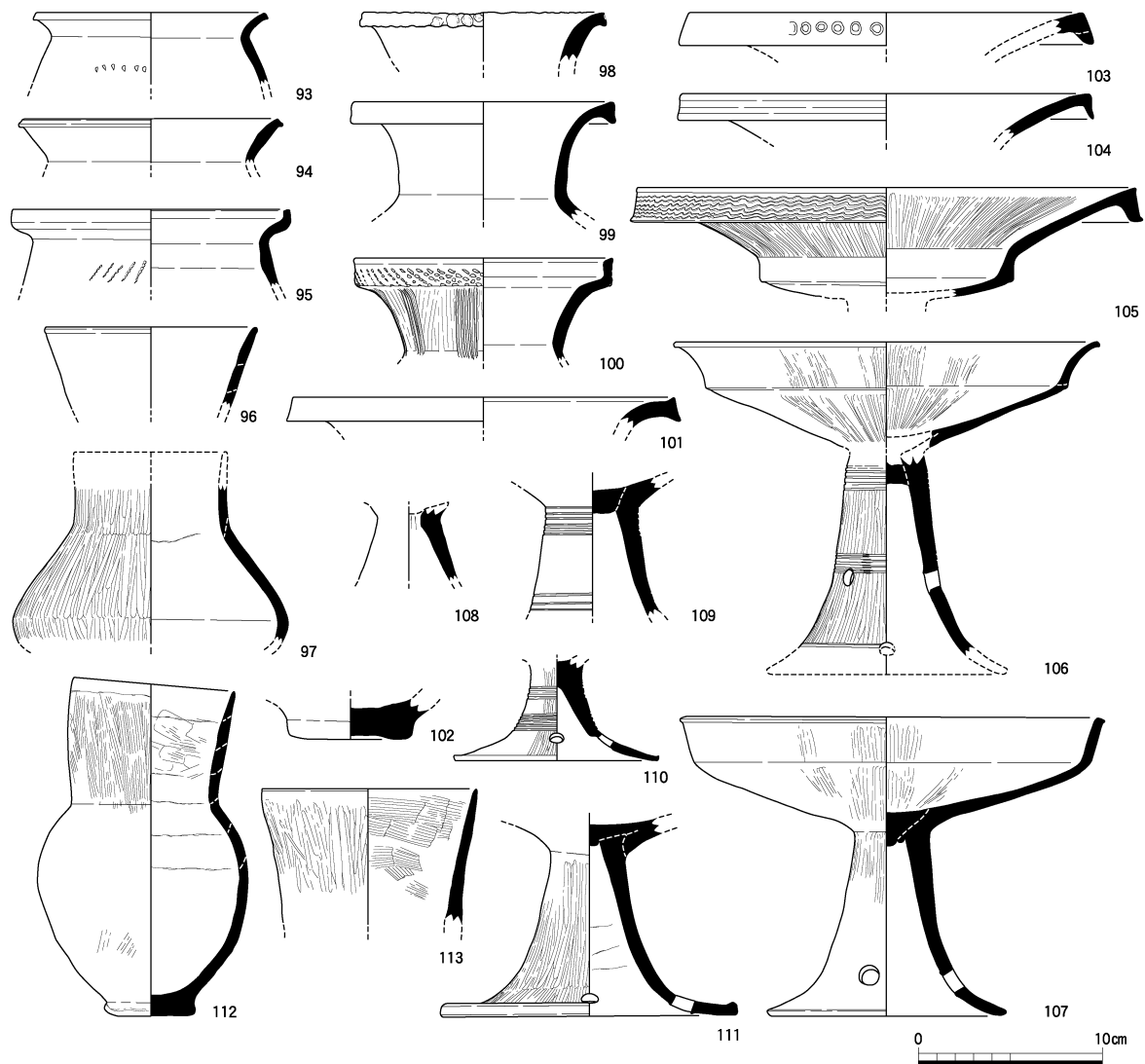


図 45 竪穴住居 214・土壌 215 出土土器実測図（1：4）

受口状口縁の広口壺である。口縁部の形状は甕 A と同系統で、頸部が外反し、口縁部は上方に立ち上がる。端部は内傾する面をもつ。口縁下半には列点文をめぐらす。頸部は縦ハケ調整ののち、ハケ状工具で縦方向の直線文様を 2.5 ～ 3 cm 間隔で入れる。101 は、口縁部が強く外反し、端部を上下に拡張する。調整は横ナデによる。102 は壺の底部。底部は未調整、外面はナデ調整を行う。103 は器台 C。垂下する口縁端部を竹管文で飾る。104 も垂下口縁をもつ器台 C である。端部は強く横ナデする。105 は搬入品の有段口縁高杯。杯部に段をもち、口縁部は斜上方に直線的に長く伸びる。端部は垂下させ、6 条 1 単位の波状文で飾る。杯部は横ナデ、口縁部は内外面ともに丁寧な縦ヘラミガキを施す。106 は、脚部 a 形態の皿形高杯 A である。脚部は密な縦ヘラミガキを加え、5 条 1 単位の櫛描直線文を 3 段入れる。さらに円形の 3 方透かしを約 60 度ずらして 2 段入れる。杯部は全面に縦方向のヘラミガキを施す。105 の有段口縁高杯と胎土が類似し、搬入品の可能性がある。107 は皿形高杯 B。脚部は b 形態である。脚端部は丸くおさめる。脚部外面全体を縦ヘラミガキし、円形透かしを 3 方に開ける。杯部は板ナデののち縦方向ヘラミガキを施し、端部は外傾する面をもつ。108 は高杯の脚部。脚部 b 形態の皿形高杯か。109 は、皿形高

杯の脚部で、脚部 a 形態と考えられる。脚柱部の直径は大きく、内外面とも丁寧なナデで仕上げ、6条1単位の櫛描直線文を2段入れる。110は椀形高杯で、脚部はc形態。脚部と裾部の変換点に円形透かしを4方向に入れる。縦ヘラミガキののち、3条1単位の櫛描直線文と5条1単位の櫛描直線文をめぐらす。111は皿形高杯の脚部である。脚部はb形態で、脚裾に4方向の円形透かしを入れる。脚部から裾部外面は縦ハケ調整で、脚部は縦ヘラミガキを加える。脚端部は横ナデ、杯部外面下半は板ナデする。

112・113は、住居214の床面直上で出土した。112は短頸壺でほぼ完形。頸部は直立し、体部の張りは弱い。体部外面はハケ目をナデ消す。頸部外面は縦ハケをナデ消すがナデがあまくハケ目が残る。内面は体部がナデ、頸部は板ナデで粘土紐接合痕が明瞭に残る。113は長頸壺。頸部外面に縦方向の粗いヘラミガキを施す。内面は横ハケ調整。

竪穴住居474・土壙479(図46、図版15・16) 114～118は、住居474の床面直上で出土した土器である。114は甕Cで、口縁部は短く外反し端部に面をもつ。前様式の特徴を残す。体部外面下半はハケ調整、上半はハケ調整をナデ消す。内面は強い板ナデを行う。広口壺115の口縁端部は下方に小さく拡張する。116は、長頸壺である。底部は平底で、体部は球形。頸部は垂直に立ち上がり、口縁部は外反する。端部は尖り気味におさめる。体部外面は縦ハケ目をナデ消し、一部に短いヘラミガキ状の痕跡が認められる。内面上半は指オサエナデ、下半はハケ調整を行う。頸部から口縁部の外面は縦ハケ目をナデ消し、内面はナデで、粘土紐接合痕が明瞭に残る。117は皿形高杯Bである。底部外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキを施す。口縁

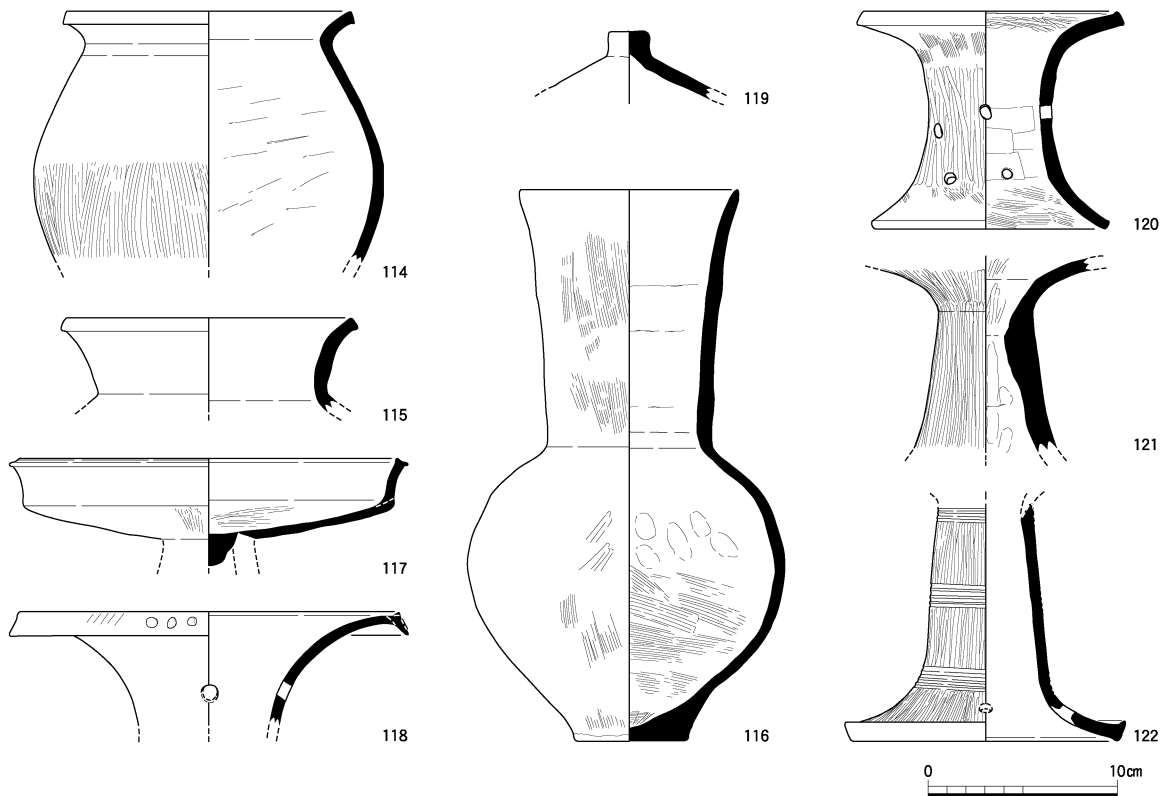


図46 竪穴住居474・土壙479出土土器実測図(1:4)

部は短く外反する。端部は外傾し、強い横ナデにより拡張する。118は器台Bである。口縁部は大きく開き、垂下する端部には一部ハケ目状の痕跡が残る。3個1単位の円形浮文を貼り付ける。残存するのは3単位で、5～6単位あったものと推定される。筒部上半に4方向の円形透かしを入れる。

119～122は、住居474の中央土壙479から出土した土器である。119は蓋。中実のツマミがつく。全体をナデで仕上げる。120は器台Bで、裾端部は面をもち、口縁端部は上方につまみあげる。縦ハケ調整ののち筒部外面は縦ヘラミガキ、口縁内面は横ヘラミガキを加える。筒部には円形の透かしを無作為に入れる。裾部と口縁外面は縦ハケ調整で、筒部は横方向のヘラケズリを行う。121は器台Cである。筒部は内傾して立ち上がる。外面は丁寧な縦ヘラミガキ、口縁内面にも縦ヘラミガキを行う。筒部内面はナデで、粘土紐接合痕が残る。122は高坏脚部である。脚部はc形態。脚柱部は縦ヘラミガキののち4条1単位の櫛描直線文を3段めぐらす。裾部には4方向の円形透かしを入れる。端部は上方に拡張する。内面は横ナデで仕上げる。

土器埋納柱穴、土壙309・321、ピット3（図47、図版16・17）図47は、土器埋納柱穴と土壙309・321、ピット3から出土した後期に属すると考えられる土器である。ただし、土壙309出土の甕130については中期末に遡る可能性が高い。123は、竪穴住居428の主柱穴537出土の甕Aである。体部最大径は中位にあって丸みをもち、受口状の口縁部は内傾する。口縁部は横

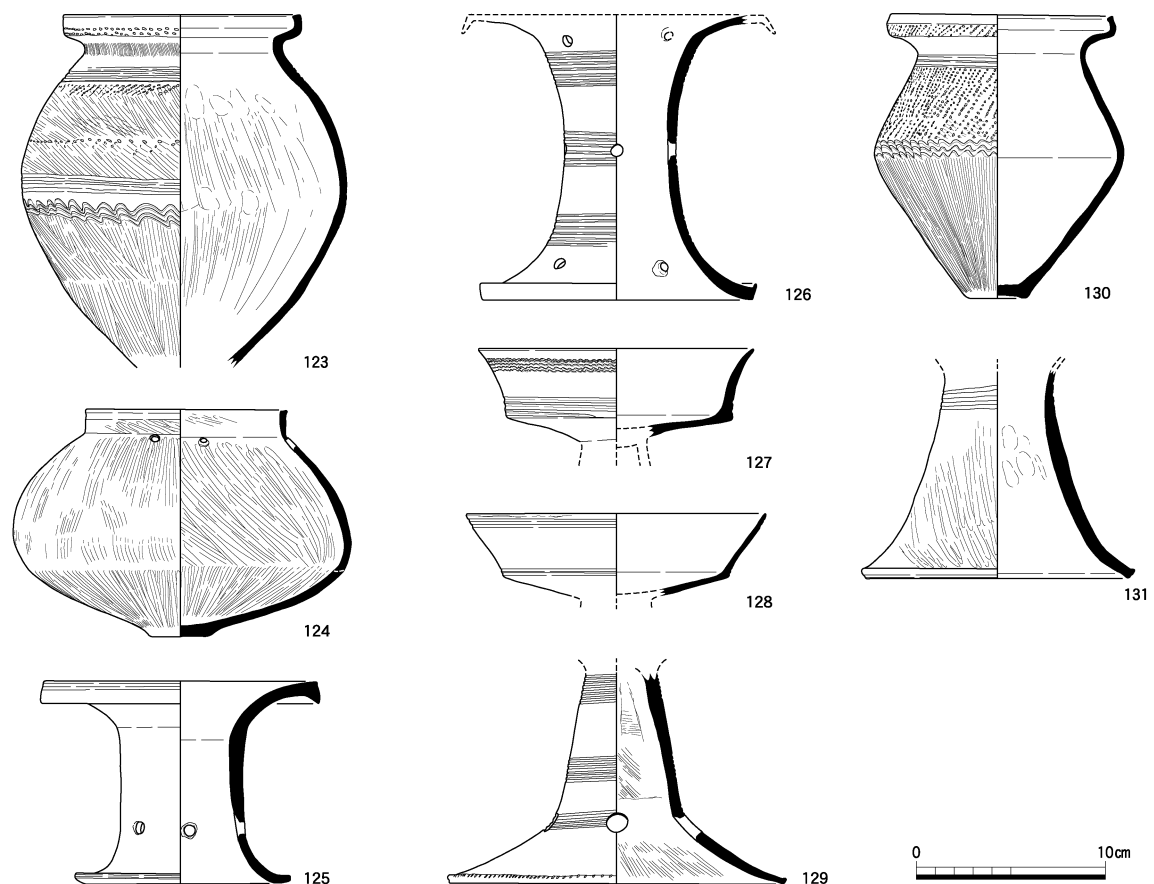


図47 土器埋納柱穴、土壙309・321出土土器実測図（1：4）

ナデののち端部下端に列点文を入れる。頸部は縦ハケ調整を行い、体部外面はハケ調整ののち頸部直下に4条1単位の櫛描直線文、その下に列点文2段、最大径付近に3条1単位の櫛描直線文、その下に4条1単位の上向き連弧状文をめぐらす。下半は縦ハケ調整を行う。内面は縦ハケ調整で、最大径付近と頸部下に指オサエ痕が残る。外面は著しく二次焼成を受け、煤が付着する。割れ口の観察から底部は意図的に打ち欠かれたものと考えられる。124は竪穴住居148の支柱穴369出土の無頸壺である。体部最大径が中位よりやや下にあって、扁球形を呈する。底部は平底で、底から約1/4の箇所分割成形の痕跡の段が認められる。口縁直下に2個1組の孔を対に開ける。口縁端部は水平な面をもつ。体部外面下半は丁寧な縦ヘラミガキを行うが、上半はやや粗い縦ヘラミガキで、ハケ調整が残る。口縁部には斜方向のヘラミガキを施す。内面下半は丁寧な縦ヘラミガキ、上半は粗い斜方向のヘラミガキを行う。125は、竪穴住居214の支柱穴538から出土した器台Bである。裾端部が上方に反り、筒部下半には5方向の円形透かしを入れる。口縁端部は垂下して強い横ナデにより擬凹線上に凹む。外面は横ナデ、内面は不定方向のナデで仕上げる。126・127は、竪穴住居474の支柱穴503から出土した。126は器台Aである。胎土が2.5YR7/6橙色よりさらにピンク系の強い他の土器には見られない色調を呈する。筒部には、ナデののち上から7条、6条、6条の凹線文をめぐらす。さらに、円形の4方向透かしを3段入れる。内面はナデ、裾部は横ナデし端部を上方に拡張させる。127は皿形高杯Cである。器壁が薄く精緻なつくりで、杯部は深く、口縁部は外反して上方に長く伸びる。口縁外面は横ナデののち、上端に5条1単位の櫛描波状文、下端に3条の凹線文をめぐらす。底部は内外面ともナデで仕上げる。128は、竪穴住居148の壁際土壌321から出土した皿形高杯Cである。口縁端部直下と口縁最下部にそれぞれ退化した凹線を3条と2条めぐらす。129は、竪穴住居428の支柱穴466から出土した高杯脚部である。杯部は打ち欠かれるが、皿形の杯部をもつと考えられる。脚部はc

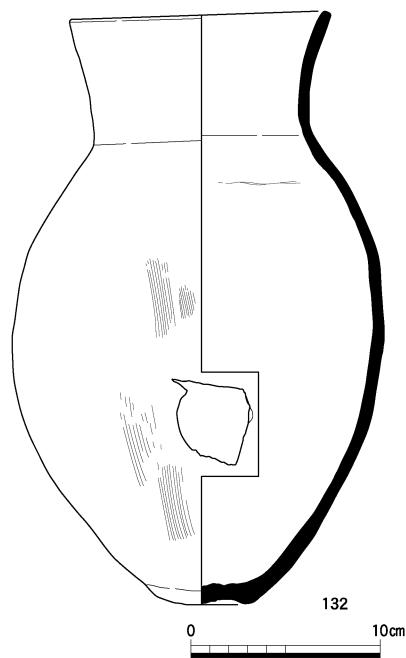


図48 土壌13出土土器実測図(1:4)

形態。裾端部は上方に拡張し、上端に刻目を入れる。脚柱部はナデ調整で、上から7条、6条、5条1単位の櫛描直線文を3段めぐらす。屈曲部には円形透かしを4方向に入れる。内面はハケ調整のちナデで、脚柱部には粘土絞り目と粘土紐接合痕が残る。130は土壌309出土の甕Aである。口縁端部は内傾する。体部最大径は中位よりやや上にあり、強く張る。口縁端部は横ナデし、下端には列点文をめぐらす。体部下半は丁寧な縦ハケ調整、上半は頸部に3条1単位の櫛描直線文、その下に列点文4段、体部最大径付近に3条1単位の櫛描波状文を入れる。131はピット3出土の器台Aである。筒部と裾部の変換点は明瞭でない。外面は斜方向のヘラミガキ、内面はナデで、指オサエ痕が残る。裾端部は小さく上方に拡張し面を形成する。筒部には蛇行する3条の凹線をめぐらす。

土壙 13 (図 48、図版 17) 132 は土壙 13 から出土した短頸壺である。中期後葉に属すると考えられる。底部は小さく突出し、体部最大径は中位にあって長胴形を呈する。体部から口縁部への屈曲は明瞭でなく、口縁はやや外反する。端部は外傾する面をもつ。二次焼成を受け、体部の下から 2/3 には煤が付着する。底部はナデ、体部外面は縦ハケをナデ消し、口縁から体部内面はナデで仕上げる。体部下半に焼成後穿孔が認められる。外側から穿孔し、孔の直径は約 4 cm。

土壙 143 (図 49) 土壙一括資料であるが、中期中葉～後葉の中でやや幅をもつ一群である。133～137 は、甕 C。すべて口縁端部に刻目を入れる。133 は口縁部のハケ調整、深い刻目などが他より古い特徴を示す。135 の体部外面は縦ハケ、136 の口縁内面には粗い横ハケを行う。138 は大型の甕で、口縁部は弱く外反する。端部の上端に一条の凹線をめぐらす。体部外面は縦ハケ調整で、二次焼成を受ける。139・140 は壺底部。139 の調整は内外面ともにナデ。140 の外面は縦ヘラミガキ、底部にも粗いヘラミガキを行う。内面はナデ。141 は高杯脚部で、外面は丁寧な縦ヘラミガキを行う。内面にはシボリメが認められる。

土壙 199 (図 50、図版 17) 土壙 199 から一括出土した中期中葉、畿内第Ⅲ様式の前段階に属する土器群である。142 は、直線的な肩部から口縁部が強く屈曲して外反する壺である。口縁端部は丸くおさめ、外面は列点文、内面は 6 条と 8 条 1 単位の波状文で飾る。肩部には、7 条 1 単位の櫛描直線文が 2 段分残存する。内面調整は、ハケ目をナデ消す。143 は大型の広口壺である。直立する頸部から口縁部が短く外反し、端部は上方につまみ上げる。肩部は丸みをおび、体部最大径が下位にあって下膨れの形状を呈する。底部は欠損する。調整は、頸部外面縦ハケ、口縁外面横ハケ、端部は横ナデで、口縁と頸部内面にはヘラミガキを加える。体部は、外面がハケ調整のちヘラミガキを施すが下部ではヘラミガキがやや粗く、一部下のハケ目が残る。内面は、最大径付近までハケ調整でそれより下はハケ目をナデ消す。文様は、口縁端面に列点文、口縁部から頸部にかけて列点文、7 条 1 単位の下向き櫛描扇形文、8 条 1 単位の櫛描直線文 3 段をめぐらす。肩部には上から、列点文をハの字に配置した羽状文、8 条 1 単位の櫛描直線文、横向きの羽状文

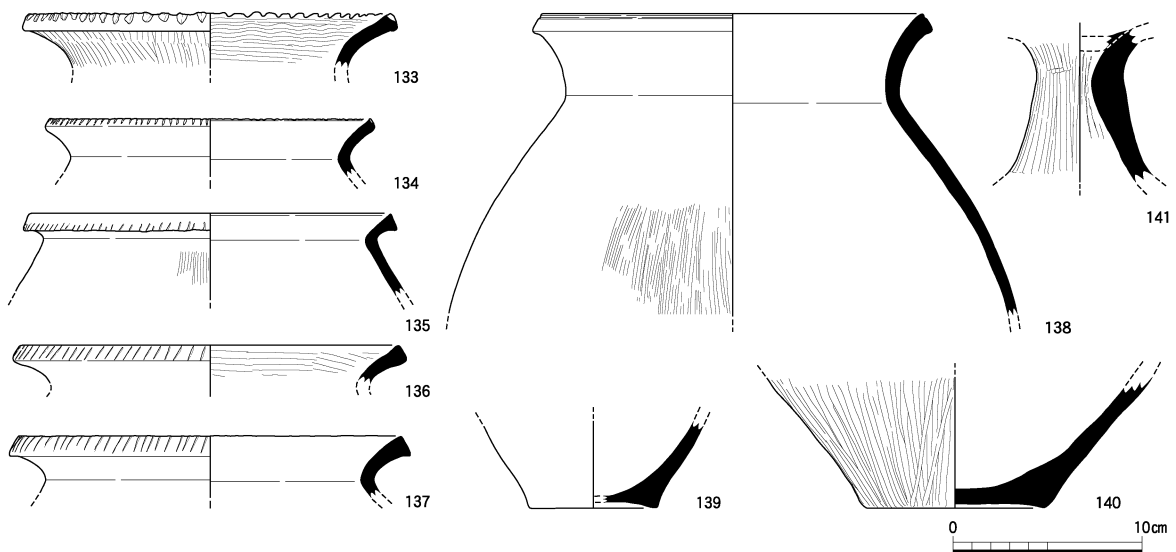


図 49 土壙 143 出土土器実測図 (1 : 4)

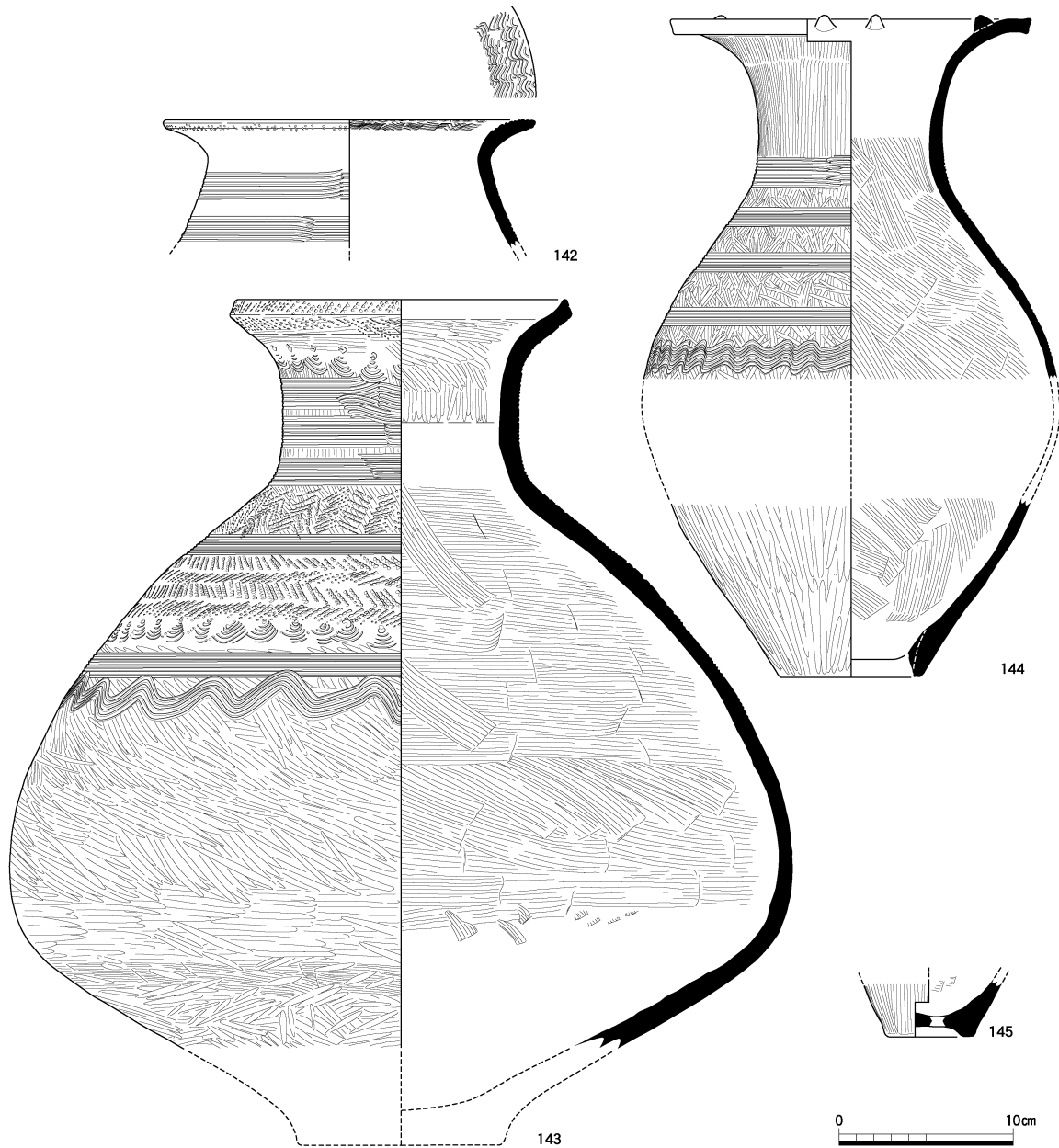


図 50 土壌 199 出土土器実測図（1：4）

2段、7条1単位の下向き櫛描扇形文、8条1単位の櫛描直線文、6条1単位の櫛描波状文をめぐらす。144は、広口壺。頸部は外傾して長く立ち上がり、口縁部は大きく開く。端部は面を持ち、内面には2個1組の瘤状突起を4組配置する。体部最大径は中位にある。底部は焼成後に穿孔する。頸部から口縁部外面は縦ハケ調整、内面はナデで仕上げる。体部下半は縦方向のヘラミガキを行い、上半は一本の単位が短く細いヘラミガキを密に加える。頸部から体部最大径付近にかけて、9条1単位の櫛描直線文を4段と8条の櫛描波状文1段をめぐらす。上から2～3段目の直線文は、原体の端が器壁に当たらず、7条ないし6条になる。体部内面はハケ調整する。145は2次焼成を受けており甕の底部と考えられる。内外面ともハケ調整で、底部には焼成前穿孔を行っている。図化したもの以外に、体部に4段以上の櫛描波状文を密にめぐらす壺の体部破片が出土している。

5) 土錘（図 51、図版 17）

表7 土器一覧表

No.	器種	器形	出土遺構	口径	器高	底径	色調	備考
1	灰釉陶器	椀A	土壙301	11.2	3.7	5.0	5Y8/1灰白色	ほぼ完存
2	土師器	椀A	土壙301	13.8	3.2		7.5YR8/5浅黄橙色	全体の3/4残存
3	土師器	皿A	土壙301	14.4	2.4		7.5YR7/6橙色	全体の2/3残存 胎土に1mm以下の石粒少量含
4	土師器	杯A	土壙301	16.2	3.2		10YR8/3浅黄橙色	ほぼ完存 磨滅著しい
5	土師器	杯C	井戸249	(13.8)	2.5		5YR6/6橙色	1/3残存。
6	土師器	杯A	井戸249	(14.6)	2.9		5YR6/4にぶい橙色	1/6残存。
7	土師器	杯A	井戸249	(15.2)	3.4		5YR6/6橙色	1/3残存。
8	土師器	杯A	井戸249	(17.2)			10YR6/3にぶい黄橙色	1/5残存。
9	土師器	椀A	井戸249	(13.0)	3.7		5YR5/4にぶい赤褐色	2/5残存。
10	土師器	皿C	井戸249	(10.0)	1.6		7.5YR7/3にぶい橙色	1/3残存。口縁端部に煤付着。灯明皿か。
11	土師器	皿A	井戸249	15.6	1.6		7.5YR6/4にぶい橙色	3/5残存。
12	土師器	皿A	井戸249	18.8	2.5		7.5YR6/4にぶい橙色	1/2残存。焼成非常に堅緻。底部に「南」の墨書あり。
13	土師器	甕	井戸249	(17.6)			7.5YR6/4にぶい橙色	1/5残存。胎土精良。外内面ともに煤付着。
14	土師器	甕	井戸249	(21.2)			7.5YR8/3浅黄橙色	口縁1/8残存。胎土精良。外面煤付着。
15	土師器	甕	井戸249	(24.0)			10YR4/1褐灰色	口縁部1/5残存。胎土1mm程度の石粒、雲母少量含。
16	土師器	高杯A	井戸249				7.5YR7/4にぶい橙色	脚端部以外の脚部ほぼ完存。胎土緻密。面取り8面。内面粘土紐痕残る。
17	土師器	高杯A	井戸249				7.5YR6/4にぶい橙色	脚部4/5残存。胎土緻密。面取り11面。内面粘土収縮痕残る。杯部内面ナデのち暗文状ミガキ。
18	土師器	高杯A	井戸249			14.3	5YR6/6橙色	脚部ほぼ完存。胎土緻密。面取り11面。内面粘土紐痕残る。
19	土師器	高杯A	井戸249				7.5YR5/3にぶい褐色	脚端部以外の脚部ほぼ完存。胎土緻密。面取り9面。内面粘土紐痕残る。
20	土師器	高杯A	井戸249			14.0	7.5YR7/4にぶい橙色	脚部4/5残存。胎土マンガン多量含み、マーブル状になる。面取り9面。内面粘土紐痕明瞭に残る。
21	土師器	高杯A	井戸249				7.5YR7/6橙色	脚部ほぼ完存。胎土緻密。面取り12面。脚裾部に煤付着。内面粘土収縮痕残る。杯部内外面とも暗文状ミガキ。
22	土製品	土馬	井戸249				7.5YR8/4浅黄橙色	3/4残存。残存長9.9cm、幅4.3cm、残存高6.3cm。胎土精良。1mm以下の砂粒少量含。
23	須恵器	杯蓋	井戸249	(12.8)			5P6/1紫灰色	1/3残存。胎土緻密。内外面に青色鈹碎付着。
24	須恵器	杯蓋	井戸249	(14.2)			N5/0灰色	1/4残存。胎土緻密。
25	須恵器	杯蓋	井戸249	(15.6)			2.5Y6/1黄灰色	1/4残存。胎土緻密。白色石粒少量含。
26	須恵器	杯蓋	井戸249	(15.2)			5Y6/1灰色	1/4残存。胎土緻密。
27	須恵器	杯蓋	井戸249	(16.2)			N7/P灰紫白色	1/4残存。胎土緻密。
28	須恵器	杯蓋	井戸249	(19.2)			10YR5/1褐灰色	1/5残存。胎土緻密。白色石粒少量含。内外面に黒色物質付着。
29	須恵器	皿蓋	井戸249	(26.0)			10YR6/1褐灰色	1/5残存。胎土緻密。
30	須恵器	杯A	井戸249	(12.6)	3.8		5Y6/1灰色	1/4残存。胎土緻密。

※ 単位はcm。()は復元数値。

No	器種	器形	出土遺構	口径	器高	底径	色 調	備 考
31	須恵器	杯A	井戸249	13.0	3.6		5Y6/1灰色	1/2残存。胎土緻密。
32	須恵器	杯A	井戸249	(13.6)	3.7		5Y7/1灰白色	2/5残存。胎土緻密。
33	須恵器	杯A	井戸249	(14.8)	3.2		N6/0灰色	1/5残存。胎土緻密。
34	須恵器	杯B	井戸249			(9.0)	10YR5/1褐灰色	1/5残存。胎土緻密。外面自然釉かかる。
35	須恵器	杯B	井戸249			(9.6)	5Y7/1灰白色	1/3残存。胎土緻密。
36	須恵器	杯B	井戸249			(10.0)	5P7/1明紫灰色	底部1/5残存。胎土緻密。底部と割れ口に青色鈹碎付着。
37	須恵器	杯B	井戸249			(10.6)	5Y7/1灰白色	底部1/3残存。胎土緻密。
38	須恵器	杯B	井戸249	(14.0)	3.8	10.6	N6/0灰色	1/5残存。色調やや紫がかかる。胎土緻密。
39	須恵器	杯B	井戸249			(10.8)	N6/0灰色	1/4残存。胎土緻密。
40	須恵器	杯B	井戸249			(13.8)	N6/0灰色	底部1/3残存。胎土緻密。高台部分意図的に打ち欠きか。底部に爪跡あり。
41	須恵器	皿C	井戸249	(19.0)	2.1		2.5Y6/1黄灰色	1/5残存。胎土緻密。
42	須恵器	皿B	井戸249			16.5	10YR7/1灰白色	底部3/4残存。焼成やや不良。作り粗雑。底部外面指オサエ痕多数、底部内面不定方向のナデ。
43	須恵器	壺N	井戸249	7.6			2.5GY4/1暗オリーブ灰色	底部以外ほぼ完存。胎土緻密。肩部に耳状把手が付く。外面自然釉かかる箇所あり。
44	須恵器	壺A	井戸249	(13.0)			10YR7/1灰白色	口縁1/8残存。胎土緻密。
45	須恵器	甕A	井戸249	(26.0)			2.5Y7/1灰白色	口縁1/3残存。胎土緻密。黒色砂粒少量含。内外面ともに灰釉かかる。
46	須恵器	壺K	井戸249				2.5GY3/1暗オリーブ灰色	頸部2/3残存。内外面ともに灰釉かかる。
47	須恵器	円面硯	井戸249				N6/P灰紫色	上部破片。大型品。方形透かしのある透脚円面硯か。胎土緻密。
48	須恵器	杯蓋	井戸249掘形	(15.4)			N7/B灰青色	1/5残存。胎土に1mm程度の砂粒含。
49	須恵器	杯蓋	井戸249掘形	(17.4)			N6/P灰紫色	1/5残存。形骸化した返りが付く。胎土に1～2mmの砂粒含。
50	須恵器	皿A	井戸249掘形	(15.4)	2.3		5Y7/1灰白色	1/2残存。胎土緻密。
51	須恵器	杯B	井戸249掘形	(18.4)			2.5Y6/1黄灰色	口縁1/3残存。焼成やや軟。胎土緻密。
52	須恵器	杯B	井戸249掘形			(7.0)	N6/0灰色	底部2/5残存。胎土緻密。
53	須恵器	杯B	井戸249掘形			(8.6)	N6/P灰紫色	底部2/5残存。胎土緻密。外面一部自然釉かかる。
54	須恵器	壺L	柱穴267	8.6			10YR7/1灰白色	口縁から肩部までほぼ完存。口縁部内・外面の一部と肩部外面にオリーブ灰色の釉かかる。
55	古式土師器	小型壺	土壙312	(9.0)			10YR4/3にぶい黄褐色	1/10残存。胎土精良。0.5mm以下の石英・長石・チャート微量含。
56	古式土師器	椀形高杯	土壙312	(13.4)			7.5YR7/4にぶい橙色	1/3残存。杯部3/4残存。胎土精良。0.5～1mmの石英・長石・チャート少量含。クサリ礫含。
57	古式土師器	甕	土壙312	(19.4)			5YR7/6橙色	口縁1/10残存。布留式甕。胎土やや粗。0.5～2mmの石英・長石・チャート含。
58	古式土師器	椀形高杯	土壙244	13.3	10.9	9.3	5YR6/6橙色	杯部完存。全体の1/2残存。胎土精良。1mm以下の石英・長石・チャート含。
59	古式土師器	甕	土壙244	(20.0)			7.5YR8/3浅黄橙色	口縁1/8残存。胎土精良。1.5mm以下の石英・長石・チャート少量含。

No	器種	器形	出土遺構	口径	器高	底径	色 調	備 考
60	古式土師器	小型丸底壺	土壇16	6.6	9.6		7.5YR7/6橙色～7.5YR5/1褐灰色	完存。1～3mmの石粒多量含。石英・長石、チャート。
61	古式土師器	椀形高杯	土壇19	14.2			5YR5/6明赤褐色	杯部完存。胎土やや粗。0.5～3mmの石英・長石・チャート多量含。
62	須恵器	杯H	土壇270	10.2	4.9		N5/B灰青色	約2/3残存。ろくろ右回転。口縁立ち上がり1.6cm。胎土緻密。
63	須恵器	杯H	土壇270	(10.6)	4.2		N4/1灰色	1/3残存。底部自然釉かかる部分あり。胎土に1mm程度の石粒多量含。
64	須恵器	杯H	土壇270	(12.0)			5P7/1明紫灰色	口縁部の1/5残存。胎土に2mm以下の石粒多量含。
65	須恵器	杯H	柱穴415	(11.0)			N5/B灰青色	口縁部1/4残存。胎土緻密。2mm以下の石粒少量混。
66	弥生土器	甕B	竪穴住居324 投棄	(14.2)			2.5Y8/3淡黄色	口縁1/5残存。胎土精良。1～2mmの石粒多量含、石英・長石・チャート。全体磨滅著しい。
67	弥生土器	甕A	竪穴住居324 投棄	(17.0)			7.5YR7/4にぶい橙色	口縁1/8残存。胎土やや粗。1～2mmの石英・長石・チャート含。雲母含。
68	弥生土器	甕B	竪穴住居324 投棄	(20.0)			10YR6/3にぶい黄橙色	口縁から体部中位まで1/3残存。胎土やや粗。0.5～3mmの石英・長石・チャート少量含。雲母やや多量含。二次焼成受ける。
69	弥生土器	甕A	竪穴住居324 投棄				7.5YR8/4浅黄橙色	体部1/8残存。胎土やや粗。1～2mmの石英・長石多量、チャート少量含。金雲母少量含。外面煤附着。
70	弥生土器	ハの字状鉢	竪穴住居324 投棄	(15.0)	11.4		10YR8/1灰白～10YR5/1褐灰色	1/2残存。底部内側から焼成前穿孔。胎土やや粗。0.5～4mmの石英・長石・チャート多量含。器表の約半分に黒斑あり。
71	弥生土器	短頸壺	竪穴住居324 投棄	(8.9)			10YR8/2灰白色	1/3残存。胎土やや粗。0.5～4mmの石英・長石・チャート多量含。外面上半に黒斑あり。(70)の鉢と胎土、黒斑のつき方類似。
72	弥生土器	広口壺	竪穴住居324 投棄	9.0			10YR8/4浅黄橙色	口縁完存。全体の1/5残存。胎土粗。0.5～6mmの石英・長石・チャート含。クサリ礫含。
73	弥生土器	器台D	竪穴住居324 投棄			(12.8)	10YR7/2にぶい黄橙色	1/2残存。胎土精良。0.5～1mmの石英・長石・チャート少量含。
74	弥生土器	壺底部	竪穴住居324 投棄			3.5	10YR8/3浅黄橙色	底部3/4残存。胎土精良。1～2mmの石英・長石多量、クサリ礫少量含。磨滅著しい。
75	弥生土器	甕底部	竪穴住居324 投棄			4.0	10YR7/1灰白～7/2にぶい黄橙色	底部3/4残存。胎土精良。1～5mmの石英・長石少量、クサリ礫少量含。
76	弥生土器	甕底部	竪穴住居324 投棄			4.4	10YR6/2灰黄褐色	底部ほぼ完存。胎土精良。1～2mmの石英・長石少量、雲母少量含。
77	弥生土器	甕C	竪穴住居324 床直上 (c)	(14.0)		4.5	10YR7/3にぶい黄橙色	1/3残存。胎土やや粗。0.5～2mmの石英・長石・チャート含。クサリ礫含。二次焼成受ける。下半煤附着。
78	弥生土器	長頸壺	竪穴住居324 床直上 (c)	(9.6)			10YR7/4にぶい黄橙色	口縁1/4残存。胎土精良。0.5～1mmの石英・長石・チャート少量含。
79	弥生土器	甕底部	竪穴住居324 貼床中			4.8	7.5YR7/4にぶい橙色	底部1/2残存。胎土やや粗。0.5～5mmの石英・長石・チャート含。
80	弥生土器	器台B	竪穴住居324 床直上 (b)				7.5YR6/6橙～7.5YR5/1褐灰色	脚柱部3/4残存。胎土精良。1～2mmの石英・長石・チャート多量、クサリ礫少量含。
81	弥生土器	器台B	竪穴住居324 床直上 (a)	(18.4)			2.5Y7/2灰黄色～10YR7/2にぶい黄橙色	脚柱部から口縁部1/3残存。胎土精良。1mm前後の石英・長石・チャート多量、クサリ礫微量含。

No	器種	器形	出土遺構	口径	器高	底径	色 調	備 考
82	弥生土器	甕C	竪穴住居148 床直上 (e)	(13.0)	14.5	3.5	5YR6/6橙色	2/3残存。胎土精良。1～2mmの石英・長石・チャート・クサリ礫少量含。外面煤付着。二次焼成受ける。
83	弥生土器	甕C	竪穴住居148 床直上 (a)	13.5	15.6	4.4	10YR8/4浅黄橙色	1/2残存。胎土やや粗。1～4mmの石英・長石多量、チャート少量含。クサリ礫含。下半煤付。
84	弥生土器	甕C	竪穴住居148 床直上 (h)	13.8	17.5		10YR8/2灰白色	1/2残存。口縁部は完存。胎土やや粗。1～3mmの石英・長石少量、チャート多量含。クサリ礫少量含。下半煤付着。
85	弥生土器	甕C	竪穴住居148 床直上 (c)	13.4			10YR8/3浅黄橙色	1/4残存。胎土精良。0.5～3mmの石英・長石・チャートやや多量、クサリ礫少量含。
86	弥生土器	甕C	竪穴住居148 床直上 (e)	(13.0)	22.2	3.2	7.5YR8/4浅黄橙色	4/5残存。胎土やや粗。1～3mmの石英・長石・チャート多量含。クサリ礫少量含。二次焼成受ける。
87	弥生土器	甕A	竪穴住居148 床直上 (b)	(17.2)			10YR7/4にぶい黄橙色	口縁1/6残存。胎土やや粗。1～3mmのチャート多量、石英・長石少量含。
88	弥生土器	広口壺	竪穴住居148 床直上 (d)	13.2			5YR7/6橙色	1/2残存。受口状口縁広口壺。胎土精良。1～4mmの石英・長石多量、チャート微量含。雲母少量含。外面の半分に黒斑あり。
89	弥生土器	短頸壺	竪穴住居148 床直上 (g)	(8.0)			10YR8/4浅黄橙色	1/3残存。胎土やや粗。1～3mmの石英・長石・チャート含。クサリ礫含。焼成やや軟。
90	弥生土器	受口状 口縁鉢	竪穴住居148 床直上 (j)	(23.4)	13.0	3.6	5YR7/6橙色	1/3残存。胎土やや粗。0.5～3mmのチャート多量、石英・長石少量含。クサリ礫少量含。
91	弥生土器	皿形 高杯A	竪穴住居148 床直上 (i)	(29.6)			5YR7/6橙色	1/2残存。脚部b形態。胎土精良。0.5～2mmの石英・長石やや多量、チャート少量含。クサリ礫含。
92	弥生土器	器台C	竪穴住居148 床直上 (f)	(18.6)	12.0	(14.8)	5YR5/6明赤褐色	1/2残存。胎土精良。1mm以下のチャート・石英・長石・黒石粒少量含。
93	弥生土器	甕C	土壇215	(12.4)			5YR5/6明赤褐色	口縁1/10残存。胎土精良。0.5～2mmの石英・長石・チャート・クサリ礫少量含。
94	弥生土器	甕C	土壇215	(13.8)			10YR7/4にぶい黄橙色	口縁1/8残存。胎土精良。0.5～1mmの石英・長石・チャート少量含。雲母少量含。
95	弥生土器	甕C	土壇215	(15.0)			5YR5/6明赤褐色	口縁1/10残存。胎土やや粗。0.5～2mmの石英・長石・チャート含。
96	弥生土器	直口壺	土壇215	(11.4)			7.5YR7/6橙色	口縁1/3残存。胎土やや粗。1～3mmのチャート多量、石英・長石少量含。
97	弥生土器	短頸壺	土壇215				7.5YR6/3にぶい褐色	1/5残存。胎土精良。0.5～2mmのチャート多量、石英・長石少量含。
98	弥生土器	広口壺	土壇215	(13.0)			7.5YR7/4にぶい橙色	口縁1/10残存。胎土やや粗。1～2mmのチャート多量含。クサリ礫含。
99	弥生土器	広口壺	土壇215	(14.0)			10YR8/2灰白色	口縁1/5残存。胎土やや粗。0.5～2mmの石英・長石・チャート・クサリ礫やや多量含。
100	弥生土器	広口壺	土壇215	14.0			10YR8/4浅黄橙色	口縁3/4残存。受口状口縁広口壺。胎土やや粗。1～2mmの石英・長石多量、チャート少量含。
101	弥生土器	広口壺	土壇215	(20.6)			7.5YR6/3にぶい褐色	口縁1/10残存。胎土やや粗。0.5～2mmの石英・長石・チャート多量含。クサリ礫少量含。
102	弥生土器	壺底部	土壇215			6.6	7.5YR7/4にぶい橙色	底部のみ完存。胎土やや粗。1～4mmのチャート多量含。

No	器種	器形	出土遺構	口径	器高	底径	色 調	備 考
103	弥生土器	器台C	土壙215	(22.2)			10YR6/3にぶい黄橙色	口縁1/10残存。胎土精良。0.5～2mmの石英・長石・チャート少量含。クサリ礫少量含。
104	弥生土器	器台C	土壙215	(22.0)			10YR7/2にぶい黄橙色	口縁1/10残存。胎土やや粗。1～2mmのチャート多量含。クサリ礫少量含。
105	弥生土器	有段口縁高杯	土壙215	27.0			2.5Y6/8橙色	杯部1/4残存。胎土精良。0.5～3mmの石英・長石少量、チャート多量含。(106)と胎土類似。
106	弥生土器	皿形高杯A	土壙215	(22.8)			5YR6/6橙色	1/2残存。脚部a形態。胎土精良。1～3mmのチャート微量、0.5～1mmの石英・長石微量含。
107	弥生土器	皿形高杯B	土壙215	22.2	16.2	12.4	10YR8/1灰白色	3/4残存。脚部a形態。胎土やや粗。1～5mmの石英・長石多量、チャート少量含。磨滅著しい。
108	弥生土器	高杯	土壙215				5YR6/6橙色	1/10残存。皿形高杯の脚形態b1か。胎土精良。0.5～2mmの石英・長石・チャート少量含。
109	弥生土器	皿形高杯	土壙215				10YR8/3浅黄橙色	1/10残存。脚部a形態。胎土やや粗。1～3mmのチャート多量、石英・長石・クサリ礫少量含。
110	弥生土器	碗形高杯	土壙215			(11.0)	7.5YR7/6橙色	脚部1/2残存。脚部c形態。胎土やや粗。1～3mmのチャート多量、石英・長石・クサリ礫少量含。
111	弥生土器	皿形高杯	土壙215			(15.8)	5YR6/6橙色	脚部3/4残存。脚部b形態。胎土精良。0.5～2mmの石英・長石・チャート含。
112	弥生土器	短頸壺	竪穴住居214床直上 (a)	8.7	18.4	3.8	10YR8/3浅黄橙色	ほぼ完存。胎土やや粗。1～2mmの石英・長石少量、チャート多量含。クサリ礫微量含。
113	弥生土器	長頸壺	竪穴住居214床直上 (b)	11.6			10YR7/3にぶい黄橙色	口縁3/4残存。胎土やや粗。1～3mmの石英・長石・チャート含。
114	弥生土器	甕C	竪穴住居474床直上 (d)	(15.0)			10YR7/4にぶい黄橙色	1/2残存。胎土粗。1～4mmの石英・長石・チャート多量含。二次焼成受ける。下半煤付。
115	弥生土器	広口壺	竪穴住居474床直上 (b)	15.0			2.5YR6/6橙色	1/5残存。口縁部完存。胎土やや粗。0.5～4mmの石英・長石多量、チャート少量含。
116	弥生土器	長頸壺	竪穴住居474床直上 (c)	(11.4)	29.1	5.5	10YR8/2灰白色	4/5残存。胎土やや粗。0.5～3mmのチャート多量、石英・長石少量含。クサリ礫少量含。
117	弥生土器	皿形高杯B	竪穴住居474床直上 (e)	(19.8)			5YR6/6橙色	1/4残存。杯部1/2残存。胎土やや粗。0.5～2mmの石英・長石・チャート含。クサリ礫含。
118	弥生土器	器台B	竪穴住居474床直上 (a)	(20.0)			7.5YR8/3浅黄橙色	1/4残存。胎土粗。1～2mmの石英・長石・チャート多量含。クサリ礫多量含。
119	弥生土器	蓋	土壙479				10YR4/1褐灰色	1/5残存。胎土やや粗。0.5～2mmの石英・長石・チャート含。
120	弥生土器	器台B	土壙479	(13.4)	11.5	(12.2)	7.5YR5/4にぶい褐色	1/3残存。胎土精良。0.5～1mmのチャート多量、石英・長石微量含。
121	弥生土器	器台C	土壙479				7.5YR7/4にぶい橙色	1/5残存。胎土精良。1mm以下の石英・長石・チャート少量含。クサリ礫含。
122	弥生土器	高杯	土壙479			(14.0)	7.5YR7/4にぶい橙色	2/3残存。脚部c形態。胎土精良。0.5～1mmの石英・長石・チャート少量含。黒色砂粒少量含。
123	弥生土器	甕A	柱穴537	12.4			10YR8/2灰白色	4/5残存。胎土やや粗。0.5～3mmのチャート・石英・長石多量含。雲母少量含。二次焼成受ける。下半煤付着。底部穿孔か。

No.	器種	器形	出土遺構	口径	器高	底径	色 調	備 考
124	弥生土器	無頸壺	柱穴369	(10.5)	12.0	2.9	10YR5/4にぶい黄褐色	3/4残存。胎土精良。0.5～2mmの石英・長石・チャート少量含。クサリ礫・雲母少量含。
125	弥生土器	器台B	柱穴538	(14.3)	10.7	11.4	10YR8/3浅黄橙色	3/4残存。胎土粗。0.5～3mmのチャート多量、石英・長石少量含。
126	弥生土器	器台A	柱穴503			14.1	2.5YR7/6橙色	1/5残存。胎土やや粗。0.5～3mmのチャートやや多量、石英・長石少量含。クサリ礫含。
127	弥生土器	皿形高杯C	柱穴503	14.4			7.5YR8/4浅黄橙色	1/2残存。杯部はほぼ完存。胎土やや粗。0.5～3mmのチャート多量、石英・長石少量含。クサリ礫含。
128	弥生土器	皿形高杯C	土壙321	(15.6)			7.5YR8/3浅黄橙色	杯部1/6残存。胎土精良。1～3mmの石英・長石・チャート含。クサリ礫含。
129	弥生土器	皿形高杯	柱穴466			17.6	7.5YR8/4浅黄橙色	1/2残存。脚部はほぼ完存。脚部c形態。胎土精良。0.5～1mmのチャート・石英・長石少量含。クサリ礫含。杯部は意図的に打ち欠きか。
130	弥生土器	甕A	土壙309	11.6	15.0	3.0	10YR3/1黒褐色	ほぼ完存。胎土やや粗。0.5～2mmの石英・長石・チャート少量含。雲母含。二次焼成受ける。
131	弥生土器	器台A	柱穴3			13.8	5YR7/8橙色	2/3残存。胎土やや粗。0.5～2mmの石英・長石・チャート多量含。
132	弥生土器	短頸壺	土壙13	13.3	31.2		7.5YR8/4浅黄橙色～10YR8/1灰白色	5/6残存。胎土やや粗。0.5～3mmの石英・長石多量、チャート少量含。クサリ礫・雲母少量含。二次焼成受ける。下半煤付着。体部やや下よりに焼成後穿孔。
133	弥生土器	甕C	土壙143	(19.0)			10YR8/2灰白色	口縁1/8残存。胎土やや粗。0.5～2mmの石英・長石・チャート含。雲母含。
134	弥生土器	甕C	土壙143	(16.8)			2.5Y7/4淡赤橙色	口縁1/8残存。胎土やや粗。1mm以下のチャート・石英・長石含。クサリ礫含。
135	弥生土器	甕C	土壙143	(19.0)			5YR6/6橙色	口縁1/8残存。胎土精良。0.5～3mmの石英・長石・チャート微量含。
136	弥生土器	甕C	土壙143	(20.0)			10YR6/2灰黄褐色	口縁1/8残存。胎土やや粗。1mm以下のチャート・石英・長石含。金雲母含。
137	弥生土器	甕C	土壙143	(20.2)			7.5YR7/4にぶい橙色	口縁1/4残存。胎土やや粗。0.5～2mmの石英・長石・チャート含。クサリ礫含。
138	弥生土器	甕C	土壙143	(20.0)			10YR8/2灰白色	1/10残存。胎土やや粗。0.5～3mmの石英・長石・チャート含。赤色クサリ礫多量含。二次焼成受ける。
139	弥生土器	壺底部	土壙143			(6.6)	10YR6/2灰黄褐色	底部1/2残存。胎土やや粗。0.5～2mmの石英・長石多量、チャート少量含。
140	弥生土器	壺底部	土壙143			9.4	10YR6/2灰黄褐色	底部完存。胎土粗。0.5～2mmの石英・長石・チャート多量含。
141	弥生土器	高杯脚部	土壙143				5YR6/6橙色	1/10残存。胎土精良。0.5～3mmの石英・長石・チャート含。クサリ礫含。
142	弥生土器	広口壺	土壙199	(21.0)			10YR8/2灰白色	1/10残存。胎土やや粗。0.5～2mmの石英・長石・チャート・クサリ礫多量含。雲母含。
143	弥生土器	広口壺	土壙199	18.8			2.5Y8/9浅黄色	1/10残存。胎土精良。0.5～4mmの赤色系チャートやや多量、石英・長石少量含。
144	弥生土器	広口壺	土壙199	20.6	38.0	8.0	5YR4/2灰褐色	1/4残存。胎土精良。1mm以下の石英・長石・チャート・クサリ礫含。底部焼成前穿孔。
145	弥生土器	甕底部	土壙199			4.8	2.5Y6/6橙色	底部完存。胎土やや粗。0.5～3mmの石英・長石・チャート多量含。二次焼成受ける。底部焼成前穿孔。

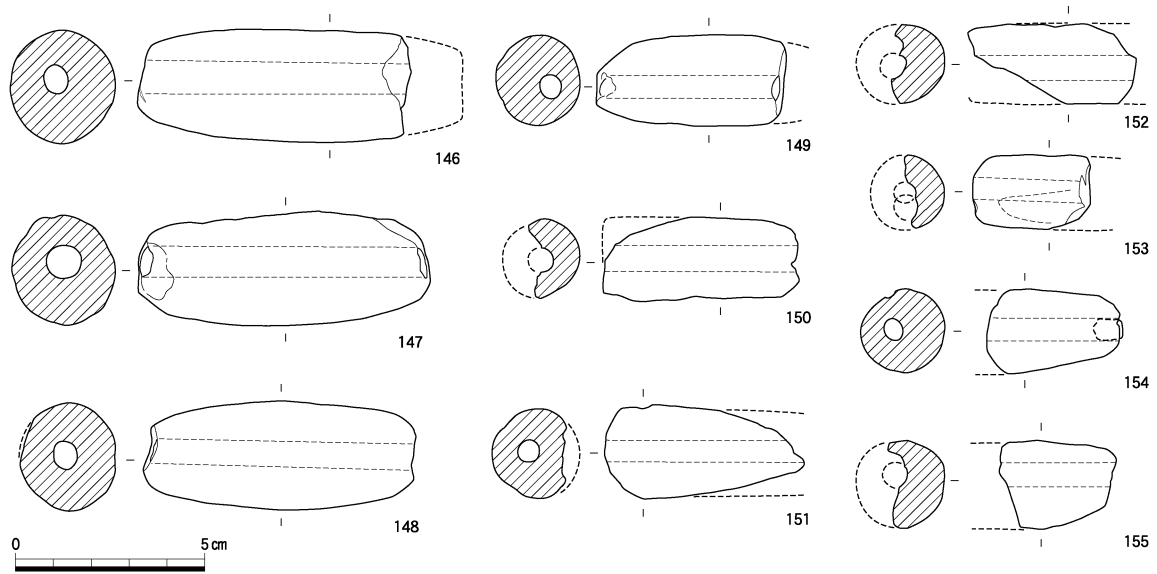


図 51 土錘実測図（1：2）

土錘が 10 点出土した。すべて管状土錘である。出土遺構と概要は表 8 に記した。147・148 は完形に近く、他は欠損する。146～148 はやや大型で、中央部が膨らみ、両端が細くなる形状を示す。149～155 は小型で、中央部は直線的で、両端が細くなる。胎土は、大型のものは粒径の大きい石粒を多量に含んで粗く、小型のものは精良である。154 の土錘は、孔に木片が刺さった状態で出土した（図 52）。木片の残存長は約 1 cm で樹種はカバノキ科カバノキ属である。



図 52 土錘 154

（2）瓦（図 53）

井戸 249 枠内から、7～8 世紀のものと考えられる瓦片が 3 点出土した。156 は丸瓦で、凸面はナデ、凹面には細かい布目が付き、コビキ痕が明瞭に残る。胎土は緻密で、焼成はやや軟、色調は灰黄褐色を呈する。157 は平瓦である。凹面は布目で、桶巻き作りの枠板痕が残る。枠板一枚の幅は約 4 cm。凸面は斜格子タタキで、格子の大きさは一辺約 1.2 cm の菱形である。胎土は粗く直径 0.5～2.5 cm の石粒を多量に含む。焼成は堅緻で、色調はにぶい黄橙色を呈する。厚みは 2.0～2.2 cm。158 も平瓦で、凹面の布目は細かく、枠板痕が残る。枠板一枚の幅は 2.1～3.5 cm。炭化物状の物質が付着する。凸面は縄タタキで、端面はヘラ切り、側面はヘラで面取りを行う。胎土は粗く直径 0.5～2 mm の石粒を多量に含む。焼成はやや軟、色調は灰黄褐色。厚みは 1.6～1.8 cm ある。

（3）木製品（図 54・55、図版 18・19）

159～168 は、井戸 249 に使用された井戸枠材である。井戸枠の内側を表として図化した。井

表8 土錘一覧表

No.	出土遺構	長さ	最大径	孔径	重量(g)	色調	備考
146	竪穴住居148 床上5cm	〈7.2〉	3.0	0.7~ 0.9	61.74	10YR8/1灰白色~ 7.5YR8/4浅黄橙色	4/5残存。胎土に1~4mmの石英・長石・チャート多量含。
147	井戸249	7.7	2.9	0.8	58.61	7.5YR8/4浅黄橙色	完存。胎土に0.5~2mmの石英・長石・チャート多量含。
148	竪穴住居428 壁溝	7.2	2.8	0.7	51.66	10YR8/4浅黄橙色	ほぼ完存。胎土に1~2mmの石英・長石・チャート多量含む。
149	竪穴住居148 上層	〈5.0〉	2.4	0.6	28.71	7.5YR7/4にぶい橙色	3/4残存。胎土に1mm以下の砂粒少量含。
150	井戸249	〈5.2〉	2.1	0.6~ 0.7	12.42	5Y8/1灰白色	1/4残存。胎土精良。0.5mm以下の砂粒微量含。
151	井戸249	〈5.3〉	2.4	0.6	18.30	10YR8/3浅黄橙色	2/5残存。胎土に1mm以下の石英・長石・チャート多量含。
152	井戸249	〈4.5〉	2.1	0.6~ 0.7	10.40	10YR8/3浅黄橙色	1/4残存。胎土精良。0.5mm以下の砂粒微量含。
153	柱穴449	〈3.1〉	2.0	0.6~ 0.7	6.61	7.5YR7/6橙色	1/6残存。胎土精良。1mm以下の砂粒微量含。孔2つ重なる。
154	竪穴住居148 床上5cm	〈3.6〉	2.2	0.6	16.48	7.5YR7/4にぶい橙色	2/5残存。胎土に1~2mmの石英・長石・チャート少量含。孔に木片がつまる。
155	竪穴住居148 上層	〈3.1〉	2.3	0.6~ 0.7	8.69	7.5YR8/4浅黄橙色	1/6残存。胎土精良。1mm以下の砂粒微量含。

※ 単位はcm、〈 〉は残存数値

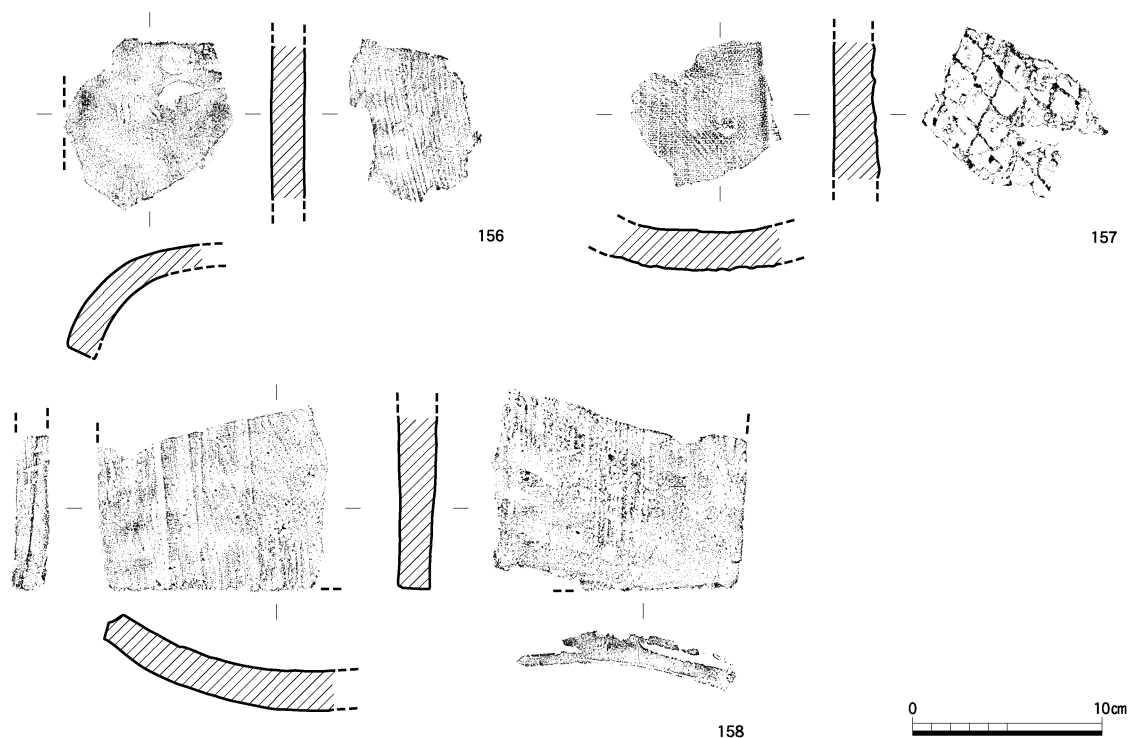


図53 瓦拓影・実測図(1:4)

戸枠上段の丸太材と横板材は腐朽の著しいものも多く、加工が残るものを図化した。それ以外に取り上げた材も含め、すべて樹種はヒノキである。159・160は井戸上部で相欠き組みにされた丸太材である。160の左端面は切断面が残るが他の端面では明瞭でなく、また加工と考えられ

るのはそれぞれ2箇所の柄のみで、角材に加工した痕跡は看取できない。161～164は井戸枠下段の横板材である。161・162は上下端面に切断の加工痕が残り、両側の上部を切り込み凸状に加工する。163も右下部に切り込んだ加工面が残る。164は他のものより厚みが1cm以上厚く、幅も約10cm広い。上半は腐朽が進むが下半は加工面が良好に残る。両端を丁寧に切断し、表裏ともに平滑に仕上げる。

165～168は、集水部で井籠組にされた横板材である。順に北、西、南、東に使用された材で、

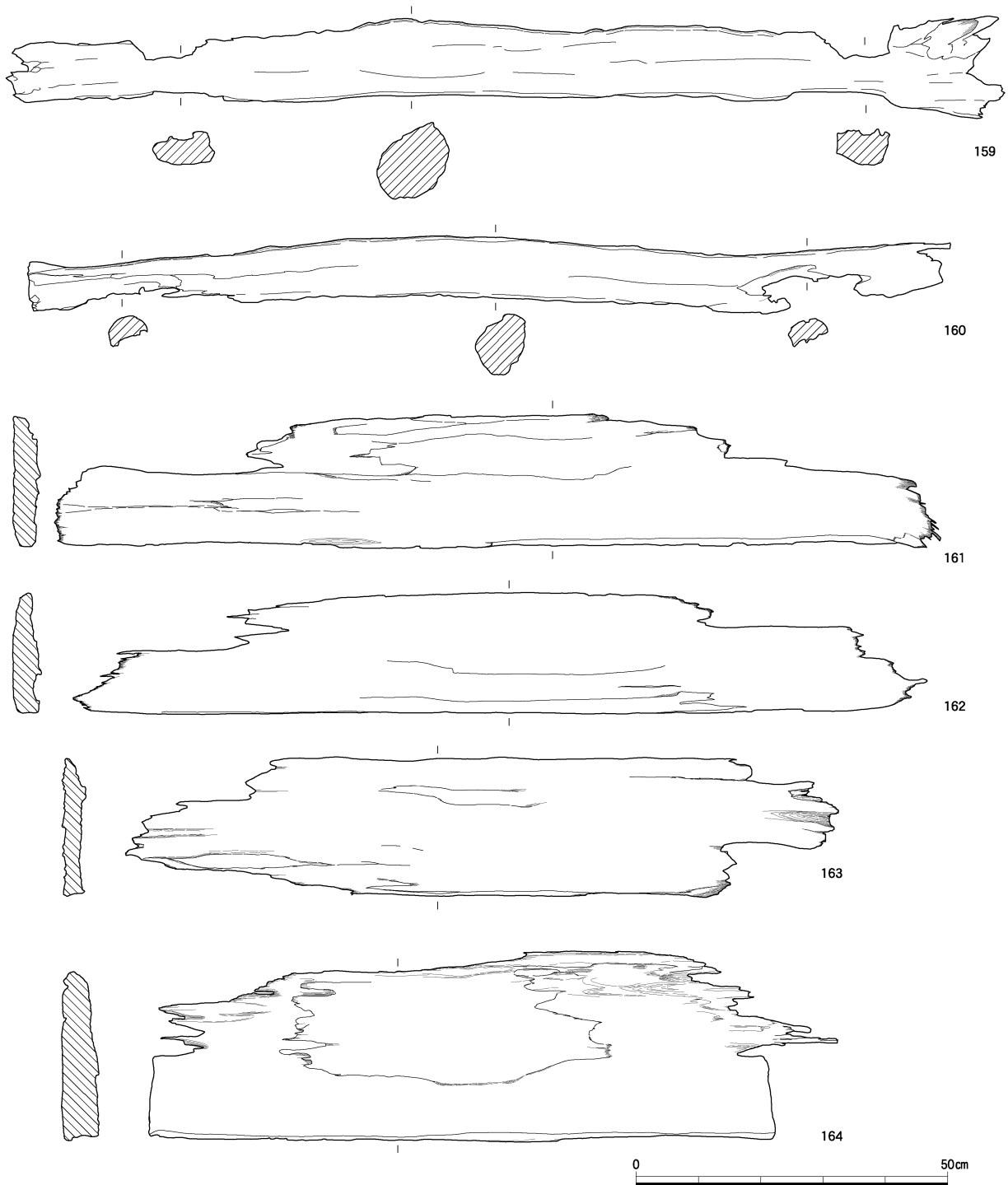


図54 井戸249 枠材実測図1 (1:10)

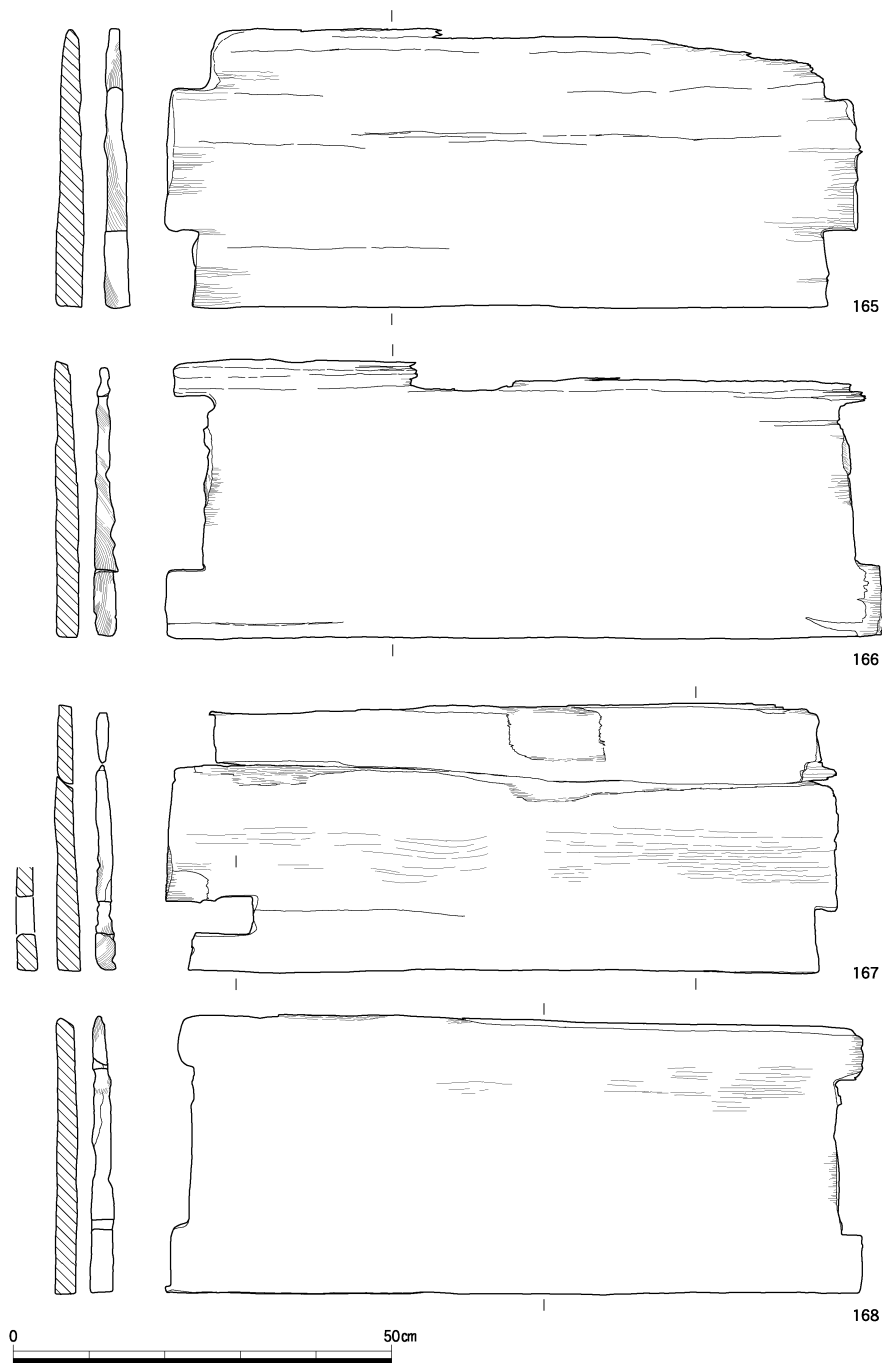


図 55 井戸 249 枳材実測図 2 (1 : 10)

両端に交互に切り込みを入れて柄をつくる。切り込みの幅と長さはそれぞれ組み合う部分でほぼ一致する。表面は丁寧に加工し平滑に仕上げている。板の幅、厚みがほぼ等しく、木目も同方向であることから、一枚の長い板を切断して使用した可能性がある。167 の南材は、左下の柄の部分から連続するように横 7.5 cm、縦 5 cm の長方形の孔が空く。加工痕が残り意図的に開けられた孔で、木材運搬用の棧穴もしくは井戸の機能に関連するものと考えられる。いずれの材も建築部材から転用された痕跡は認められない。

表9 井戸材一覧表

No.	部 位	出土遺構	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	最大厚み (cm)	直径 (cm)	樹種	備 考
159	上段丸太材	井戸249	160.3			12.4	ヒノキ	
160	上段丸太材	井戸249	148.1			9.6	ヒノキ	左端加工面残る
161	下段横板材	井戸249	142.3	21.5	4.2		ヒノキ	上下は加工面残る
162	下段横板材	井戸249	137.1	19.3	4.5		ヒノキ	上下は加工面残る
163	下段横板材	井戸249	114.3	22.2	3.6		ヒノキ	上下右加工面残る
164	下段横板材	井戸249	110.6	30.5	5.8		ヒノキ	上下左右加工面残る
165	集水部北横板材	井戸249	92.0	37.0	3.6		ヒノキ	下部端に孔があく
166	集水部西横板材	井戸249	94.8	36.9	3.0		ヒノキ	右端上部欠損
167	集水部南横板材	井戸249	88.8	35.6	3.1		ヒノキ	右端上部欠損
168	集水部東横板材	井戸249	92.2	36.6	3.0		ヒノキ	

(4) 石器

石器類の出土遺構、大きさ、重量、石材⁴⁾などについては表10にまとめ、ここでは種別に概要を述べる。

石鏃(図56・57、図版20) 図56は打製石鏃で、材質はすべてサヌカイトである。凹基式の169は、形状と風化の進度から縄文時代の石鏃と考えられる。170・171は凹基式である。171は先端と基部の一方を欠損する。172は平基式。173～175は凸基式で、174は厚みがあり重量も重い。先端を欠損する。175は完形。176～179は有茎式。176はやや歪な形状で、破線で復元した形状の石鏃の再加工品、もしくは製作途中での破損による形状の変更に起因するものと思われる。177・178は鏃身の先端と茎の先端を欠損する。179は鏃身の長さが約5cmあり、茎を入れると6.2cmと長い。基部の幅が狭く細長い形状を呈する。

図57は磨製石鏃である。材質はすべて粘板岩。平基式の180は、鏃身の下部に穿孔のあるいわゆる有孔磨製石鏃である。基部の一方を欠損する。181は有茎式で、側辺は直線的に開き、鏃身の先端は鋭利に尖る。182も有茎式で、鏃身の片面に鑄が通る。鏃身の側面と茎の側面には縦方向の擦り目が認められる。183の側辺は直線的に開き、鑄はない。基部を欠損する。184は基部の幅が狭く、側辺はやや内弯し細長い形状を示す。両面に鑄が通る。185は鑄がなく、細長い形状を示す。先端と基部を欠く。186は基部を欠損するが長さが6cmある。両面に鑄が通る。187も先端と基部を欠損するが5.6cmあって細長い。鑄はない。

石小刀・石錐(図58、図版20) 188は、打製の石小刀である。刃部はわずかに内弯し、内刃側に突起が付く。内刃は磨滅し、基部は欠損する。189～193は石錐である。193は磨製で粘板岩製、それ以外は打製でサヌカイト製である。189・190は頭部が大きく錐部との境界が明瞭である。191も頭部を作り出すが、錐部との境界は明瞭でなく、頭部上端と頭部と錐部の境目に自然面が残る。192は一部に自然面が残るが、二次加工が認められ、逆三角形の先端を尖らして錐部とするタイプのものと考えられる。磨製の193は断面が方形で、先端は尖る。先端から約2.5cmには、使用痕と考えられる横方向の条線が認められる。

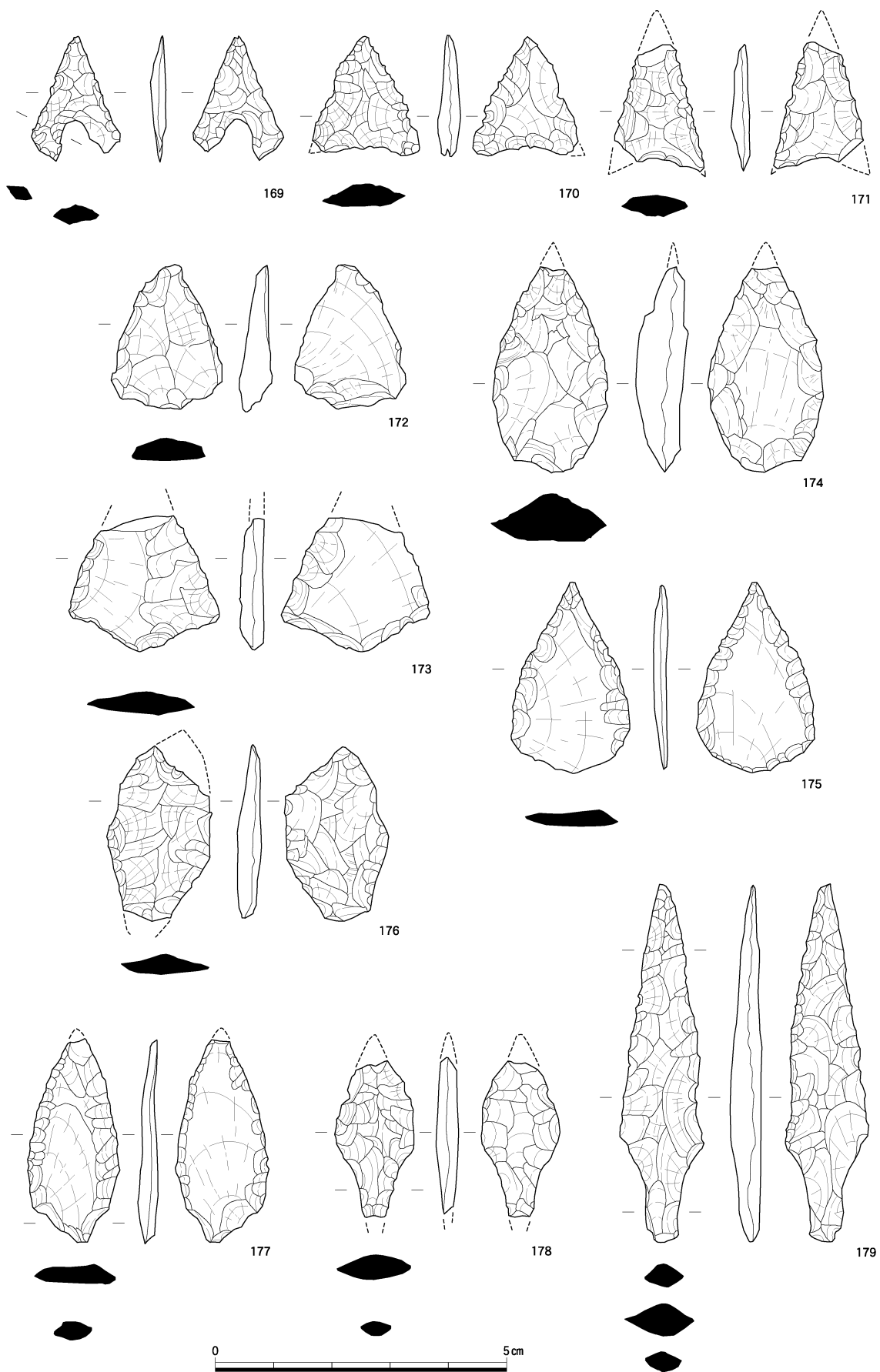


图 56 石器实测图 1 (1 : 1)

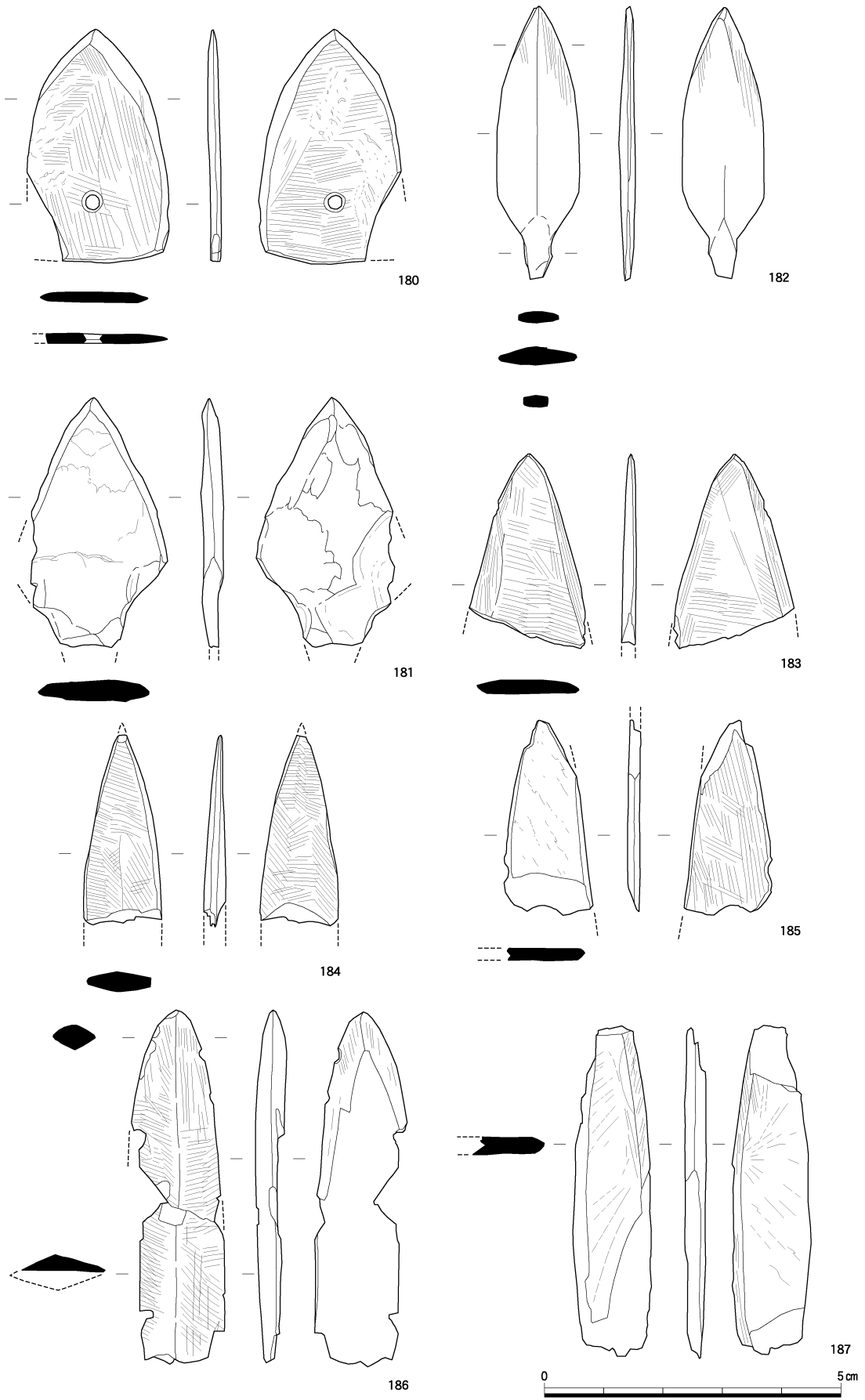


图 57 石器实测图 2 (1 : 1)

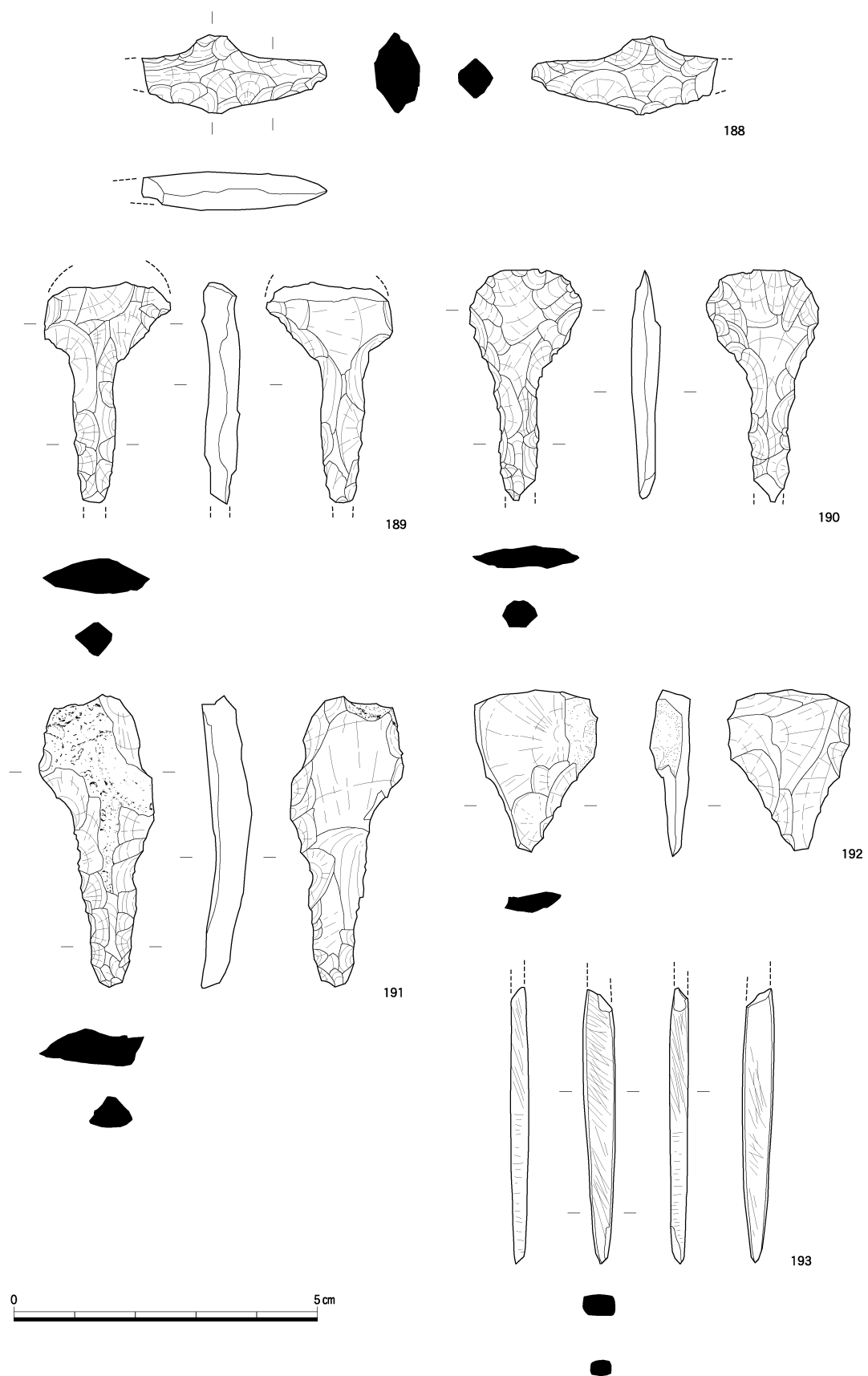


图 58 石器实测图 3 (1 : 1)

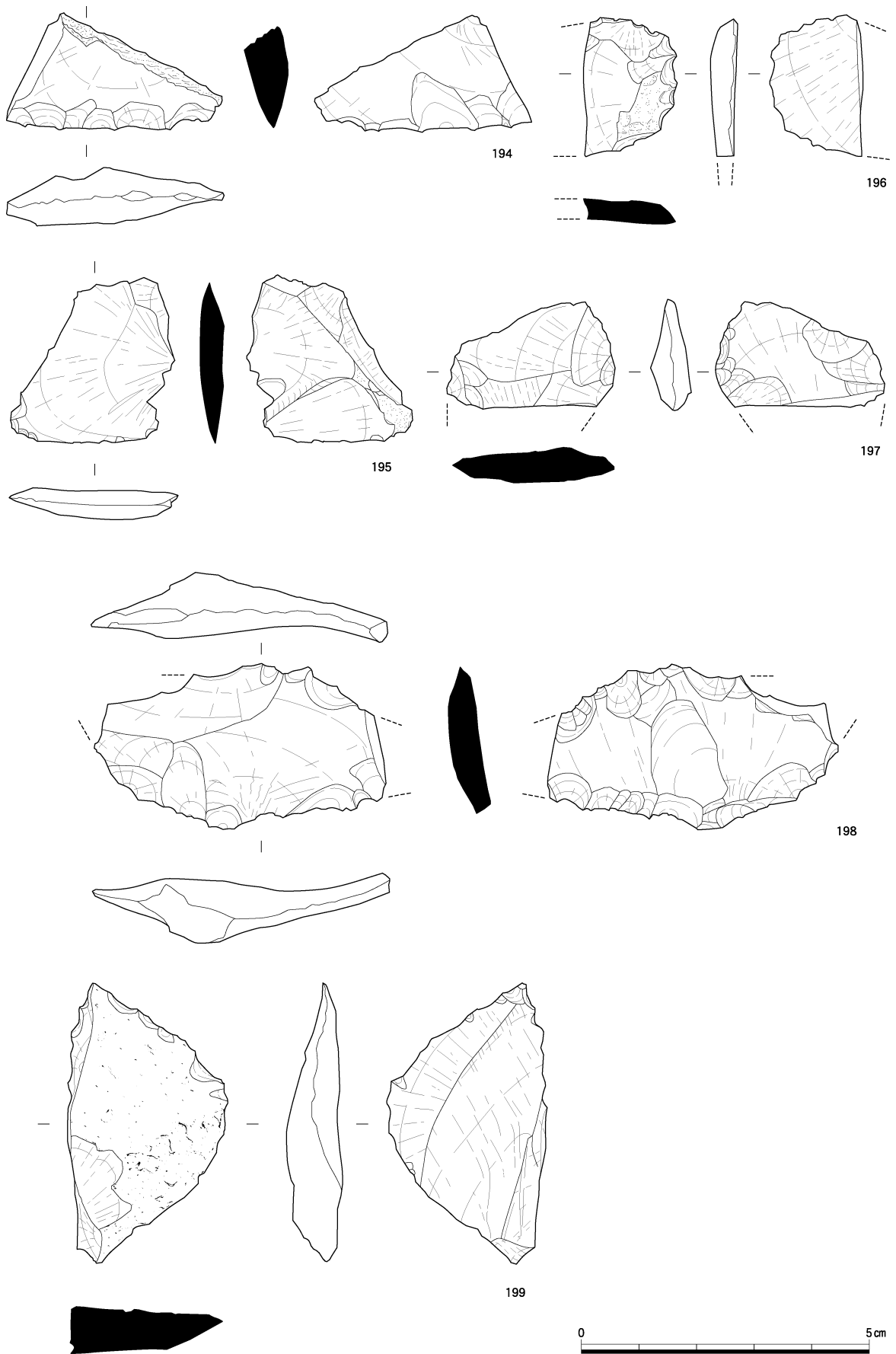


图 59 石器实测图 4 (1 : 1)

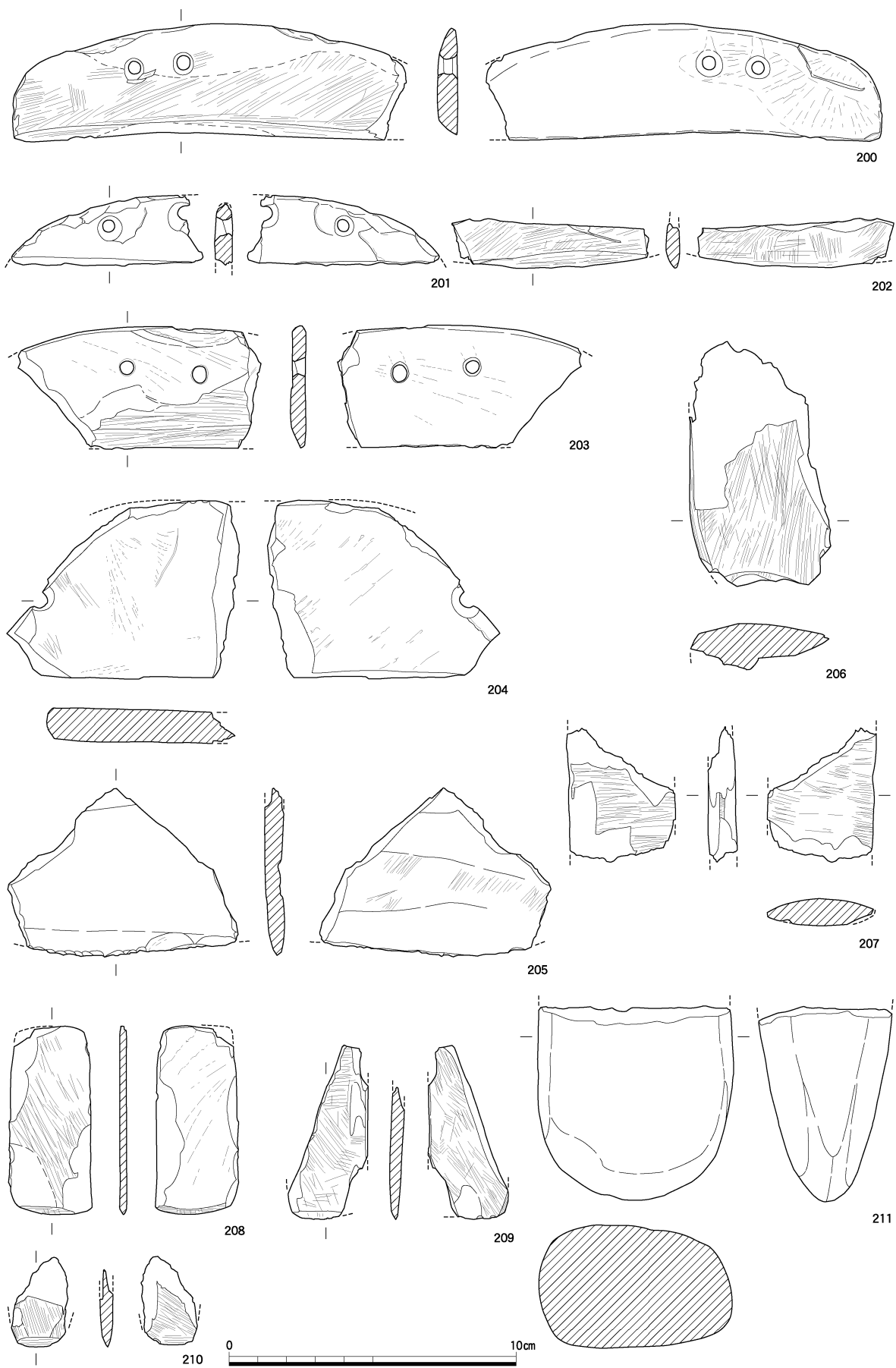


图 60 石器实测图 5 (1 : 2)

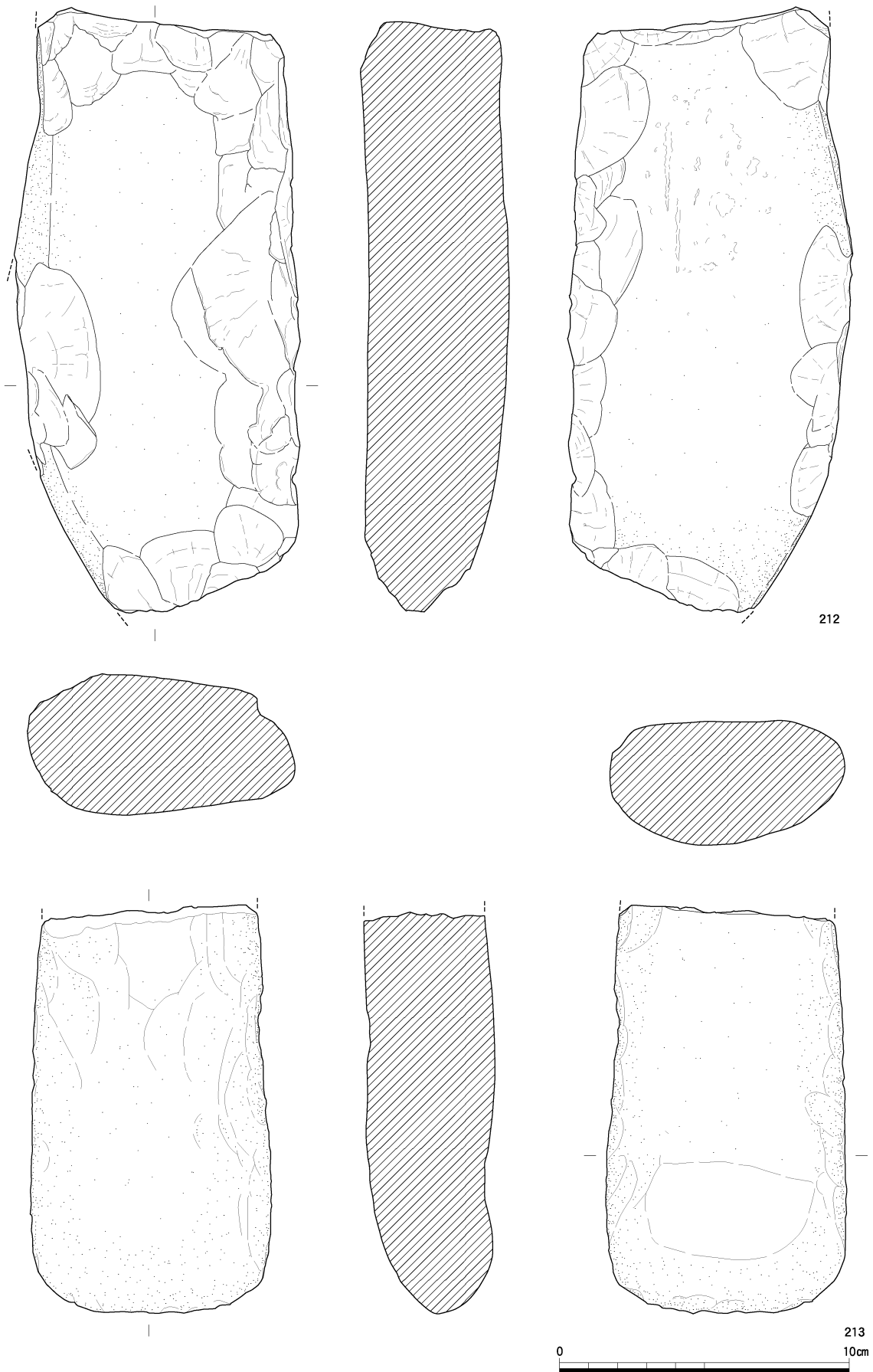


图 61 石器实测图 6 (1 : 2)

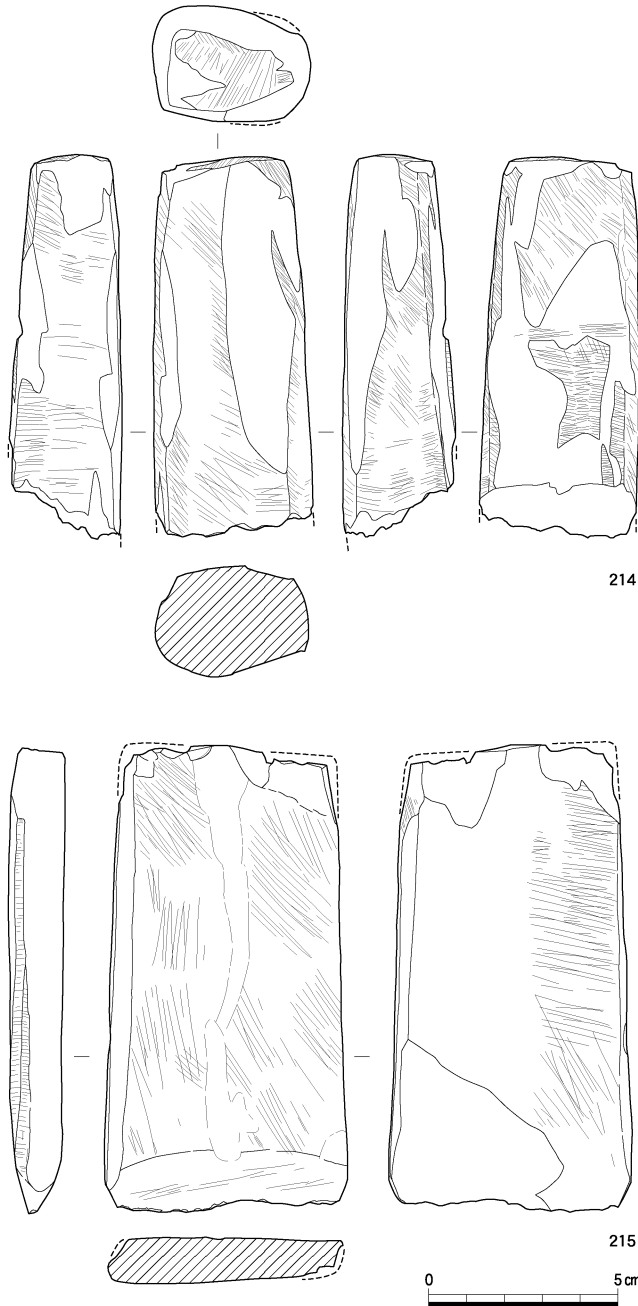


図 62 石器実測図 7 (1 : 2)

するが片刃で、刃部は直線的。背部は外弯する。裏面には手擦れの磨滅痕が認められ、紐孔部には紐擦れ痕跡が残る。204・205 は大型石包丁である。204 は破片で、背部の一部と紐孔が一箇所残存する。刃部は残存しない。表裏面ともに光沢を帯びる。205 は破片で刃部の一部が残存する。片刃で、刃先は刃こぼれる。裏面の中央に石材の剥離による凹みがあるが、この部分にも斜方向の擦り目が認められる。

石剣 (図 60、図版 20) 206・207 は磨製石剣の破片と思われるものである。206 は鉄剣形石剣の茎部分と考えられ、片側の側面が残存する。207 は小片で、片側の刃部の一部が残存する。鏑はない。

二次加工のある剥片 (図 59、図版 20) 図 59 は、二次加工のあるサヌカイトの剥片である。194 は、自然面を背として、反対側に刃部を作る。195 は、二次加工された部分に刃こぼれと思われる痕跡が認められる。196 は丸く刃部が作り出されている。197 も両側に二次加工を行う。198 は上下に刃部をもつ横長の剥片で、両端を欠損する。石小刀の破損品の可能性がある。

石包丁 (図 60、図版 21) 200 は片側を欠損する。片刃で、刃部は直線的、背部はやや外弯する。刃部の中央 (破線で示した部分) は稲擦れと考えられる磨滅痕が見られ、背部と裏面の体部ほぼ全面に手擦れと考えられる磨滅痕が認められる。紐孔部分では裏面に背部に向かってごく浅く凹む紐擦れ痕が認められる。201 は半分を欠損し、刃部と背部は割れにより部分的に残存する。表裏面ともに剥離する。紐孔は 2 箇所残存する。刃部は直線的で、背部は外弯する。202 は、刃部の破片である。片刃と考えられ、全体的に著しく磨滅する。203 は両端を欠損する。表面は剥離

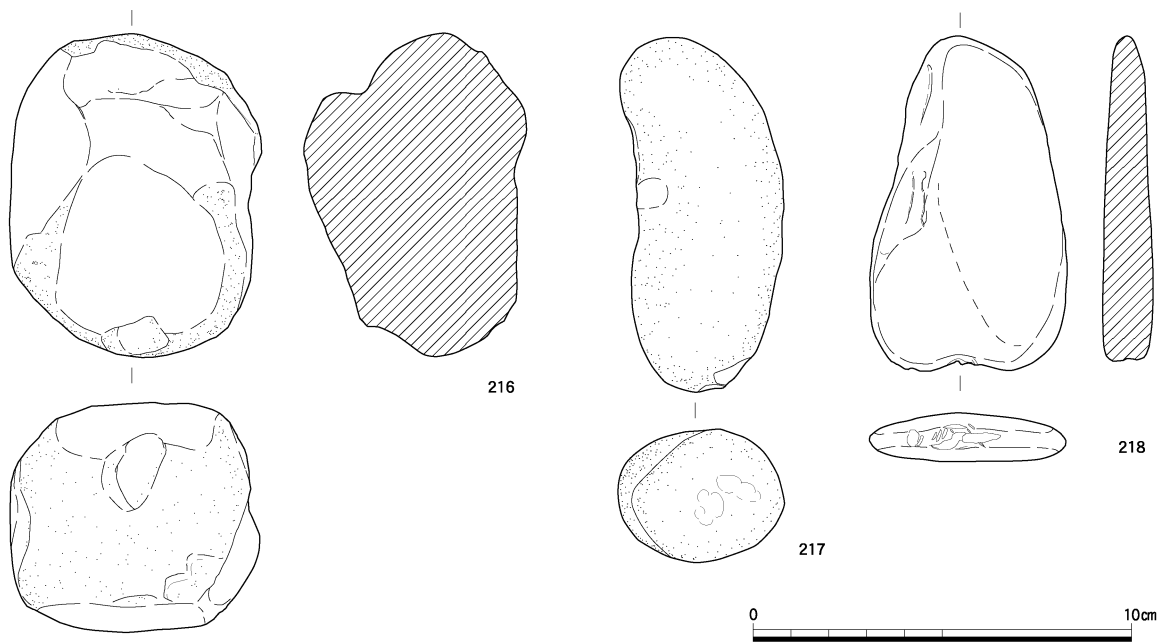


図 63 石器実測図 8 (1 : 2)

鑿状石器 (図 60、図版 20) 208 ~ 210 は薄型の鑿状石器である。208 は、縦長の長方形で、狭端面の一方の表裏に刃をつける両刃で、刃部には横方向の擦り目の他に、使用痕と考えられる縦方向の条痕が認められる。表面の一部 (破線で示した部分) はやや凹み、擦り目がなく光沢があって手擦れの痕跡と考えられる。209 も欠損するが縦長の長方形であったと考えられる。片刃で、刃部には刃こぼれが認められる。側面の割れ口に刃潰し状の二次加工を施しており、欠損後も使用された可能性がある。210 は破片で、刃部の一部が残存する。両刃で、磨製石鏃の可能性も残る。

石斧 (図 60 ~ 62、図版 21) 211 は大型蛤刃石斧で、基部の大半は欠損する。刃部の先端は磨滅により丸みを帯びる。212 は、表面が緩やかに凹み、平滑で光沢があることから、石皿を再加工した大型蛤刃石斧の未製品と考えられる。213 も、表裏面に平滑な箇所が残り、石皿と思われる石製品を再加工した大型蛤刃石斧の未製品であろう。214 は柱状片刃石斧の基部である。割れ口にも一部二次加工と考えられる擦り目が認められる。215 は扁平片刃石斧である。刃部には横方向の研磨痕が認められ、刃先は刃こぼれする。刃部裏面は光沢がある。基部の裏面は剥離する。

敲石・凹石 (図 63・64、図版 22) 216 ~ 219 は敲石である。216 は丸みをもつ石の上下に敲打痕が認められる。217 は、緩く弯曲する細長い石の先端に敲打痕が認められる。また、弯曲部の内側は手擦れと思われる磨滅痕があり平滑である。218 は、扁平な石の表裏面の半分が手擦れにより磨滅し、先端に敲打痕が認められる。219 は、方柱状の石の両端を打ち欠いて立方体状にし、敲石としたものと考えられ、7箇所敲打痕が認められる。220 は凹石で、円柱状の石の中央部に凹部がある。凹部から派生する横方向の条線が認められる。先端部に剥離痕が認められ、敲石としても使用された可能性がある。

石皿 (図 64・65、図版 22) 221 ~ 224 は石皿と考えられるものである。221 は上面に平滑な擦り面が認められる。222 は、上面に凹部があり、側面の一部にも磨滅して凹む箇所がある。223 は、

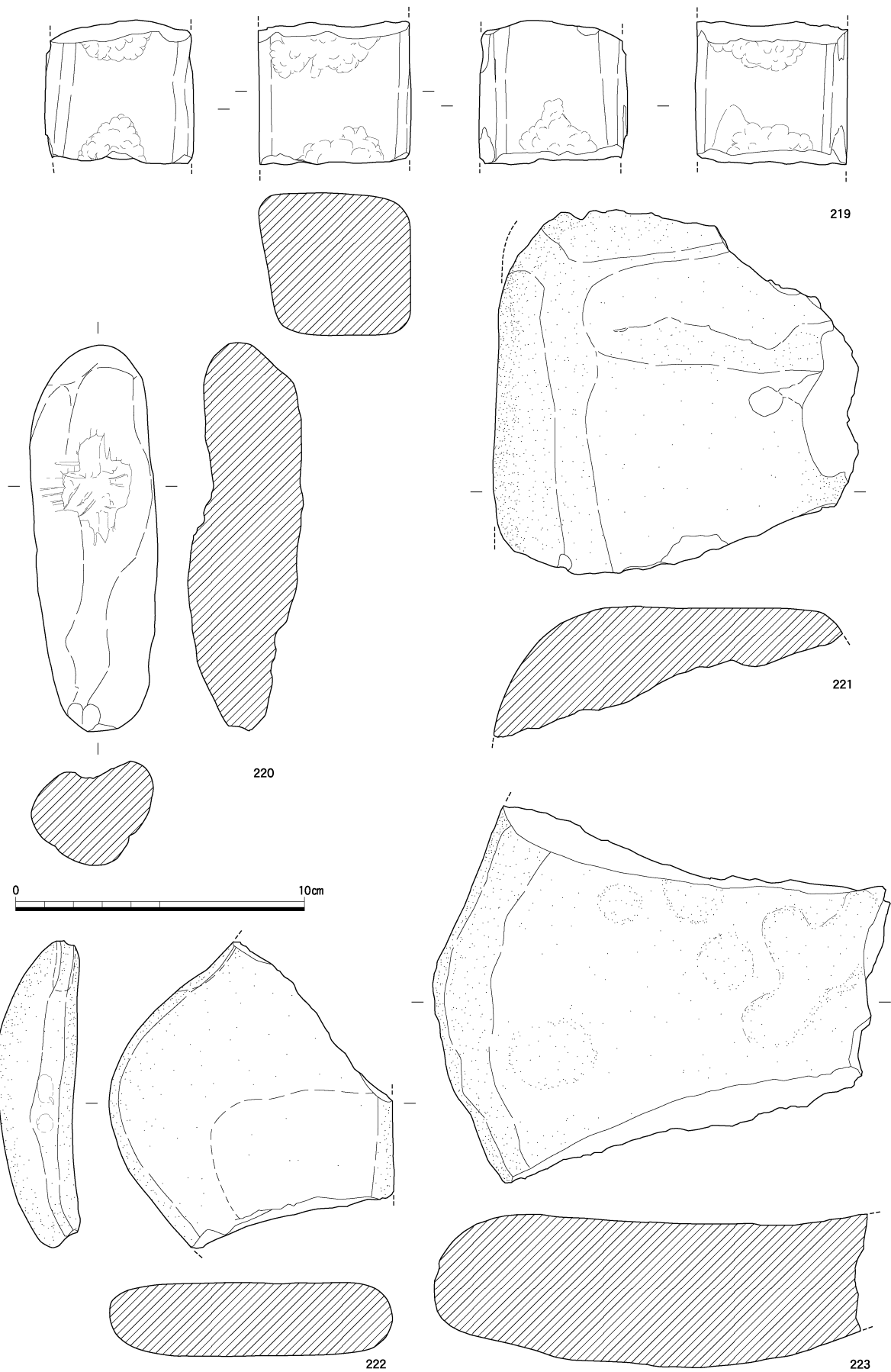


图64 石器实测图9 (1:2)

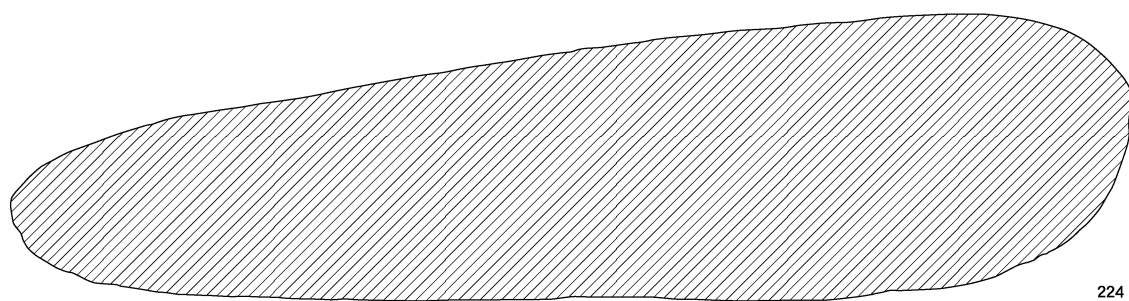
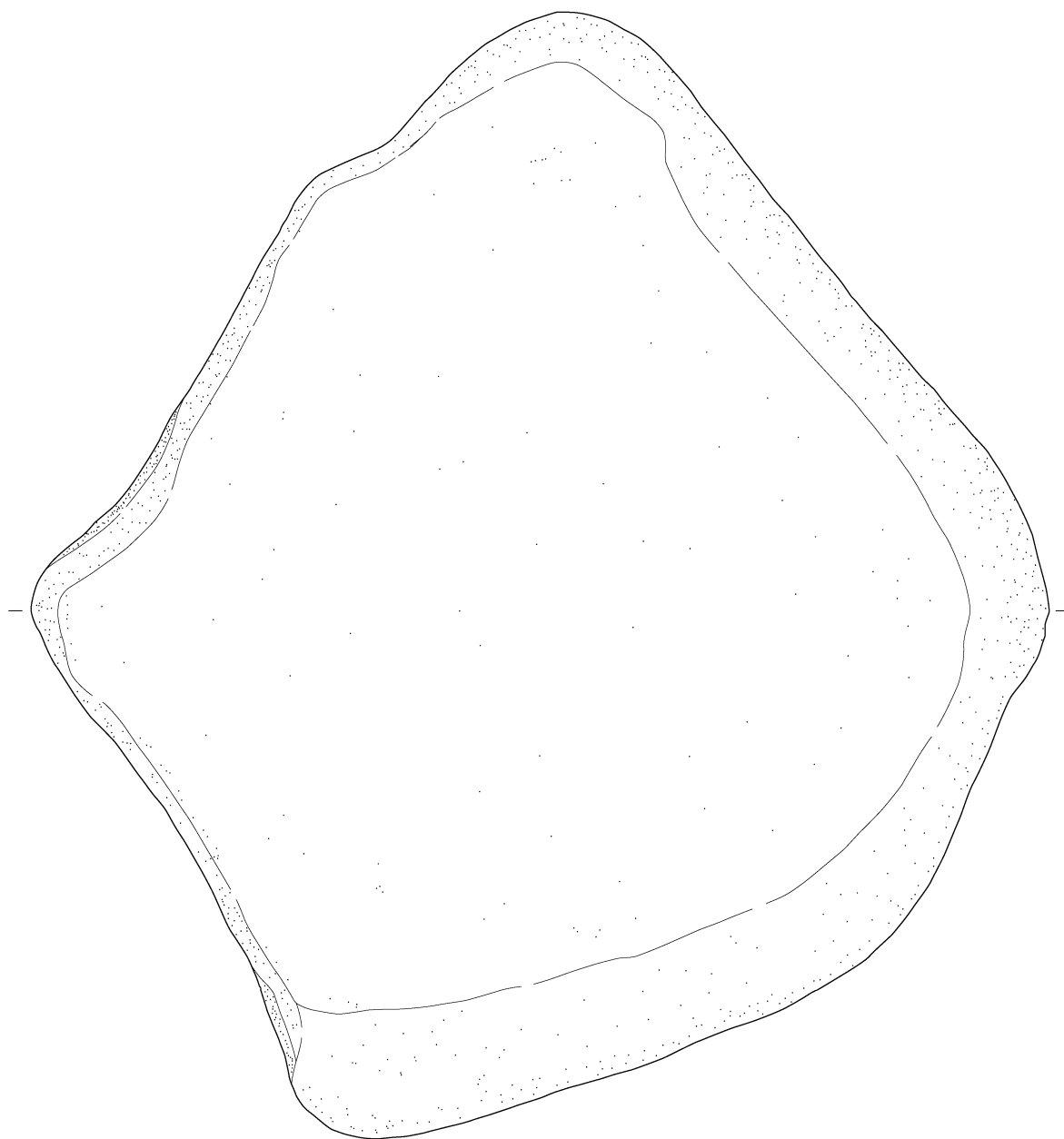


图 65 石器实测图 10 (1 : 2)

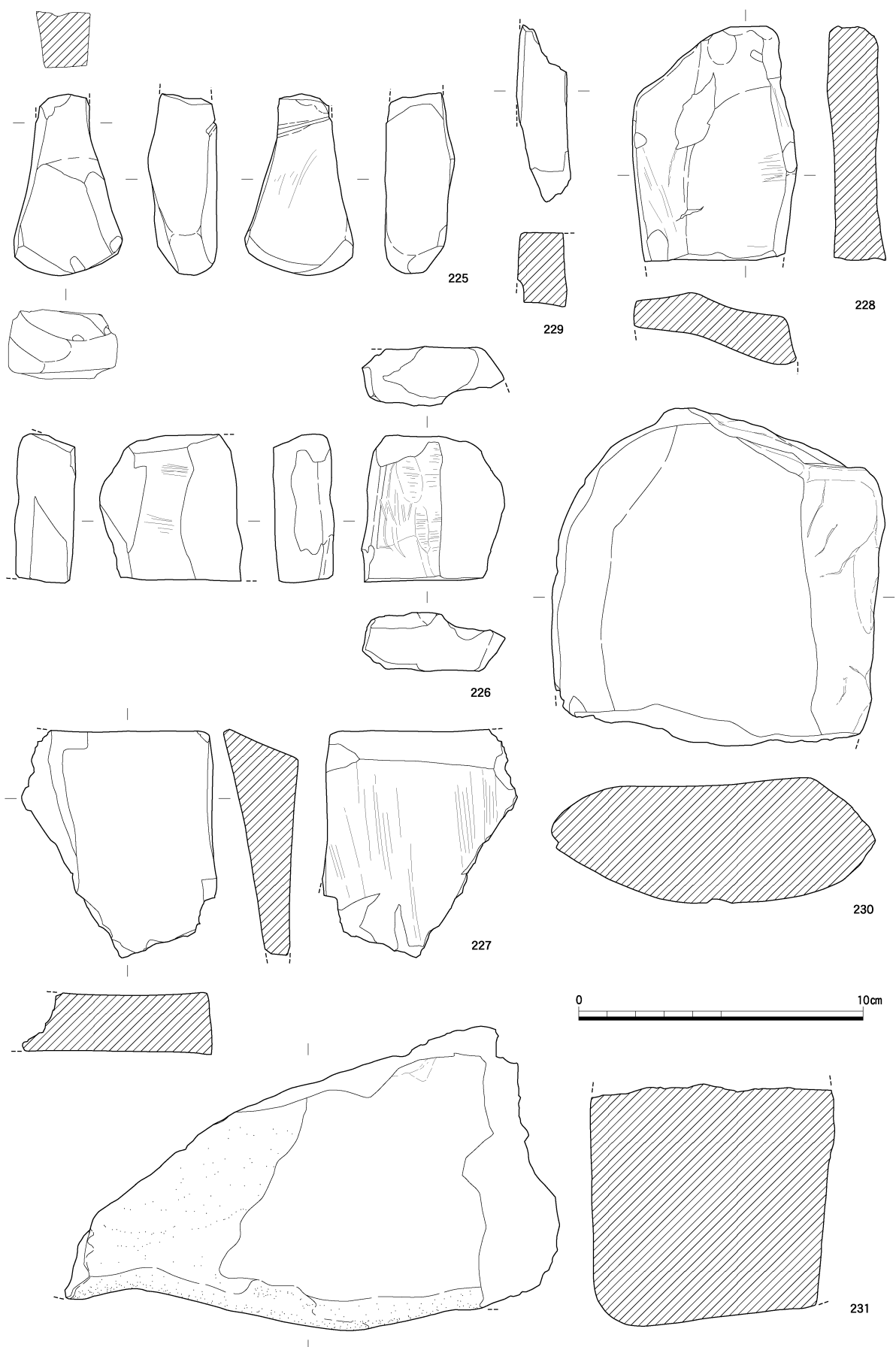


图 66 石器实测图 11 (1 : 2)

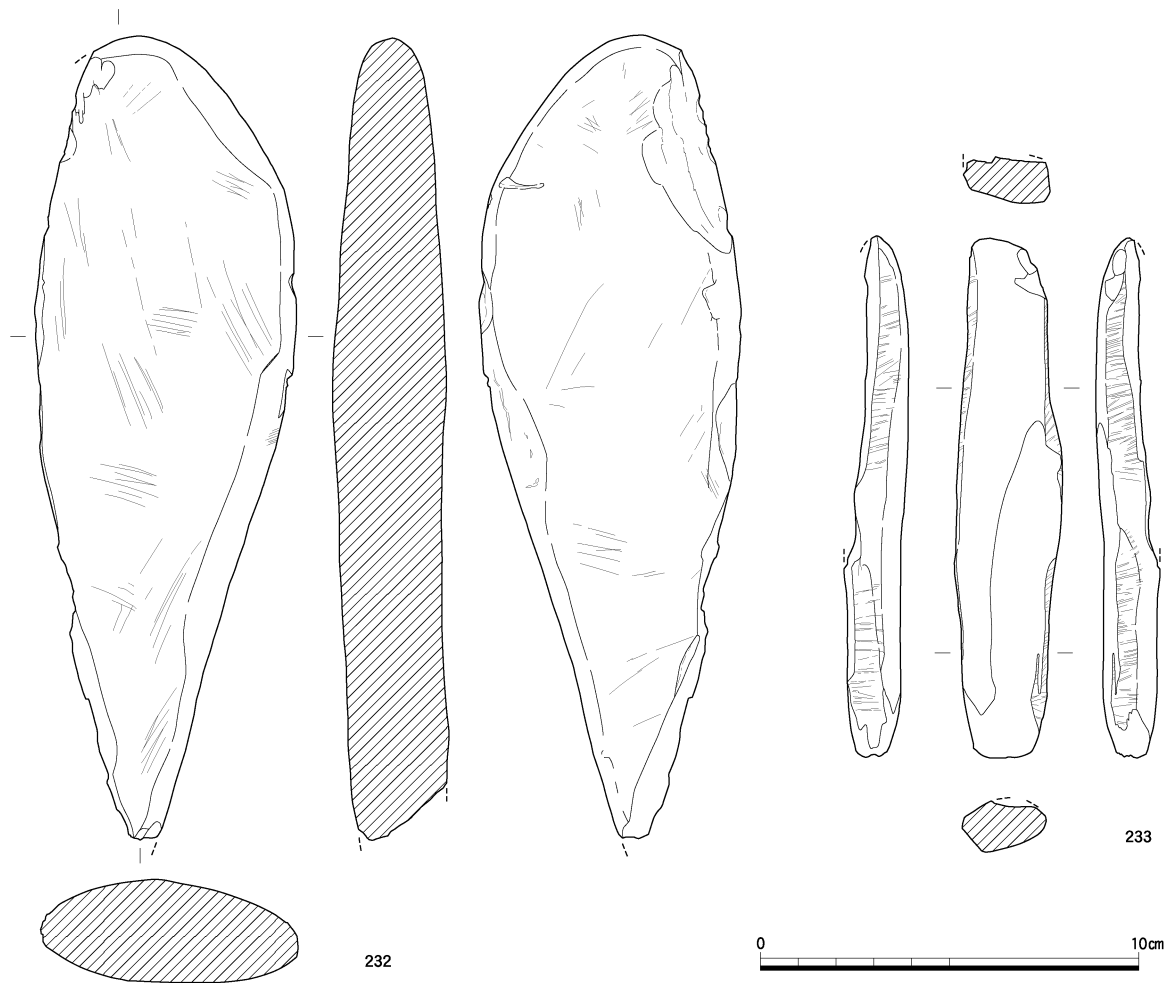


図 67 石器実測図 12 (1 : 2)

上面が浅く凹み、中心部は敲打によりさらに凹む。割れ口と上面の周囲には、炭化物が付着する。224 は竪穴住居 474 の床面に据えられていたもの。大きく平らで、表裏ともに光沢があり平滑である。

砥石 (図 66・67、図版 23- 1) 225 は、割れ口以外の全ての面に砥ぎ面が認められる。うち一面には溝状の砥ぎ跡が 1 条はしる。226 は、割れ口以外の全ての面に砥ぎ面が認められ、また割れ口の一部にも擦痕が認められることから、破損後も二次利用したと考えられる。一面には筋状の砥溝がはしる。227 は、表裏と側面に砥ぎ面が認められ、表裏面の中央部はやや凹む。上端面は砥ぎ面としては用いていないが平滑である。228 は、表面全面と側面を砥ぎ面として使用している。表面の中央部は凹む。裏面は割れのため砥ぎ面の有無は確認できない。229 は破片である。表面に砥ぎ面が認められる。側面にはない。230 は、表面に平滑な砥ぎ面が認められやや凹む。裏面の一部にも砥ぎ面として使用された平滑な箇所が認められる。231 の表面には極めて平滑な砥ぎ面が認められる。232 は砥石の可能性のあるもので、先端の尖る細長い形状で、表裏面に擦り目状の痕跡が認められる。233 も細長く、両側面に横方向の粗い条線が認められる砥石状のものである。

表 10 石器一覧表

No.	種類	遺構/層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石材	備考
169	打製石鏃	竪穴住居324貼床	21	16	3	0.55	サヌカイト	完形。
170	打製石鏃	竪穴住居474埋土洗浄中	21	19	4		サヌカイト	凹基式。
171	打製石鏃	竪穴住居148貼床	<22>	<16>	3	1.17	サヌカイト	凹基式。
172	打製石鏃	断割 地区IF	24	19	4	2.08	サヌカイト	平基無茎式。再加工品か。
173	打製石鏃	土壌128	<24>	26	4	2.34	サヌカイト	凸基無茎式。
174	打製石鏃	竪穴住居474上層	<35>	20	8	5.91	サヌカイト	凸基式。
175	打製石鏃	竪穴住居474上層	33	20	3	1.82	サヌカイト	凸基無茎式。完形。
176	打製石鏃	掘下げ 地区HJ	30	18	3	2.12	サヌカイト	凸基有茎式。
177	打製石鏃	ピット84	<35>	16	4	2.06	サヌカイト	凸基有茎式。
178	打製石鏃	ピット263	<27>	14	4	1.34	サヌカイト	凸基有茎式。
179	打製石鏃	土壌187	62	15	6	3.95	サヌカイト	凸基有茎式。
180	磨製石鏃	竪穴住居474床上5cm	40	<25>	2	2.41	粘板岩	平基無茎式。有孔。鏝なし。
181	磨製石鏃	土壌360	<42>	<23>	4	4.61	粘板岩	平基有茎式。鏝なし。
182	磨製石鏃	掘下げ GJ	46	14	3	2.13	粘板岩	凸基有茎式。鏝あり。
183	磨製石鏃	井戸249枠内(中層)	<33>	<20>	3	1.68	粘板岩	鏝なし。
184	磨製石鏃	竪穴住居148床上5cm	<32>	13	3	1.53	粘板岩	鏝あり。
185	磨製石鏃	ピット375	<33>	<15>	2	1.37	粘板岩	鏝なし。再加工品か。
186	磨製石鏃	竪穴住居148貼床	<60>	<15>	<4>	4.06	粘板岩	鏝あり。2片あるが同一個体。
187	磨製石鏃	柱穴275	<56>	<13>	<3>	3.45	粘板岩	鏝なし。
188	石小刀	土壌215	<31>	18	8	2.31	サヌカイト	内湾部に突起あり。
189	石錐	ピット307	<36>	21	6	3.22	サヌカイト	先端欠損。
190	石錐	竪穴住居474床直上	<38>	19	4	2.74	サヌカイト	先端欠損。
191	石錐	竪穴住居214	47	20	6	5.03	サヌカイト	
192	石錐か	竪穴住居484	27	20	3	3.15	サヌカイト	二次加工ある剥片。
193	磨製石錐	溝400	<45>	6	3	1.34	粘板岩	
194	2次加工ある剥片	ピット331	33	21	7	5.30	サヌカイト	
195	2次加工ある剥片	掘下げ 地区HI	36	23	4	3.40	サヌカイト	
196	2次加工ある剥片	土壌349	29	<17>	4	2.23	サヌカイト	
197	2次加工ある剥片	竪穴住居428	29	<18>	6	3.45	サヌカイト	
198	2次加工ある剥片	竪穴住居148	<51>	29	5	10.93	サヌカイト	
199	2次加工ある剥片	掘下げ 地区GL	49	28	8	11.60	サヌカイト	
200	石庖丁	竪穴住居428	<137>	33	7	62.81	泥質片岩 (黒色片岩)	2孔あり。片側を欠損。
201	石庖丁	土壌177	<65>	<24>	6	14.53	粘板岩	2孔あり。
202	石庖丁	掘下げ 地区EI	<66>	<16>	5	8.39	粘板岩	
203	石庖丁	竪穴住居148床上5cm	<85>	43	5	29.67	粘板岩	2孔あり。

※ 〈 〉 は残存値。石材の青字は橋本氏の鑑定によるもの。

No.	種類	遺構／層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石材	備考
204	大型石庖丁	攪乱	〈80〉	62	〈12〉	93.49	泥質片岩 (黒色片岩)	破片。1孔残存。
205	大型石庖丁	落ち込み429	〈80〉	〈69〉	6	40.85	泥質片岩 (黒色片岩)	
206	磨製石剣	竪穴住居148	〈86〉	〈54〉	〈16〉	81.29	粘板岩	
207	磨製石剣	竪穴住居246壁溝	〈46〉	37	10	20.03	粘板岩	
208	薄型鑿状石器	柱穴493	65	29	3	9.40	粘板岩	
209	薄型鑿状石器	竪穴住居148貼床	〈60〉	〈28〉	5	7.91	粘板岩	
210	薄型鑿状石器	掘下げ 地区GL	〈31〉	〈20〉	5	2.98	粘板岩	
211	太型蛤刃石斧	ピット272	〈68〉	68	46	309	ヒン岩	
212	太型蛤刃石斧 未製品	土壙479	208	96	49	1757	ヒン岩	石皿の縁辺部を荒割する。
213	太型蛤刃石斧 未成品	土壙474炉下層落ち込み	〈141〉	83	44	916	ヒン岩	転用か。
214	柱状片刃石斧	竪穴住居474床上5cm	〈100〉	42	29	209.20	泥質片岩 (黒色片岩)	
215	扁平片刃石斧	ピット130	123	65	12	194.97	泥質片岩 (黒色片岩)	
216	敲石	ピット313	85	66	61	473	脈石英	
217	敲石	竪穴住居148床上5cm	94	40	35	177.647	流紋岩質凝灰岩	
218	敲石	竪穴住居148床上5cm	89	53	13	90.88	頁岩～粘板岩	
219	敲石	竪穴住居474床上5cm	〈50〉	51	50	256	泥質フォルン フェルス	
220	凹石	竪穴住居148	134	43	35	309	頁岩～粘板岩	
221	石皿	土壙500	〈125〉	〈125〉	〈34〉	929	ヒン岩	
222	石皿	竪穴住居148	〈106〉	98	25	356	ヒン岩	
223	石皿	井戸249枠内	〈158〉	〈131〉	50	1447	砂岩	
224	石皿	竪穴住居474床直上	332	295	72	9040	ヒン岩	
225	砥石	掘下げ 地区GL	〈64〉	38	24	62.39	流紋岩	
226	砥石	竪穴住居324床上5cm	〈48〉	52	21	65.28	珪質頁岩～珪 質粘板岩	
227	砥石	竪穴住居214貼床	〈80〉	〈67〉	24	134.037	砂岩	2片が接合。
228	砥石	土壙215	〈82〉	58	18	131.00	珪質頁岩～珪 質粘板岩	上面に2箇所の磨面。 大きく凹む。
229	砥石	竪穴住居324床上5cm	〈62〉	〈18〉	〈26〉	39.13	珪質頁岩～珪 質粘板岩	小片。
230	砥石	竪穴住居148床上5cm	〈118〉	114	42	924	砂質フォルン フェルス	
231	砥石	竪穴住居148最上層	〈173〉	〈100〉	〈85〉	2059	砂岩	
232	砥石か	竪穴住居148床上5cm	〈211〉	〈79〉	30	561	泥質フォルン フェルス	
233	砥石か	竪穴住居148床上5cm	138	28	15	75.00	頁岩～粘板岩	

(5) 金属製品 (図 68・69)

234 は、竪穴住居 148-D から出土した銅鏃である。住居の肩口から出土したが、住居が埋没する過程で埋まったものと考えられ、この住居に伴うものであるとの断定はできない。遺存状態は悪く、残存長は 3.7 cm、残存幅は 1.2 cm、最大厚みは 0.4 cm。柳葉形と考えられ、有茎で鏃身の中央には鑄が認められる。

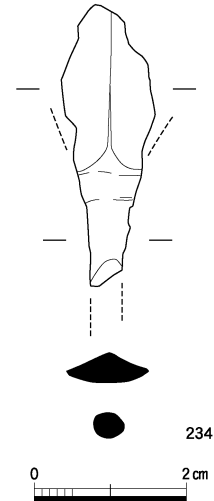


図 68 銅鏃実測図 (1:1)

(6) 玉類 (図 70・71、図版 23- 2)

玉類は、石製の勾玉・管玉・白玉とガラス製の小玉が出土した。235 の勾玉は滑石製の定形勾玉である。この勾玉が出土したピット 116 からは他に古墳時代の土師器と弥生土器の破片が出土している。236 は、碧玉製の管玉で、風化が著しいが縦方向の研磨痕が確認できる。穿孔は両側から行っている。237～239 は滑石製の白玉。237 は、中央に稜があり、算盤玉状の形状を示す。240～253 はガラス小玉である。240～253 は単色のもので、小口径が 2 mm、厚さ 1 mm の極小のものから、小口径 4 mm、厚さ 3 mm のものまで大きさにはばらつきがある。色調は肉眼観察で 245～247 の濃青色透明のものとそれ以外の青緑色透明の 2 種類が認められた。蛍光 X 線による非破壊の定性分析では、全てカリガラスで、濃青色の 3 点は定色材にマンガンと鉄が、青緑色の 10 点は定色材に鉄と鉛を含む銅が使用されているとの結果が得られた。⁵⁾ 253 (図 71) は、肉眼観察では中心に青色透明、周囲に白色不透明、縞状に青色不透明の 3 種のガラスの使用が認められた。非破壊蛍光 X 線分析で、ヒ素を含む鉛ガラスであり、中心の青色透明のものは定色材に鉄・マンガンと少量のコバルトが、縞状の青色不透明のものは定色材に鉄・マンガンと多量のコバルトが使用されていることが判明した。



図 69 銅鏃 234

これらの玉類の帰属時期についてであるが、現在までに竪穴住居 474 の土壌洗浄で出土した資料の中には相対としては 1 % 未満であるが、点数にして約 10 点の須恵器と青磁の微細破片の混入が見られた。この住居は耕作土直下で検出し、近世の耕作溝や土取り穴に削平されるためその一部が残存したものと考えられ、玉類に関しても混入の可能性が残るが、滑石製白玉 239 とガラス小玉 240・241 に関しては発掘調査中に出土し (図 27・30)、出土状況を確実に捉えられる資料である。そのこと

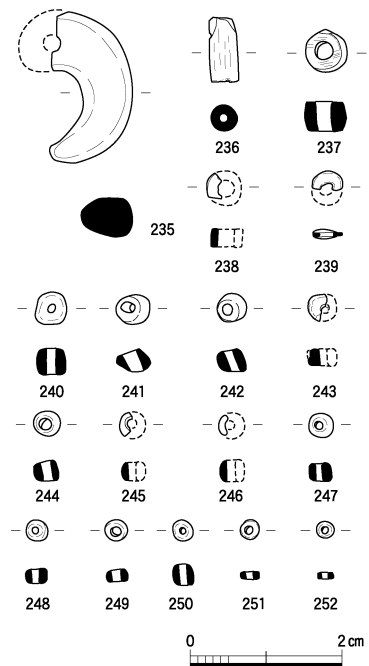


図 70 玉類実測図 (1:1)

から、これらと同傾向の分析結果を得た 242～252 の単色ガラス小玉については、混入の可能性は低いと考えられる。ただし、ガラス小玉 253 についてはこれらと全く様相を異にすることから、現状では時期の特定は困難である。その他の遺物も含め詳細な分析を待って再度検討を行いたい。

(7) 動植物遺体・その他

井戸 249 枠内埋土からは種子が出土し、完形に近いものが 21 点あった。2 点がスモモ、他はすべて桃で、この桃の種子のうち 5 点に食痕が認められた (図 72)。



図 71 ガラス玉

表 11 玉類一覧表

No.	種類	出土遺構	小口径 (mm)	孔径 (mm)	厚さ (mm)	長さ (mm)	重量 (g)	色 調	材質	備 考
235	勾玉	ピット116			5.0	<20.0>	1.532		滑石	頭部欠損。
236	管玉	竪穴住居474 埋土洗浄	3.5	1.0		8.5	0.097		碧玉	両側から穿孔。
237	白玉	竪穴住居474 埋土洗浄	4.75	2.0	4.0		0.155		滑石	
238	白玉	竪穴住居474 埋土洗浄			2.5		0.019		滑石	3/4欠損。
239	白玉	土壙215	4.0	1.5	0.5		0.020		滑石	1/2以上欠損。
240	小玉	土壙479	4.0	1.0	3.5		0.074	青緑色透明	アルカリ ガラス	平面図に出土地点 あり。
241	小玉	土壙215	3.25	1.75	3.0		0.059	青緑色透明	アルカリ ガラス	平面図に出土地点 あり。
242	小玉	竪穴住居474 埋土洗浄	3.0	1.0	3.0		0.053	青緑色透明	アルカリ ガラス	
243	小玉	竪穴住居474 埋土洗浄			2.25		0.018	青緑色透明	アルカリ ガラス	二次焼成受ける。
244	小玉	竪穴住居474 埋土洗浄	2.5	1.0	2.75		0.038	青緑色透明	アルカリ ガラス	
245	小玉	竪穴住居474 埋土洗浄			2.5		0.016	濃青色透明	アルカリ ガラス	2/3欠損。
246	小玉	竪穴住居474 埋土洗浄			2.75		0.013	濃青色透明	アルカリ ガラス	1/3欠損。
247	小玉	竪穴住居474 埋土洗浄	2.75	0.75	2.5		0.038	濃青色透明	アルカリ ガラス	
248	小玉	竪穴住居474 埋土洗浄	2.75	0.75	2.0		0.026	青緑色透明	アルカリ ガラス	
249	小玉	竪穴住居474 埋土洗浄	2.5	1.0	1.5		0.018	青緑色透明	アルカリ ガラス	
250	小玉	竪穴住居474 埋土洗浄	2.5	0.75	2.75		0.027	青緑色透明	アルカリ ガラス	
251	小玉	竪穴住居474 埋土洗浄	2.25	0.75	1.0		0.010	青緑色透明	アルカリ ガラス	
252	小玉	竪穴住居474 埋土洗浄	2.0	0.75	0.75		0.010	青緑色透明	アルカリ ガラス	
253	小玉	竪穴住居474 埋土洗浄	1.75	0.5	1.5		0.014	青色透明・ 白色不透明・ 青色不透明	鉛ガラス	3色

※ 〈 〉 は残存値。



図 72 食痕のある種子



図 73 赤色顔料

図 73 は、井戸 249 枠内埋土から出土した赤色顔料である。蛍光 X 線分析で、⁶⁾不純物の混じらない良質なベンガラであるとの結果を得た。

また、水洗篩別を行っている竪穴住居 474 埋土と土壙 479・500 からは、現時点で炭化米、炭化種子、砕けた骨、鉾滓、鉄片などが出土している。

註

- 1) 奈良時代の土器の形式分類は、奈良文化財研究所『平城宮発掘調査報告 XVI』2005 年に従った。
- 2) 京都大学教授西山良平氏の御教示による。
- 3) 須恵器の型式名については、田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981 年に従った。
- 4) 一部の石材は、京都府立山城郷土資料館橋本清一氏に鑑定を依頼した。橋本氏に鑑定していただいたものについては、表 10 の石材の項を青字で表示している。
- 5) 蛍光 X 線による分析は奈良文化財研究所の肥塚隆保氏とくらしき作陽大学の北野信彦氏に依頼し、分析結果に関して御教示をいただいた。この分析データについては、追加資料とともに年報にて報告を行う予定である。
- 6) 蛍光 X 線による分析はくらしき作陽大学の北野信彦氏に依頼した。

参考文献

- 金関恕・佐原真編『弥生文化の研究 5 道具と技術 I』雄山閣 1985 年
 古代の土器研究会編『古代の土器 1 都城の土器集成』1992 年
 古代の土器研究会編『古代の土器 2 都城の土器集成 II』1993 年
 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981 年
 辻 美紀「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室 1999 年
 平井 勝『弥生時代の石器』ニューサイエンス社 1991 年
 森岡秀人「山城地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編 II』木耳社 1990 年
 和田晴吾「土錘・石錘」『弥生文化の研究』第 5 巻 雄山閣 1985 年

5. ま と め

今回の調査では弥生時代中期から近世の遺構を検出し、当地域の歴史の変遷を考える上で貴重な成果を得ることができた。ここでは既往の調査成果と合わせて、明らかになった点と問題点についてまとめる。

(1) 奈良時代の遺構について

今回検出した奈良時代の遺構には、掘立柱建物 33・35・63、井戸 249 がある。これらの遺構はすべて正方位を向く。井戸 249 は 8 世紀後葉～末葉の短い期間に開削と埋め戻しが行われている。掘形も含め規模が大きく、丸太組と横板組の 2 段構造を採り、出土遺物に墨書土器、円面硯、瓦、製塩土器を含むことなどが特徴として挙げられる。井戸と建物 63 とは、井戸枠と建物の南北幅の中心を通るラインが一致することから、建物 63 は井戸覆屋と考えられる。また、井戸西側の建物 33 を構成する柱穴 267 からは井戸と同じ 8 世紀後葉～末葉の遺物が出土している。さらに、北側の建物 35 と井戸の東西幅の中心を通るラインが一致することから、井戸とこの 2 棟の建物は一連のものとして捉えられ、井戸を中心とした建物配置が採られていたと考えられる。

西京極遺跡は奈良時代には山城国葛野郡の範囲に含まれる。西京極遺跡では、2006 年に今回の調査地の約 270 m 北西で行った調査（図 5-64）でも、奈良時代の総柱の掘立柱建物 1 棟と、竪穴住居 3 棟を検出している。これらは全て正方位を向き、竪穴住居 83 では白鳳時代の平瓦が竈に転用され、ベンガラを塗布した須恵器の杯蓋なども出土した。約 400 m 北西で 1994 年に行われた調査（図 5-28）でも、8 世紀末に廃絶したと考えられる掘立柱建物 1 棟が検出されており、西京極遺跡一帯は、奈良時代には葛野郡の中心的集落の一つであったと考えられる。さらに、これらの調査の遺構と出土遺物の内容から見て、近辺に郡の役所などの公的な施設が存在した可能性がある。しかし、その性格や位置についてはまだ不明な点が多く、今後に期したい。

(2) 弥生時代後期の遺構・遺物について

1) 竪穴住居の変遷と配置

今回の調査では、弥生時代後期前半の竪穴住居を 8 棟検出した。いずれも遺存状態が良好で、当該時期の竪穴住居の構造を知る好材料である。竪穴住居 148・428・475・476 は、出土土器の年代観から見て、数十年間に拡張を含めると、ほぼ同じ場所に連続して 9 回建て替えられたことになる。また、竪穴住居 214 や 474 は建物の総面積に対して、堤で囲まれた炉状施設の面積の占める割合が高い。炉状施設の構造についても、連結した深い土壌を持ち脱湿を行うなどの特徴があり、いずれもガラス小玉が出土するなど、一般居住住居とは異なる建物の性格を考慮に入れる必要があるだろう。これらのうち 4 棟の竪穴住居の 5 箇所の主柱穴では、柱抜き取り後に土器埋納祭祀が行われたこともわかった。

全 8 棟のうち、切り合い関係や出土遺物から前後関係が把握できるものの中では、竪穴住居 474 が最も古く、次いで竪穴住居 214 が建てられる。この竪穴住居 214 の中央土壇 215 から出

土した土器の中には、竪穴住居 148- D床面出土土器に近い様相をもつ土器が見られることから、竪穴住居 148 建て替え前の竪穴住居 428 もしくは 476 と一時期並存していた可能性が高い。竪穴住居 428・476 の中央土壌は深さがあり連結する構造であることも、竪穴住居 474・214 と共通性がある。竪穴住居 148- D と 324 は方位の振れや出土土器から廃絶時期はほぼ同時期と考えられ、今回検出した弥生時代の竪穴住居の中では最も新しい。

今回の調査地に隣接する敷地で 1989 年に行われた調査（図 5-49）でも、竪穴住居 5 棟が検出されている。それと今回の調査地との位置関係を示したものが図 74 である。1・2・3 号住居跡は竪穴住居 148・324 と方位の振れ、拡張の方法に類似点が多く同時期のものであろう。また、切り合い関係や振れから、4 号住居は竪穴住居 214 と 5 号住居は竪穴住居 474 との関係が考えられる。2・3 号住居は竪穴住居 148・324 と東西に並ぶように建てられ、4・5 号住居もそれに重複している。対して 1 号住居は約 30 m 北に位置し、その間は空間地となっている。今回の調査でも北側には弥生時代の竪穴住居は存在しないことから、空間地を囲んで竪穴住居が配置されて

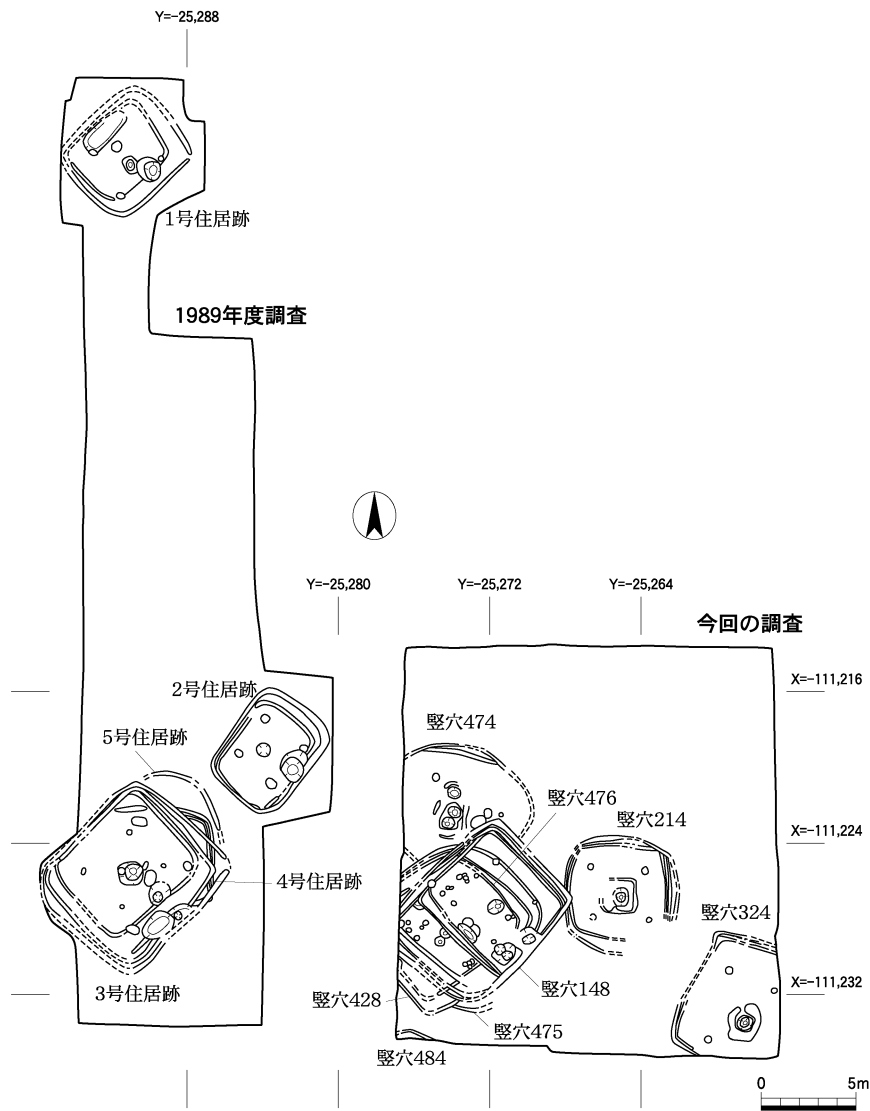


図 74 弥生時代後期の竪穴住居配置図（1：400）

いたと考えられる。集落の空間利用の有り方を考える上で重要な成果といえる。今回の調査地が具体的に集落全体の中でどのような位置付けの場であったかが問題であり、今後明らかにしていく必要がある。

2) 弥生時代後期の遺物

今回の調査では、多量の弥生土器が出土した。特に竪穴住居や土壙からは良好な一括資料を得ることができた。竪穴住居床面出土の土器は全て、弥生時代後期前半に納まるが、供献形態の土器を中心に系統別に型式変化を捉えられる資料である。従来から山城地域の特徴として挙げられる近江地域からの影響に加え、高杯や器台に中東部瀬戸内あるいは摂津などの影響が看取でき、淀川水系に属する桂川流域に位置する西京極遺跡の一つの特徴と捉えることができるだろう。

京都市域における弥生時代後期の土器編年は、資料の時期・地域両面での偏在性が問題となり、進展しているとは言い難い状況にある。特に小地域単位の様相の差異についてはほとんど明確にされていない。しかし近年、今回の成果をはじめ、京都市内中心部においても方形周溝墓や竪穴住居に伴う良好な資料が増加していることから、京都市域における後期土器編年案の再検討を早急の課題としたい。その中で、今回出土した土器群は桂川左岸地域の基準資料となるものである。

また石器類に関しても、今回のような多種多様の出土は京都市域においてはきわめて稀である。さらに、多量の剥片や未製品も出土しており、集落内で石器の二次加工が行われていたと考えられる。これらの資料を基に今後、当地域の石器の存続時期や、器種組成が問題となろう。

(3) 調査地の歴史の変遷

最後に、今回の調査で判明した当地の歴史の変遷を述べたい。今回見つかった最も古い遺構である土壙 199 をはじめ、弥生時代中期の遺構は調査区の南側に集中する。調査区南西で 2005 年に古代学協会が行った調査で中期の竪穴住居や溝が見つかることから、¹⁾ 中期の集落は今回の調査地より南に展開する可能性がある。弥生時代後期前半には、前述したように竪穴住居が密集して建てられ、今回の調査地周辺が集落の中心となったと考えられる。弥生時代後期後半から古墳時代前期までは、遺構・遺物ともに空白期間であるが、古墳時代中後期には、竪穴住居や土壙の出土から再び集落の一部に含まれることがわかる。6 世紀後半から 7 世紀の遺構は出土していない。この時期は西京極遺跡全体を見ても、最も遺構・遺物の希薄な時期である。8 世紀には葛野郡の一部となり、その頃の様子は、(1) で述べた通りで、井戸 249 が平安京遷都と軌を一にして埋められることは興味深い。平安時代の明確な遺構としては、前期中葉頃の地鎮遺構と考えられる土壙 301 と柱列 178 が確認できたのみである。それ以後の遺構は、近世の土壙が掘削されるまで存在せず、平安時代前期以降は現代にいたるまで宅地としては利用されなかったと考えられる。

註

- 1) 未報告のため、京都市文化財保護課から御教示をいただいた。

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうろくじょうしぼうにちょうあと・にしきょうごくいせき							
書名	平安京右京六条四坊二町跡・西京極遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2006-30							
編著者名	柏田有香							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2007年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 ろくじょうしぼうにちょうあと 六条四坊二町跡 にしきょうごくいせき 西京極遺跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区 さいいんしみずちょう 西院清水町	26100	931	34度 59分 50秒	135度 43分 23秒	2006年12月 11日～2007 年2月9日	450㎡	工場新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西京極遺跡	集落跡	縄文時代		石器				
平安京右京 六条四坊二町跡	都城跡	弥生時代	竪穴住居、土壇、 ピット、溝	弥生土器、土製品、石 器、金属製品、ガラス 玉、石製玉、動植物遺 存体				
		古墳時代	竪穴住居、土壇、 柱穴	土師器、須恵器				
		奈良時代	掘立柱建物、井戸	土師器、須恵器、平瓦、 丸瓦、木製品、土製品、 その他				
		平安時代	柱列、土壇	土師器、緑釉陶器				
		近世	土壇群	染付、焼締陶器、輸入 磁器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-30
平安京右京六条四坊二町跡・西京極遺跡

発行日 2007年3月31日

編集
発行
住所 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 共同印刷工業株式会社

住所 京都市右京区西院清水町 156 番地の 1
〒 615-0052 TEL 075-313-1010



共同印刷工業株式会社の新社屋の門
調査地の土を採取して焼かれた陶板が使用されています。